

英語動詞派生前置詞の共時的・通時的記述研究
—文法化への意味論的アプローチ—

林 智昭

目次

謝辞.....	v
第1章 序論.....	1
1.1 研究背景.....	1
1.2 分析対象.....	3
1.3 本論の構成.....	4
第2章 理論的背景.....	6
2.1 認知言語学の言語観.....	6
2.2 カテゴリー化とプロトタイプ理論.....	8
2.3 文法化と汎時性.....	10
2.4 コーパス言語学と文法化研究.....	13
2.5 主観性.....	14
第3章 英語動詞派生前置詞の概観.....	17
3.1 文法書における記述.....	17
3.2 動詞派生前置詞と文法化.....	21
3.3 先行研究.....	25
3.3.1 動詞派生前置詞の包括的記述.....	25
3.3.2 動詞派生前置詞の通時的研究.....	30
3.3.3 生起ジャンルとレジスター.....	32

3.4	先行研究の批判的検討と問題の所在.....	33
3.5	まとめ.....	35
第4章 共時的分析.....		37
4.1	前置詞性・動詞性.....	37
4.2	前置詞性の調査1: 容認性判断.....	38
4.2.1	分裂文.....	39
4.2.2	強意副詞 <i>right</i> との共起.....	41
4.2.3	調査1のまとめ.....	43
4.3	前置詞性の調査2: コーパス.....	45
4.4	動詞性の調査.....	48
4.4.1	調査の背景.....	49
4.4.2	調査の目的.....	51
4.4.3	調査の結果.....	51
4.4.4	考察と課題.....	53
4.5	4章のまとめ.....	55
第5章 通時的分析.....		56
5.1	目的と概要.....	56
5.2	分析の枠組み.....	57
5.2.1	<i>-ing</i> 形の振る舞い.....	57
5.2.2	脱範疇化のクラインに基づく品詞分類.....	58
5.2.3	動詞派生前置詞の認定基準.....	61
5.3	事例分析1: <i>excluding</i>	63
5.3.1	辞書における <i>excluding</i> の記述.....	63

5.3.2	<i>excluding</i> の通時的変化	64
5.3.3	考察.....	68
5.4	事例分析 2: <i>preceding</i>	71
5.4.1	<i>following</i> vs. <i>preceding</i>	71
5.4.2	<i>preceding</i> の通時的変化.....	74
5.4.3	まとめ.....	79
5.5	事例分析 3: <i>barring</i>	79
5.5.1	背景.....	80
5.5.2	<i>barring</i> の通時的変化.....	81
5.5.3	考察.....	86
5.5.4	まとめ.....	87
5.6	事例分析 4: <i>respecting</i>	88
5.6.1	<i>respecting</i> の前置詞的用法	88
5.6.2	<i>respecting</i> の通時的変化.....	89
5.6.3	考察.....	92
5.6.4	まとめ.....	93
5.7	5章のまとめ.....	94
 第6章 動詞派生前置詞の生起ジャンルと文法化.....		96
6.1	目的と概要	96
6.2	イギリス英語: BNC のデータより	96
6.2.1	事例研究 1: <i>considering</i> の前置詞・接続詞用法	96
6.2.2	事例研究 2: 「除外」の意味を表す周辺的前置詞.....	100
6.3	アメリカ英語: COCA のデータより	106
6.4	生起ジャンルと文法化.....	107

第7章 結語.....	109
7.1 総括.....	109
7.2 本研究の意義と貢献.....	112
7.3 展望.....	113
Appendix 1 前置詞性の作例テスト.....	116
Appendix 2 動詞性の作例テスト.....	122
Appendix 3 文法化した <i>considering</i> の生起ジャンル.....	127
参考文献.....	136

謝辞

本論文は京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程に入学して以来の研究をまとめたものである。執筆に際し多くの方々にお世話になった。まず、進路に悩んでいた筆者を温かく研究室の一員として迎え、寛大な目で見守り続けて下さった山梨正明先生に御礼申し上げます。マイペースに歩む筆者が、好奇心の赴くままに研究を進めることができたのは、山梨先生が心の支柱であったからに他ならない。山梨先生には、博士課程進学後も学会・研究会において励ましの言葉を掛けて頂いた。博士課程の指導教員である谷口一美先生は、研究室のゼミや面談を通して、洞察力と先見性をもった鋭いコメントで研究の道筋を示して下さいました。学会発表の折、会場にはいつも谷口先生のお姿があり、発表後には丁寧な指導を賜った。本論文の審査にあたり、副査をつとめて下さった藤田耕司先生、河崎靖先生には、加筆修正に向けての貴重なご意見を頂いた。心より感謝申し上げます。

旧山梨研究室・現谷口研究室の皆様には、言語フォーラム、京都言語学コロキウム (KLC) における発表に際し、分析に関する鋭い指摘とコメントを頂いた。研究室の同級生である黒田一平氏、河野亘氏、菅谷友亮氏には、今日に至るまで、研究の遂行と論文執筆にあたり惜しみないご協力を頂いた。学生時代最後の節目となる博士論文を終えようとしている今、感慨深くあると同時に寂しくもある。皆様と共に過ごした日々は生涯の財産となった。重ねて御礼申し上げます。

本論文を構成する内容の一部は、関西言語学会、日本語用論学会、日本英文学会、日本英語学会、関西英語語法文法研究会において発表を行う機会に恵まれた。質疑や議論において頂いたコメントを、研究の発展に反映させることができたのか、自信が持てず心苦しい限りである。残された課題の多くは、今後の研究を通し、引き続き取り組んでいく所存である。英文の検討、容認性判断においては、近畿大学英語村 (E-Cube) スタッフの皆様、同僚・友人の皆様、多大なるご協力とご支援を賜った。無論、本論文における一切の誤り、不備が筆者の責任であるのは言うまでもない。

本研究の一部は科研費（特別研究員奨励費、研究課題番号: 15J00373）の助成を受けている。研究生生活駆け出しの時期を支えて頂き、安心して研究に取り組むことができた。ここに深謝申し上げます。

最後に、研究生生活を温かく見守り、支えてくれている家族に感謝したい。

2020年2月20日

林 智昭

第1章 序論

1.1 研究背景

言語は、徐々に変化している。言葉の変化を観察する手段の一つに、通時的視点から、数世紀にわたる言語資料を辿るという方法がある。21世紀に入り、コンピューター検索技術の発達から、複数の時代にわたり多くの言語データを観察することが容易になった(秋元 2002: 3)。近年においては、いわゆる、言語の「ビッグ・データ」ともいえる「コーパス (corpus)」がさらに拡充されつつある。先行研究の記述をみると、ここ10年の間にもこれらの技術とデータベースの整備は目覚ましい勢いで進んでいることが伺われる(Mair 2004; Traugott and Trousdale 2013: 40-43)。通時的研究のみならず、現在の言語研究一般において、この種の量的なアプローチは、1つの大きな潮流をなしている(cf. 石川 2012, Otani 2013, Rissanen 2002, 菊地 2014, Mair 2004, Biber *et al.* 1999, Leech *et al.* 2009, Traugott and Trousdale 2013)。その一方で、コンピューターの検索技術も存在しなかった時代に、先人達が残した記述が着目され、その意義と貢献が見直されつつある。具体的には、斎藤秀三郎の「イデオモロジー (ideomology)」などの明治・大正の時代にまで遡る、わが国における伝統的な英語の語法・文法研究のことである(cf. 住吉 2016: 17; 八木 2011; 中村 2015)。当時の言語研究においては、大規模データを量的に扱うのではなく、手作業による地道な事例の収集と検討がなされていた。斎藤の『熟語本位英和中辞典』は、現代の学校における英語教育や学習英文法に大きな影響を与えているものの、現代英語では観察されない表現が収録されているという(斎藤 2016: 1-4)。それはすなわち、近代英語(特に後期近代英語)の時代における実際の使用例から収集されているからに他ならない(cf. 斎藤 2016: 3)。個々の事例を手作業により検討していくアプローチは、上述の量的なアプローチに対し、「質的アプローチ」と位置づけることができる。両者は、いずれか一方が優れている、と断じることはできない。Jespersen(1954), Poutsma(1926), Curme(1979), Visser(1972)らの成果は、検索技術が発達した今世紀においても、大いに注目すべき知見を提供する。

では、語彙項目は、どのようにして文法項目へと変化していくのだろうか。この問題は、「言語変化」(Croft 2000, Bybee 2015)の一つである「文法化 (grammaticalization)」の研究において取り上げられている。具体的には、名詞・動詞といった語彙項目に属する語(内容語)が、前置詞・接続詞といった文法機能を担う語(機能語)へと通時的に変化していく現象などが対象となり、言語学・英語学の領域において様々な研究者が関心を寄せている。その中でも、*during*, *pending*, *except*, *past*などの通時的に動詞に由来する前置詞(安藤 2005: 622)、いわゆる「動詞派生前置詞 (deverbal

prepositions; 訳語は秋元 2002, 2014)」は、通言語的にみられる興味深い文法化事例のひとつとして着目されている。これらの現象は、Poutsma (1926), Jespersen (1954), Visser (1972), Quirk *et al.* (1985), Görlach (1991), Declerck (1991) においても言及がなされている。

(1) *Following* the signing of the peach treaty and British recognition of American independence, Washington stunned the world when he surrendered his sword to Congress on Dec. 23 1783 and retired to his farm at Mount Vernon. (Leech *et al.* 2009: 7)

Leech *et al.* (2009: 7-8) によると、古英語・中英語と比べ、近年の英語に関する研究は、(1) の動詞派生前置詞にみられるような文法的な変化よりも、語彙・音韻の変化に関するものが多いという。(1) の *following* は、現在分詞にみえるものの、前置詞 *after* と同等であると分析される。このような前置詞への文法化は、語彙・音韻と比べて漸進的な性質を持つ変化であることが分析を困難にしている (Leech *et al.* 2009: 8)。本研究は、このような言語変化の漸進性を、共時・通時の両観点から解明していくことを目的とする。

本研究の背景には、理論言語学、コーパス言語学、語法研究、などの領域が関わっている。近年の言語研究においては、冒頭に述べた (i) コーパス言語学における量的アプローチ、(ii) 英語語法・文法研究における質的なアプローチ ((i) のアプローチも用いた量的・質的検討がなされている傾向があるが; cf. 住吉 2016) は、相補的に言語研究の両輪をなしている。本論文は、言語学の中でも英語学の研究文脈に位置づけられ、(i) (ii) のアプローチにより、言語変化 (language change) の研究を進めていくものである。主たる理論的背景は「意味論 (semantics)」であり、「認知言語学 (cognitive linguistics)」の言語観に立脚している。換言すると、本論文では、従来の統語論・語用論が分析対象としてきたものも含め、言語変化における品詞カテゴリー間の変化、意味変化の揺らぎといった言語の「動的な (dynamic; Mair 2004)」側面を、意味の観点から連続的に捉え直し、包括的に規定し直していくというアプローチをとる。この種の言語観は、(i) (ii) と矛盾することなく、実際の言語使用における用例に基づき、言語記述を進めていく実証的かつ用法基盤 (usage-based) 的な言語観という点で親和性がある (cf. 住吉他 2017, Taylor 2012)。本論文は、住吉他 (2017) が述べる背景をもつ (iii) 認知言語学 (Taylor 2012) 的な意味論的言語観に立脚する、(i) (ii) 実証的英語語法研究 (住吉 2016) であり、両者に関わる分野横断的な研究と位置づけられる。具体的には、わが国における明

治・大正時代の斎藤秀三郎にまで遡る英語語法的な研究 (ii) の議論を踏まえつつ、理論言語学の中でも認知言語学のパラダイムに立脚する意味論的なアプローチ (iii) をとり、現代社会における言語資料のビッグ・データともいえるコーパスのデータ (i) を基に、英語母語話者の内省に基づく検討を行う。以下、(i)(ii)(iii) の知見を統合し、共時性・通時性の両観点に立ち、言語変化の一端を明らかにしていく。

1.2 分析対象

本研究の分析対象は、(1) の *following* のように、現在分詞（すなわち動詞的）であるのか、前置詞であるのか、解釈が困難である動詞派生前置詞である。この検討を通し、言語変化の漸進性を、共時性・通時性の接点から規定していく。本研究は、先行研究、辞書より収集した 28 の動詞派生前置詞を共時的に分析した筆者の修士論文（林 2013a）を引き継ぎ、さらに分析を深めていく。本論では、一部の章・節においては新たに 9 例を加えた (2) を分析の中心とする¹。

(2) *according to, allowing for, bar, barring, bating, concerning, confronting, considering, covering, depending on, during, except, excepting, excluding, facing, failing, following, given, granted, granting, including, lacking, notwithstanding, owing to, past, pending, pertaining to, preceding, regarding, related to, respecting, save, saving, starting, succeeding, touching, wanting*

4 章において、これらを共時的な観点から包括的に規定する。5 章以降では、個別事例に着目した事例研究を進める。

本論において分析対象とするのは、先行研究に加え、英英辞典・和英辞典において「前置詞」と分類されている *-ing* 形である。ここで、辞書により品詞分類の基準が異なる点に注意をする必要がある。例えば、5 章において分析対象とする *excluding* は、『ジーニアス英和大辞典』『リーダーズ英和大辞典』などにおいては「前置詞」とラベリングがなされているものの、Oxford English Dictionary (OED) においては「前置詞」と分類されていない。分類基準が異なる辞書を対象に事例収集を行い「動詞派生前置詞」と扱うことには、一見、基準の不統一性という点で問題があるように思われる。

¹ 林 (2013a) で検討が行われていた *rising* を含む例文は、イギリス英語を母語とする話者により容認不可能とされたため本研究では分析の対象外としている。本研究では、林 (2013a) において検討された例文の追試も行いつつ、新たに通時的視点を導入し、共時性との接点を探っていく。

本研究では、4章以降の分析において示すように、これらの事例を一貫した基準により包括的に規定していく。従って、分析対象(2)の設定において、辞書における記述の不統一性は問題とならない。むしろ、本研究を通して、英英辞典と異なる分類を行っている和英辞典における記述の妥当性を検証することとなる。本研究の背後には、国外における英語学、理論言語学研究のみならず、わが国における「英学」研究の潮流が存在し、それらの知見を土台とした上で、総合的・包括的な観点から研究を進めていく。わが国の英学(または英語学)研究における知見よりも英英辞典をはじめとする英語圏の知見を重視することは、前者を軽視する姿勢ともなりかねない。全ての先行研究を土台とし、それらの議論を検討した上で研究の出発点とすることによって、中立的な視点をもって研究を進めていくことが可能となる。

1.3 本論の構成

本論は7章からなる。具体的な参考文献は各章において言及し、本節では言及していない。

2章、3章は、本研究の背景となる二大柱であり、4章以降における分析の基盤となる。まず、2章では、文法化理論をはじめとする本研究の理論的背景を中心に、認知言語学、英語語法研究、コーパス言語学、主観化、などの理論的研究背景を概観する。本研究が立脚する言語観は、意味論の中でも特に「認知言語学」の領域に属する。認知言語学は、換言すれば、言語記述に際し、話者の「捉え方 (construal)」との関係から言語記述を進めるものである。また、従来の共時性・通時性といった分析における区分を統合し、両者の接点としての「パンクロニック (汎時的)」な視点から言語変化の動的な揺らぎを捉え直していく。また、4章以降の事例分析において立脚する、文法化の理論的枠組みとして「脱範疇化 (deategorialization)」、「重層化 (layering)」、「意味の漂白化 (semantic bleaching)」、意味変化における「主観化 (subjectification)」を概観する。

続く3章では、主に動詞派生前置詞という現象そのものについての先行研究を扱う。先行研究は、動詞派生前置詞全体に共通する特徴を論じたもの、通時的分析を行い変化のプロセスを論じたもの、文法化・言語変化との関係性を扱ったものなど多岐にわたる。本研究では、文法書の記述を出発点に、調査を進めていくこととなる。先行研究が指摘するように、動詞派生前置詞は、事例により (i) 通時的変化のプロセス、(ii) 共時的な振る舞い、が異なる。このことは、本研究において (i) 動詞派生前置詞の通時的発達に関する個別の事例研究、(ii) 動詞派生前置詞全般、または複数の事例を対象とした共時的な比較検討、といった2つのアプローチを並行して行う必要性を示す。

4章以降は言語分析である。4章では、共時的観点から、英語母語話者の内省に基づき、動詞派生前置詞を包括的に規定していく。本研究では、動詞派生前置詞の「前置詞らしさ（前置詞性）」を、典型的な前置詞の振る舞いと同様の振る舞いをみせるかどうか、という観点から推し量ることができると考える。ここでは、林 (2013a) において行われた (i) 強意副詞 *right / straight* との共起関係、(ii) 強調構文 (*cleft sentence*) の追試を行うとともに、新たに (iii) 前置詞随伴、(iv) 副詞との共起関係、いう観点からも、(I) にみられるような文法的な言語変化の漸進性、すなわち文法化の程度性を規定していく。

続く5章は通時的分析である。先行研究において検討がなされていない *excluding, preceding, barring, respecting* を分析対象とし、通時コーパス、OED といった言語データに基づき通時的变化を記述する。具体的には、言語データより得られた事例を品詞的振る舞いに基づき分類することによって、前置詞として生起し始める時期を見出し、文法化のプロセスを明らかにする。一貫した手法により言語記述を行うことで、歴史言語学、文法化研究への貢献を目指す。これらの結果は共時性とも接点を持ち、6章の分析への橋渡しとなる。

6章では、5章における分析手法を引き継ぎ、コーパスのデータにタグ付けられた情報に基づき動詞派生前置詞の生起ジャンルを検討していく。具体的には、(i) *considering* の前置詞的用法・接続詞的用法、(ii) 「除外」の意味を表す *barring, excluding, saving*、(iii) 4章において検討した前置詞随伴の動詞派生前置詞、の分析を行う。その結果と先行研究の記述を踏まえ、汎時的（パンクロニック）な観点から、通時性・共時性の接点を探っていく。結論として、文法化した動詞派生前置詞が書き言葉に生起する傾向を持つと主張する。この結論は、中英語後期に書き言葉におけるコミュニケーションの必要性から前置詞が発達したこと、いわゆる分詞構文が書き言葉において用いられること、などと整合性をもつ。すなわち、汎時的観点に立つことにより、歴史的背景のみならず、言語変化において連続性を持つ分詞構文との生起ジャンルにおける共通性が明らかになる。

最後の7章では、本論の総括を行い、言語変化、文法化、認知言語学、英語語法研究としての本研究の意義と貢献、今後の課題を述べる。英語学、言語変化の研究のみならず、英語教育などの関連分野への展望も示す。

第2章 理論的背景

本研究の背景は、理論言語学、記述言語学、コーパス言語学、意味論、英語語法研究など広範にわたる。具体的には、以下のようにまとめられる。

- (1) A. 言語変化に関する研究：文法化 (Hopper 1991, 秋元 2002, 2014, Hopper and Traugott 1993, 2003)、構文化 (Traugott and Trousdale 2013)、(間) 主観化 (Traugott 1989, 1995, 2003, 2011)、言語変化 (Bybee 2015)、歴史語用論 (高田・椎名・小野寺 編 2011、金水・高田・椎名 編 2014)
- B. 認知言語学、英語語法研究における用法基盤 (usage-based) の理念共有：メンタル・コーパス (Taylor 2012)、フレイジオロジー、語法研究 (八木 2007、住吉 2016) など

本章の目的は、(1) のうち、A の理論言語学、文法化理論を概観していくことによって、本研究が立脚する言語観を提示するとともに、採用するアプローチと方向性を述べることにある。分析対象とする動詞派生前置詞という言語現象についての記述と先行研究については3章で扱う。本章の議論は、3章で取り上げる先行研究、記述文法の背景となる、主に理論言語学の観点からである。

本章の構成は以下の通り。まず2.1節にて本節が立脚する認知言語学の言語観を述べ、2.2節ではカテゴリー化とプロトタイプ理論、2.3節では文法化理論のうち本研究がかかわる主要な論点を概観していく。次に、2.4節にて、意味変化における主観化に関わる先行研究をみる。以上を通し、本研究の理論的背景を述べ、記述言語学に関わる背景を次の3章でみていく。

2.1 認知言語学の言語観

本節では、本研究の背景となる認知言語学の言語観を概観する。本論文において、具体的な認知言語学の道具立てを用いた言語記述がなされるわけではない。しかし、立脚する観点は、この種の言語観と親和性をもつものと位置づけられる。従って、本節では、研究に通底する理念となる、文法化現象を捉える上での言語観を検討する。本研究においては、文法化プロセスの連続性を、共時性・通時性の接点から規定していく。言語変化は連続的・段階的なプロセスであり、共時性・通時性というのは、言語分析における手法としての側面に過ぎない (cf. 山梨 2000: 6-7)。言語変化に対するこの種の捉え方は、本節で述べる認知言語学の言語観と、文法化研究における汎時性 (2.3節)、

なおかつ構文的な言語観に共通する。

認知言語学の基本的なテーゼは、以下の (2) の引用にまとめられる。

- (2) a. 認知言語学のアプローチは、外部世界にたいする主体的な解釈のモード、外部世界の主観的なカテゴリー化と意味づけのプロセス、認知主体の感性、身体性を反映する言葉の諸相を、客観的で科学的な分析の対象として研究していくという前提にたっている。換言するならば、認知言語学のアプローチは、主観性にかかわる言葉の世界と知のメカニズムを科学的に分析し、その諸相を厳密に体系的に研究していくという前提にたっている。

(山梨 2000: 5)

- b. 認知運用能力をふくむ言葉の根源に存在する主体の認知能力を記述・説明の基盤として、形式から意味にわたる言語現象の全体を、身体的な動機づけを背景とするダイナミックな発現系として創発的に規定していくという一貫した方向性であると言える。(山梨 2000: 14)

筆者の理解においては、認知言語学は、従来の言語学が分析対象としてきたものを、(2b) の観点から捉え直していくものと考ええる。だからこそ、(3) のような「捉え方」という概念が用いられる。

- (3) 「解釈／捉え方 (construal)」とは、発話のプロセスにおいて把捉事態を分節し、意味あるものとして構築する創造的な営みを言う。[...] 言語表現の構造や体系は、究極的に「把捉事態をどう解釈したか」によって決まるというのが概念主義の意味観である。(辻 2013: 27)

この種の観点から、英語の進行形 (progressive form; cf. 安藤 2005: 70, 112) を捉え直してみよう。安藤 (2005: 113) によると、進行形の本質的意味は「現在・過去・未来の基準時における (主語の) 活動 (activity) を表す」とされる。「活動」という語は、「動作」に加え、(4a) のように主語が物を表す場合や、(4b) のような天候動詞の場合が含まれる。

- (4) a. The milk *is turning* sour. (牛乳が酸敗しかけている)
b. It *is raining* hard. (大雨が降っている)

(安藤 2005: 113; 斜体部は筆者による)

認知言語学の観点から進行形を捉え直すと、(5) のような話者の視点に関わる。

(5) Viewing Frame (Radden and Dirven 2007: 23)

- a. This train *goes* from Norwich to Peterborough. [non-progressive]
- b. This train *is going* from Norwich to Peterborough. [progressive]

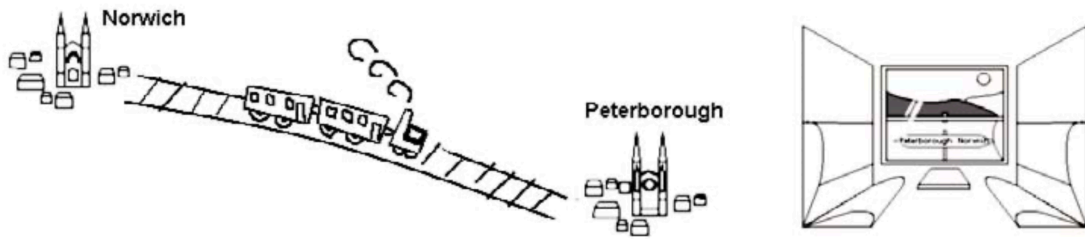


図1 Maximal and Restricted Viewing Frames

(5a) は、いわゆる現在形（進行ではない）、(5b) は進行形である。これらの英文の背後にある話者の視点を取り入れると、(5a) は図1の左側の図のように、Norwich 駅から Peterborough 駅までの経路全体の視点を表している。一方、(5b) の場合、話者は電車に乗っている最中であり、電車内から車窓を通して外の風景を見ている、という視点が考えられる。以上の Radden and Dirven (2007) の議論にみられるように、認知言語学においては、話者（概念化者）が、どのような視点を持って捉えているか、という観点から言語事例を捉え直していく。「話者の視点」の存在は、本研究の動詞派生前置詞においても、文法化が進むにつれて垣間見ることができる。この種のアプローチは、後に触れる早瀬による一連の「懸垂分詞 (dangling participle)」研究も理論的背景としている。詳細は2.5節の議論で検討する。

2.2 カテゴリー化とプロトタイプ理論

2.1節においては、認知言語学の基本的な言語観についてみた。本節においては、認知言語学におけるカテゴリー観 (6) をみる。

- (6) 認知言語学のアプローチは、プロトタイプ理論のカテゴリー観にもとづいている。プロトタイプ理論によれば、カテゴリーの成員は、同等の資格で帰属するのではなく、典型的な成員から

非典型的な成員へとグレイディエンスを成して段階的に分布する。このプロトタイプ理論の
カテゴリー観にもとづくアプローチでは、マイクロレベルからマクロレベルにいたる言語単位は、
カテゴリーの動的なネットワークとして規定される。この動的なネットワークは、中心的なカ
テゴリーと非中心的なカテゴリーからなる体系としてとらえられ、非中心的カテゴリーは、中
心的（あるいは、相対的により中心的）なカテゴリーとの関係によって体系の中に位置づけら
れる。(山梨 2000: 179)

この種の言語観においては、典型的な成員（プロトタイプ／**prototype**）を中心とした連続的・段
階的な分布をなすと捉えられる（図2）。

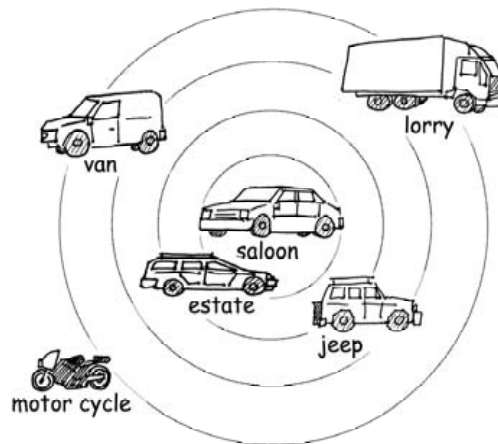


図2 The category car (Radden and Dirven 2007: 7)

非典型的な成員（周辺事例、**periphery**）は、典型的な成員との関係性により規定される。例えば、図
2における自動車のカテゴリーでは、大部分の人々にとって、サルーン (**saloon**) がプロトタイプと
捉えられており、エステートカー (**estate car**)、ジープ (**jeep**) などは、より典型性の低い成員と捉え
られている (Radden and Dirven 2007: 7)。

認知言語学においては、この種の観点から言語現象を記述していく。例えば、語彙カテゴリーに
プロトタイプの成員・周辺の成員が存在し、文法カテゴリーにおいては異なる程度性の資格をもつ
(Radden and Dirven 2007: 7)。例えば、山梨 (2000) は、日本における「履き物」の語彙体系を以下の
ように記述している。

(7) 日本語の履き物に関わる語彙体系の一面

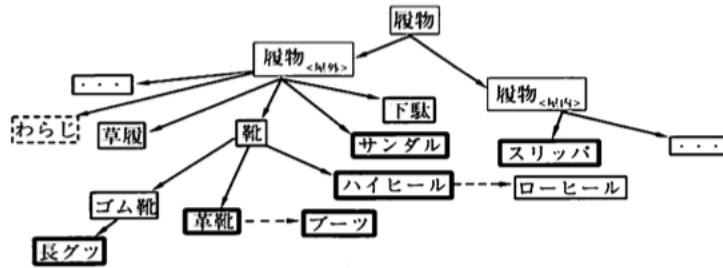


図3 日本語の履き物に関わる語彙のネットワーク (山梨 2000: 189)

図3における「太線、細線、破線のボックスは、典型例～周辺例の活性化の度合いの相対的な関係を示し」ており、草履・わらじは周辺のな成員、革靴・サンダルは典型的な成員と位置づけられている (山梨 2000: 190)。

本研究においても、プロトタイプを中心としたネットワークに基づく言語観を採用する。第3章において概観するように、分析対象とする動詞派生前置詞は、前置詞としては周辺のなカテゴリーと位置づけられる。本研究では、「前置詞としての典型性を満たすか否か」という観点から動詞派生前置詞の考察を進めていく。この種の言語観は、いわゆる *during, past* などといった典型的な前置詞と比較して、大半の動詞派生前置詞が英語母語話者によってどの程度周辺のなものであると感じられるか、という位置づけを可能とする。この考察については、第4章において具体的な検討を進めていくこととなる。

2.3 文法化と汎時性

「文法化 (grammaticalization)」は、以下のように定義される。

- (8) We defined grammaticalization as the process whereby lexical items and constructions come in certain linguistic contexts to serve grammatical functions, and, once grammaticalized, continue to develop new grammatical functions. We also characterized it as the process whereby the properties that distinguish sentences from vocabulary come into being diachronically or are organized synchronically.

(Hopper and Traugott 2003: *Preface and acknowledgments*)

文法化は、(i) 研究領域、(ii) 言語現象、の両者を表す。(i) に関しては、どのようにして語彙項目と構文が、ある特定の言語学的文脈において文法的機能を担うようになるのか、または、どのように文法項目がより文法的な機能へと発展していくのか、といったことが関わっている (Hopper and Traugott 2003: 1)。代表的な例である英語の動詞 *go* の文法化をみよう。

- (9) a. I am going to marry Bill. (*i.e.* I am leaving / traveling in order to marry Bill.)
b. I *am going to* go to London.
c. I *am going to* London to marry Bill.
d. I'm *gonna* go to London. (cf. Hopper and Traugott 2003: 2-3)

(9a) のような非定形節補部 (non-finite complements) を伴う目的意図・方向を表す構文 (purposive directional constructions) という非常にローカルな構文においてのみ変化が起こり、(9b)(9c) のように場所副詞がある方向を表す方向の文脈では起こらない。目的を表す *be going (to...)* から助動詞 *be going to* への変化は、直後の動詞を含む「再分析 (reanalysis)」を伴う。ここでは、進行相から「直近の未来 (immediate future)」への変化も伴う。

以下、(9) に関わる文法化のメカニズムをみよう。

(10) 動詞 *go* の文法化に関わるメカニズム

a. 再分析

[I am going [to marry Bill]] → [I am going to marry Bill] (cf. *ibid.*: 3)

b. 音韻的縮約 (phonological reduction): *-ing* と *to* の句境界が消滅し、*going to* (3 音節) が *gonna* (1 音節) と発音されるようになった。(9d) は再分析が起きた証拠である。

c. 意味の漂白化 (semantic bleaching): 文法化に伴い、動作・方向性といった *go* の具体的な意味が失われ、時間的意味 (「未来」) など、話者の時間に関わる意味が抽象的な意味が付け加えられる (*ibid.*: 3)。文法化の後期に起きる (*ibid.*: 94-98)。

d. 重層化 (layering): (9) の変化は 15 世紀以前に起きたが、これらの文法化における諸段階は、現代英語においても共存している (*ibid.*: 124-126)。

ここでは、本研究の分析に関わる「意味の漂白化」「重層化」を概観する。

まず、(10c) の漂白化に関して。文法化の進行に伴い、動詞の意味に漂白化がみられる。漂白化とは、文法化する以前の動詞がもっていた意味が失われていくことを指す。Hopper and Traugott (2003) においては、文法化は意味内容の喪失を伴い、文法化した形式が徐々に統語的・形態的になっていくにつれ、意味を失っていくことが指摘されている。文法化によって加わる語彙の意味は、比較的抽象的であり、時・役割関係・連結性などにかかわる意味、すなわち「文法的意味 (grammatical meanings)」となる傾向があるという (*ibid.*: 98)。一例として、*be going to* の文法化に関する文脈では、未来に関する意図が多くなるとされる。

(10d) の重層化に関し、Hopper (1991: 22-23) は、時制・アスペクト・モダリティ、格、指示などの機能的ドメインにおいて、新たな層 (layer) が絶えず出現しているが、それらは既に存在している機能的に等価な形式へ直ちに置き換わるわけではなく、新たな層と共存・相互作用していく可能性がある」と述べる。一例として英語のテンス・アスペクトが挙げられている。過去時制においては、*drive / drove, take / took* などの強変化動詞における母音交替という古い文体の層により区別がなされる。これらの変形は、より近年の層である助動詞と同語源の英語 *do* に由来する舌先音の接尾辞 [t] または [d] を用いた変形 (*notice / noticed* など) と共存している。

また、文法化に伴い、名詞・動詞という文法カテゴリーにみられる特徴 (動詞であれば、時制、相、人称・数の一致) が失われる。このことを脱範疇化 (11) と呼ぶ。Hopper and Traugott (2003) において、この変化は「脱範疇化のクライン (cline of categoriality; cf. 児馬 2001: 74)」として (12) のように定式化される。

(11) 脱範疇化 (decategorialization): When a form undergoes grammaticalization from a lexical to a grammatical form, however, it tends to lose the morphological and syntactic properties that would identify it as a full member of a major grammatical category such as noun or verb.

(12) cline of categoriality

major category (> intermediate category) > minor category

(Hopper and Traugott 2003: 107)

Hopper and Traugott (2003: 107) によると、major category には名詞・動詞が、minor category には前置

詞、接続詞、助動詞、代名詞、指示代名詞が含まれる。形容詞・副詞は両者の中間 (intermediate category) に位置し、形容詞は (分詞的) 動詞から、副詞は場所 (locative)・様態 (manner) などを表す名詞から通言語的に派生することが多いとされる。あらゆる minor category は、通時的 major category が元となっているという「一方向性 (unidirectionality)」がみられる。

以上の文法化理論と、本研究において扱う動詞派生前置詞との関係性については、第3章および分析時に再度言及を行う。(12) の枠組みは、第5章の通時的検討においても分析の基盤となる。

最後に、文法化と共時性・通時性との関係性についてみておこう。この概念についても、本研究の分析に関わる重要概念である。先行研究において、文法化は「パンクロニック／汎時的 (panchronic) (Heine *et al.* 1991) な現象とされる。汎時性に関し、本研究では山梨 (2000) の言語観 (13) に立脚して分析を進めていく。

(13) 日常言語を記述していく際には、一般に、時間的・歴史的な変化の側面にかかわる通時的な考察と、この側面を捨象した共時的な考察は区別していくアプローチがとられる。しかし、この種の区分はあくまで方法論的な区分であり、この二つのレベルにかかわる事実が先験的に関係していないという保証はどこにもない。日常言語は、歴史的な過程を経て変化を遂げてきている記号系の一種である。したがって、共時的な視点からみた言語現象の一面が、通時的・歴史的な変化にかかわる要因によって動機づけられている可能性も十分に考えられる。換言すれば、通時的・歴史的な変化のプロセスないしは拡張のプロセスにかかわる要因が、共時的な変化のプロセスないしは拡張のプロセスに反映されている可能性を考慮していく必要がある。このことは、言語の科学に「通時的」(ダイアクロニック)な視点と「共時的」(シンクロニック)な視点を統合する「汎時的」(パンクロニック)な視点を導入する研究が必要となることを意味する。

(山梨 2000: 6-7)

2.4 コーパス言語学と文法化研究

近年における文法化研究の動向としては、1990年代のコーパス言語学の幕開けとともに、データの量的・質的分析が進むようになった (cf. 秋元 2002, 2014)。Mair (2004: 121) は、コーパス言語学と文法化研究には親和性があると述べている。その理由として、Mair (2004: 121) は以下を挙げる:

(i) 基底規則 (underlying rules) という抽象的なシステムではなく、談話文脈における発話の研究に重

点を置くアプローチである点。(ii) 頻度データと統計を重視する点。(iii) 文法範疇 (grammatical categories) の間の移行は突如として起きるものではなく段階性を持ち、文法形式と意味は相互依存である(両者を、離散的・自律的ドメインをなすものとみなさない)ということに同意している点。(iv) 言語学において、数十年間にわたり比較的無視され続けた後に、1970年代後半と1980年代前半に再度「ホット」なものとなった点。その一方で、Mair(2004)は、両領域の研究者が相互の成果に着目してこなかったことを指摘し、連携の必要性を述べている。

動詞派生前置詞の研究においても、コーパスを用いた研究が行われてきた。例えば、Fukaya(1997)は、-ing分詞の統語的な振る舞いに関して、Hopper(1991)挙げる文法化の5原則がコーパスにおいてどのような頻度上のデータを示すか調査を行っている。他の事例研究として、including(内田2003)、considering(Kawabata2003)、save/saving(児馬2001)、notwithstanding(Risannen2002)、following(Olofsson1990,2011)などが挙げられる。また、動詞派生前置詞のうち約1/4には接続詞としての振る舞いもみられ(Kortmann and König1992)、これらについてもコーパスを用いた研究が行われている。例えば、provided/providing(川端2001)、seeing(Mair2004)、supposing, supposed to(Visconti2004)などがある。以上のうち、秋元(2002)、Risannen(2002)、Mair(2004)はOEDのデータを用いている。Mair(2004:124)は、OEDを歴史コーパスとみなすと、分布の偏りをはじめ様々な問題点があると指摘する。そのような問題点を差し引いても、OEDは膨大かつ豊かな言語資料として他を圧倒していると述べている(cf. Hoffman2004:26)。本研究では、この立場を採用し、通時的分析においてはOEDを言語資料とする。なお、OEDが圧倒的なデータ量をもつと言われたMair(2004)以降、各種コーパスをはじめとする言語データの拡充がなされた(cf. Traugott and Trousdale2013:42-43)。現在利用可能なコーパスを使用すれば、OEDとは異なる分析結果が得られる可能性がある。

本研究は、このような研究背景をもち、コーパス、OEDの言語データに基づき分析を進めていく。その一方で、後述するように、動詞派生前置詞は典型的な前置詞と比べ頻度が低く、コーパスに基づく大規模データを処理する、という分析のアプローチに馴染まないこともある。本研究では、このような特徴に着目し、文法化が進んだ事例を抽出する検索方法を行うことがある(cf.4章、6章)。分析対象を適切に抽出し、その質的な特徴を記述するためである。

2.5 主観性

「主観化(subjectification)」とは、「話者の主観的態度・判断・意味が強まるプロセス」を指し(高

田・椎名・小野寺 2011:32)、主に文法化の初期にみられる (Traugott 2011:67)。具体例として、Traugott (1989) は、*must, shall, will* などの法助動詞、*insist, suggest* などの「主張」を表す発話行為動詞、*probably, apparently, evidently* などの法副詞の意味変化を挙げている。Traugott (1995) による定義は (14) であり、(15) のプロセスを辿るとされる。

(14) 'Subjectification in grammaticalisation' is, broadly speaking, the development of a grammatically identifiable expression of a speaker belief or speaker attitude to what is said. It is a gradient phenomenon, whereby forms and constructions that at first express primarily concrete, lexical objective meanings come through repeated use in local syntactic context to serve increasingly abstract, pragmatic, interpersonal and speaker-based functions.

広くいえば、述べる事柄に対して話者の信念や態度の文法的に確認できる表現の発達である。それは漸次的現象で・主に具体的、語彙的、客観的意味を表していた形式や意味が局所的な文脈ないで繰り返し使われることにより、増々抽象的、語用論的、対話的な話者に基づく機能を果たすようになることである。 (Traugott 1995: 32 ; 秋元 2011: 96)

(15) propositional (命題的) > textual (テキスト的) > expressive (感情表出的)

(Traugott 1982; 秋元 2011: 95)

さらに Traugott は、主観化の後に起こる「間主観化 (intersubjectification)」を挙げる。定義は (16)。具体例として、*actually* の垣根 (hedge) 表現への発達、*pray, I pray (you)* などの明示的なポライトスを表すマーカなどが挙げられている。

(16) the development of markers that encode the Speaker's (or Writer's) attention to the cognitive stances and social identities of the Addressee (Traugott 2003: 124)

早瀬 (2016a:222) は、Traugott の「間主観性が主観性を経て発現する」という議論に言及しつつ、懸垂分詞の独立用法にもそのような側面がみられると述べ、以下のような「談話機能化が見られるもの」を例に挙げる。

(17) A: But I do think that Lange has done very well this week.

B: Oh, absolutely.

A: Lange has...

B: *Considering*.

(早瀬 2016a: 222)

早瀬 (2016a: 222) は、(17) の *considering* に関し、「聴者の下した Lange への評価に対して、但し書き (『まあそこそこね』) をつけている」と説明する。そして、「聴者の反論を予測して自らの評価の妥当性を『折衝』したり、あるいは聴者の行動を促しリードしたりする働きが見られ、これをきっかけに談話の中で相手との共通理解、共同主観を形成していこうとする対人関係的な側面を積極的にもつと考えられる (*ibid.*)」と述べている。

本論文において概観する現象には、早瀬 (2016) が指摘するような間主観性を示すものはみられない。本論においては、*respecting* の通時的分析 (5.6 節) において、主観化についての言及を行う。

第3章 英語動詞派生前置詞の概観

本章の目的は、動詞派生前置詞に焦点をあて、本研究の土台となる論点を整理することにある。構成は以下の通り。まず 3.1 節で、上述した記述文法を中心に、動詞派生前置詞に関する言及をみていく。続く 3.2 節では、3.1 節でみた動詞派生前置詞の特徴を、文法化理論の観点から捉え直す。以上を踏まえ、3.3 節で本研究に関わる先行研究を 4 章、5 章、6 章と関連づけて整理し、3.4 節で批判的検討を行い、本研究において解明すべき問題を述べる。最後の 3.5 節を結語とする。

なお、特に本章における議論、先行研究、背景に関しては、秋元 (2002: 179-183), 児馬 (2001: 73-76), Fukaya (1997), Kortman and König (1992) をはじめとする文献調査を出発点としており、これらの研究に依るところが大きい²。本章においては、分析に関わる論点に関し、原典を引用しつつ議論を進めるが、本現象に関する論点はこれらの研究で詳細かつ網羅的に提示され、既に十分な検討が行われている。

3.1 文法書における記述

本研究の分析対象である動詞派生前置詞は、Poutsma (1926), Jespersen (1954), Visser (1972), Quirk *et al.* (1985), Görlach (1991), Declerck (1991) などの文法書においても言及がなされている³。Quirk *et al.* (1985: 660) に関しては、Fukaya (1997: 285-286), 秋元 (2002: 179), 林 (2013a: 5) も言及を行っているが、*-ing* 形が様々な品詞として生起することを示す好例といえる。ここでは、*considering, given* を例に、*-ing, -ed* の分詞形が、周辺的前置詞 (1)、非定形の動詞形 (nonfinite verb forms) (2)、そして接続詞 (3) として振る舞う例が挙げられている。

- (1) a. *Considering his age, he has made excellent progress in his studies.*
b. *Given the present conditions, I think she's done rather well.*
- (2) a. *Considering the conditions in the office, she thought it wise not to apply for the job.*
b. *Given the chance, I'd do it again.*

² 本研究は林 (2013a) の発展であり、さらなる文献調査を行った。

³ 本節では Quirk *et al.* (1982), Huddleston and Pullum (2002) を検討の中心に据える。他の文法書における記述として、Zandvoort (1972: 35-36), Visser (1972: 1216-1222), Jespersen (1954: 409-411) も参照。

- (3) a. *Considering that he is rather young*, his parents have advised him not to apply.
 b. *Given that this work was produced under particularly difficult circumstances*, the result is better than could be expected.

(Quirk *et al.* 1985: 660)

また、Quirk *et al.* (1985: 661) は、(3) のように接続詞として用いられる *-ing*, *-ed* 形に *seeing (that)*, *provided (that)* を挙げている。*seeing (that)* は Mair (2004) にて、*provided (that)* は川端 (2001) において、動詞派生前置詞・接続詞として文法化の観点から通時的分析が行われている。前置詞のように振る舞っているものの、動詞と親和性をもつ周辺的前置詞に関し、Quirk *et al.* (1985) は (4) を挙げている (cf. 林 2013a: 4)。

- (4) *bar, barring, excepting, excluding; save* <formal>
concerning <formal>, *considering, regarding, respecting, touching* <formal or literary>
failing, wanting
following, pending <formal>
given, granted, including

(Quirk *et al.* 1985: 667)

ここで挙げられている *bar* の例文を引用する。

- (5) He gave Mary all *bar* [‘except’] three of the sketches. (Quirk *et al.* 1985: 667)

Huddleston and Pullum (2002: 610-611) は、二次的で時制をもたない動詞形からの品詞転換により生じた前置詞の例として (6) を挙げる。以下、本段落で取り上げる Huddleston and Pullum (2002: 610-612) の議論に関しては、縄田・久米・松元・山村 (訳) (2018: 28-30) の訳語に従う⁴。

⁴ 本段落において縄田・久米・松元・山村 (訳) (2018) が併記されている場合、同書からの直接引用であることを示す。

- (6) a. *Barring* accidents, they should be back today.
 b. There are five of them *counting / including* the driver.
 c. *Pertaining to* the contract negotiations, there is nothing to report.
 d. *Given* his age, a shorter prison sentence is appropriate.

(Huddleston and Pullum 2002: 610 ; 斜体部は筆者による)

Huddleston and Pullum (2002: 610) は、(6) の斜体部が「解釈上の主語 (understood subject)」を持たないことを指摘し、「叙述対象 (それが叙述していると理解される要素) をもたない付加部 (adjunct) として用いることができる」ことを前置詞とする根拠としている (Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 28)。(6b) の *counting* は、(7) の「動名分詞 (gerund-participial verb-form)」と区別される。

- (7) *Counting* his money before going to bed last night, Max discovered that two \$100 notes were missing.

(Huddleston and Pullum 2002: 610-611; 斜体部は筆者による)

(6)(7) における動詞・前置詞の区別は、(8) の例では「動詞の解釈上の主語が主節にみあたらない」(Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 29) ため曖昧になる。

- (8) a. *Turning* now to sales, there are very optimistic signs.
 b. *Bearing* in mind the competitive environment, this is a creditable result.
 c. *Having* said that, it must be admitted that the new plan also has advantages.
 (9) **Walking* down the street, his hat fell off.

(Huddleston and Pullum 2002: 611; 斜体部は筆者による)

(8) が (6) の「前置詞構文と異なるのは、解釈上の主語が話し手、あるいは話し手と聞き手の両方であると、文脈からうっすらと理解できる」(Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 29) 点にある。この種の例は、(9) のような、いわゆる「懸垂分詞 (dangling participle) 構文」と規範文法家が呼ぶものと類似しているとされる。この文では、*walking* の解釈上の主語が *his*

hat ではないため非文法的である。さらに、(8a) では *now, to sales* と共起し、さらに *briefly, if any* などの付加部を加えることができることも、前置詞と解釈されない理由とされている。(8b) の *bearing* は *bearing in mind* というイディオムの一部であり付加部を加えることができ、(8c) の「*having* は完了の助動詞として義務的に過去分詞補部をとる」(Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 29) という点で前置詞にみられない特徴をもっている。

この種の前置詞として、Huddleston and Pullum (2002) は (10) を挙げている。*gone* はイギリス英語における用法とされる。

(10) *according, allowing, barring, concerning, counting, excepting, excluding, failing, following, including, owing, pertaining, regarding, respecting, saving, touching, wanting, given, gone, granted*

(cf. Huddleston and Pullum 2002: 611)

以上の Huddleston and Pullum (2002: 610-611) の議論は、Huddleston (1984: 346-347) においても述べられている。これについては、秋元 (2002: 189-191) において、動詞派生前置詞との文法化の関係で検討が行われている。次節で文法化との関係を検討するときに触れる。

次に、Biber *et al.* (1999: 74) では、前置詞として *considering, during, following, past, regarding* などを含めている。これらの前置詞は、それ自体が独立して意味を持つことも (free preposition)、前置詞が文脈における他の語 (例えば前の動詞であることが多い) により決まる場合 (bound preposition) のいずれもあり得るとされる⁵。また、前置詞以外の品詞クラスとも考えられる例として、動詞・前置詞それぞれの振る舞いがみられる *following* が挙げられている (Biber *et al.* 1999: 76)。

他の文法書においても、この種の動詞・前置詞の間にみられる曖昧性、懸垂分詞構文との連続性についての指摘がある (Zandvoort 1972: 35-46; 安藤 2005: 246-247, 622)。いずれにせよ、動詞の分詞形の形をとりつつも前置詞的な振る舞いをする、という点で他の前置詞と異なることが注目される。動詞派生前置詞の先行研究では、秋元 (2002: 179-191)、Olofsson (1990) が、文法書の記述に言及しつつ分析を進めている。以上、本節で概観してきた記述は、次章以降の分析の方向性を模索する

⁵ Biber *et al.* (1999: 74) は、free vs. bound prepositions の例として以下を挙げる。(i) が free, (ii) が bound の例である。(ii) の *with* は独立した意味を殆どもたず、動詞 *part* により前置詞 *with* が選択されている。

(i) But the only other thing perhaps, he'll go *with* one of the kids, that's a possibility.
(ii) They've got to be willing to part *with* that bit of money.

上での指針を示してくれる。本研究においても、これらの文法書、辞書などの記述を踏まえつつ、分析を進めていく。

3.2 動詞派生前置詞と文法化

前節では、本研究が分析対象とする動詞派生前置詞に関し、記述文法を概観してきた。重要な点は Huddleston and Pullum (2002: 610-611) に述べられている点に集約される。すなわち、前置詞への文法化に伴い、動詞の解釈上の主語が失われ、付加部を加えることができなくなる。動詞派生前置詞の先行研究では、この特徴に着目して文法化の観点から検討が行われている。本節の目的は、3.1 節で概観した論点を、2.3 節で概観した文法化の観点から位置づけ、捉え直していくことである。具体的には、3.1 節の内容を踏まえつつ先行研究 (Hopper 1991, Hopper and Traugott 1993, 2003) の理論的背景から位置づけ、動詞派生前置詞の文法化研究における論点をみる。

まず、2.3 節で概観した脱範疇化、重層化、意味の漂白化について、動詞派生前置詞を 2 例 (*considering*, *following*) 取り上げ、それぞれの文法化について示す。脱範疇化に関して、Hopper and Traugott (2003: 107) は、名詞・動詞などの主要な文法カテゴリーの成員と同定しうる形態的・統語的特徴が失われる傾向があると述べる。この変化は以下のように示される。

(11) cline of categoriality

major category (> intermediate category) > minor category

(Hopper and Traugott 2003: 107)

2.3 節で概観したように、major category には名詞、動詞が、intermediate category には形容詞、副詞が、minor category には前置詞、接続詞、助動詞、代名詞、指示代名詞などが含まれる。Hopper and Traugott (2003) は、*considering* が接続詞化していくプロセスに、名詞・動詞などの主要な文法範疇にみられる形態論的・統語論的特性を失い、前置詞・接続詞などの特性を持つようになる脱範疇化の関わりを指摘する。動詞の文法化が進行するとともに、時制・相・法・人称・数の一致という動詞的機能は損失されていく可能性があるとして指摘する。以下の例を参照されたい。

- (12) a. *Carefully considering / Having carefully considered* all the evidence, the panel delivered its verdict.
b. *Considering* (*having carefully considered) you are so short, your skill at basketball is unexpected.

(Hopper and Traugott 2003: 108; 斜体部は筆者による)

分詞的動詞 (participle verb) である *considering* は、(12a) では文字通り動詞の特徴を示しているが、(12b) では接続詞であり動詞の特徴を示さない。(12a) で *considering* は副詞 *carefully* によって修飾され、現在形・過去形へと変化することに加え、主節の主語と同じ主語を分詞節に補うことができる。一方、(12b) の *considering* では、このような動詞的特徴がみられないことが指摘されている。以上の Hopper and Traugott (2003) において述べられている *considering* の例は、3.1 節で概観した Huddleston and Pullum (2002: 610) における動詞・前置詞いずれにも解釈が可能な-ing 形の議論 (6)(7)(8) にも当てはまる。すなわち、動詞という major category から、文法化して minor category である前置詞・接続詞へと脱範疇化するのに伴い、時制、語形変化、主節・分詞節の主語一致、付加部との共起 (cf. (8a))、といった動詞の特徴が失われていく。

また、*considering* の前置詞化に関し、Hopper (1991) は主節の主語と分詞節 (participial clause) の主語が一致していないものを挙げる。

- (13) *Considering* its narrow beam, the boat is remarkably sea-worthy.

(Hopper 1991: 31; 斜体部分は筆者による)

(13) の *considering* は、主節・従属節の主語が一致していないとされる。この *considering* は前置詞として解釈され「譲歩」の接続詞と類似した機能をもつが、動詞 *consider* の特質をもたないと Hopper (1991) は述べる。ただし、動詞 *consider* から、前置詞と解釈される *considering* への変化は連続的であり、その過程においては構造上の曖昧性が生じ、動詞的機能・前置詞的機能が並存する事例がみられる (秋元 2002: 185-190)。これは Hopper (1991) の重層化の例であるという (秋元 2002: 190)。重層化は、連続的な文法化の共時的結果である (Hopper and Traugott 2003: 125)。共存のいかなる過程においても、明らかに語用論的な相違がみられる文脈があるとされる (Hopper and Traugott 2003: 124-126; 秋元 2002: 8)。秋元 (2002) は、(14) を引用し、(14a) が前置詞と分析されると述べる。

- (14) a. *Considering* all these disadvantages, his performance was quite creditable.
 b. The committee was *considering* some new proposals.
 b. The committee *considering* the matter had met only once.
 c. *Considering* all these disadvantages, Ed decided to abandon the project.

(Huddleston 1984: 346; 秋元 2002: 190)

秋元 (2002: 190) は、*considering* は大部分主語に人を取るため、現在分詞にも取れる曖昧な例があると述べる。このような曖昧性は、時代が経つにつれてなくなってきているとも述べているが、この並存関係は、現代英語にまで引き継がれているという。

最後に、*considering* を例に、「意味の漂白化」(文法化が進むにつれて語義の意味が弱まること)をみよう。(15) の *considering* は「前置詞の資格を獲得するにつれて(文法化が進むにつれて)、(中略)『…を考えれば→…としては』」(安藤 2005: 622) と意味が変化する。

- (15) *Considering* his age, he looks very young. (年齢のわりには、彼はとても若く見える)

(安藤 2005: 622)

これまでにみてきた変化は、*considering* のみならず、他の動詞派生前置詞についても指摘がなされている。例えば、*following* の脱範疇化、意味の漂白化に関する以下の記述がある。

- (16) a. *Following* the signing of the peach treaty and British recognition of American independence, Washington stunned the world when he surrendered his sword to Congress on Dec. 23 1783 and retired to his farm at Mount Vernon.
 b. *When he *followed* the signing of the peach treaty and British recognition of American independence, Washington stunned the world...

(Leech *et al.* 2009: 7-8)

(16a) の例は、脱範疇化に関わるものである。(13) の *considering* と同じく、(16a) の *following* は解釈上の主語を持たず(主節・分詞節の主語が一致しておらず)脱範疇化しており、この点で前置詞

化しているといえる。主語一致に関し、Leech *et al.* (2009: 8) は、(16b) の書き換えができないことから (16a) の *following* の意味上の主語が Washington と解釈されないことを指摘している。また、文法化した *following* について、Radden and Dirven (2007) は以下を挙げる。

(17) a. Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 36)

b. We got married *after* we had children. [event2 – event1] (Radden and Dirven 2007: 29)

(17a) の *following* は、「因果関係 (causation)」の文法的意味 (= *because of his collapse*) をもつと述べられている⁶。この「因果関係」という含意は、(17b) 「子供ができ、その後、結婚する」のように、時間的に後に起こる出来事が原因となって別の出来事が起こる、という動機づけられることが多いとされる。この種の動機づけが古い時代から存在する例として、Radden らは *post hoc, ergo propter hoc* (= *after that, therefore because of that*) を挙げている (以上、Radden and Dirven 2007: 36)。これも意味の漂白化の例といえる。Olofsson (1990) の研究をみてもわかるように、この種の前置詞化した *following* は前置詞 *after* に置換できるものがある一方で、特定の生起文脈のみに生じることから重層化が起きているといえる⁷。一例として、(18) の Corpus of Contemporary American English (COCA) の例文を参照されたい。

(18) *Following* the debridement procedure, the wound was fitted with vacuum assisted device.

(COCA; 2007, ACAD)

筆者が調査を行った話者の内省では、(18) の *following* は前置詞 *after* に置換することが可能である

⁶ *following* の前置詞化を、前置詞へのパラフレーズによって判定する場合、*after; because (of), due to* への置換を検討する必要がある。小西 (1976: 163) は、「英米の語法辞典は、単に *after* ですむところに *following* を用いることに批判的で ‘follow’ の原義が生かされた ‘*after + as a consequence of*’ の意の場合にのみ用いることにその有用性を認めているようである」と述べる。(i) の *following* は *after* にのみ置換可能であり、*because of, due to* への置換は不可能である。一方、(ii) の *following* は *after; because of, due to* のいずれにもパラフレーズが可能である。(ii) の *following* は「因果関係」の意味で解釈が可能であることから、意味の漂白化が起きていると考えられる。(i)(ii) の出典はいずれも COCA である。

(i) What would our country be like if virtually all young men and women served their country in some way, just as our grandparents did *following* Pearl Harbor?

(ii) It is true that Iraq's president made two enormous strategic errors within a span of ten years: In 1980 Hussein miscalculated that Iran could be easily defeated *following* the purges of its military command by Khomeini's clerics, and that its leadership would capitulate *following* the conquest of western and southwestern Iran; in 1990 he failed to anticipate the U.S., international and regional response to his conquest of Kuwait.

⁷ Fukaya (1997: 288) は、現代英語における *after* と文法化した *following* の関係性を重層化と位置づけている。

ものの、ここでは *following* の方が好まれるという。この内省からも前置詞 *after, following* いずれも生起可能な文脈であっても、両者の間には確かな用法の差異が存在することが予想できる。この例は、両者の用法が共存していること、すなわち重層化の証拠と考えられる。

以上、本節では、主に *considering* を例に、動詞派生前置詞と文法化の関係性に関し、(i) 脱範疇化、(ii) 重層化、(iii) 意味の漂白化に関して先行研究の記述を概観してきた。これらの概念は、本研究における背景として、今後の分析に大きく関わるものである。

3.3 先行研究

前節までに概観したことは、本研究で扱う現象と、枠組みとしての理論的背景である。続く本節の目的は、分析にあたり、解決すべき課題は何かを提示することである。構成は以下の通り。3.3 節は、3.3.1 節、3.3.2 節、3.3.3 節の1つに下位区分され、それぞれが4章、5章、6章において取り組むべき課題の背景となる先行研究を示している。3.3.1 節では動詞派生前置詞全般に共通する特徴を論じた2つの先行研究を取り上げ、先行研究がどのようなアプローチをとっているか、どのような知見を提供しているかを検討する。ここでは、本研究の背景を把握し、4章において37例の動詞派生前置詞を包括的に共時的観点から規定していくにあたり必要なアプローチを模索することとなる。3.3.2 節では、動詞派生前置詞の通時的発達を論じた先行研究を概観し、この種のアプローチの方向性を捉えた上で、5章の事例研究において求められる方向性、解決すべき問題を示す。3.3.3 節では、動詞派生前置詞が「書き言葉」に生起する傾向をもつとする通時的研究の知見を整理し、6章において観察する文法化した動詞派生前置詞への影響を考察する上での基盤とする。以上を踏まえ、3.4 節では先行研究の批判的検討を行い、本研究で解決すべき課題を総括する。

3.3.1 動詞派生前置詞の包括的記述

本節では、4章で行う動詞派生前置詞を包括的に規定していく共時的分析の背景を概観することにある。動詞派生前置詞にみられる特徴を述べた代表的な研究として、Kortman and König (1992), Fukaya (1997) が挙げられる。Fukaya (1997) は、共時的観点から行われたコーパスに基づく研究である。一方、Kortman and König (1992) においては通時的・類型的な観点が念頭に置かれている。これらの研究における記述は、本研究の基盤となる重要な知見を提供する。

「動詞派生前置詞 (deverbal prepositions)」という用語は、Kortman and König (1992: 672) において

用いられている。この現象は、幅広くの言語にみられ、典型的には分詞、動名詞などを含む副動詞 (converbs) から発達したものとされる。英語においては、以下が挙げられている。

(19) *during, pending, concerning, considering, bar, barring, excepting, expected, notwithstanding, according to, past, ago; considering (that), seeing (that), being (as how, that), etc.* (Kortman and König 1992: 672)

Kortman and König (1992: 673) では、文法的・意味的・音韻的变化を経て、動詞が前置詞として再分析された例とされる。英語・フランス語にみられる動詞派生前置詞のおよそ4分の1は接続詞としての役割も果たす。Kortman and König (1992) は、自由付加詞 (free adjuncts) をとることができないという点で中心的な前置詞の大部分とは異なる性質をもつと述べている。また、特徴として、歴史的観点からみると「短命であること」が挙げられている。再分析された項目の多くが英語において廃語となっていく理由として、部分的には、フランス語・ラテン語からの借用語・語義借用が多いことを挙げている (*withstanding, outtaken, outnomen* など)。これら多くの例では、分詞の廃退は、基底となる動詞語幹の退廃の自然な結果であったという。しかし、この説では、基底となる動詞語幹が現存しているにもかかわらず使用されなくなった動詞派生前置詞 *lasting, continuing, reversed* や、動詞派生接続詞 *conditioned that, foreseeing that* などの事例を説明できない (Kortman and König 1992: 683)。

Kortmann and König (1992: 683) は、動詞派生前置詞の特徴について述べている: (i) 頻度が低い、(ii) 音節数が多い、(iii) 前置詞残留 (preposition stranding) のような中心的な前置詞の特徴を持っておらず、統語規則から外れている、(iv) 意味範囲が限られている、(v) 動詞的特徴を保存している ((i)-(v) の和訳は全て秋元 2002: 181 からの直接引用)。 (iii) について、関係節において前置詞残留しない例として、Declerck (1991: 552) は以下を挙げる: *around, beside, concerning, despite, down, during, except, near, inside, opposite, outside, regarding, round, since, up*。この中でも、*concerning, during, except, regarding* が残留しないことが指摘されている。

また、Kortmann and König (1992) は、前置詞としての分詞の再分析の程度性に関し、以下の図を挙げている⁸。

⁸ この図については、林 (2013a: 5-6) においても言及を行った。秋元 (2002: 182) も参照。

lowest degree			highest degree	
→				
<i>facing</i>	<i>considering</i>	<i>according to</i>	<i>during</i>	<i>past</i>
<i>lining</i>	<i>failing</i>	<i>allowing (for)</i>	<i>pending</i>	<i>ago</i>
<i>preceding</i>	<i>barring</i>	<i>owing to</i>	<i>except</i>	<i>bar</i>
<i>succeeding</i>	<i>following</i>	<i>notwithstanding</i>	<i>concerning</i>	

図4 Gradient with respect to the degree of reanalysis of participles as prepositions

(Kortmann and König 1992: 684)

Kortmann and König (1992) によると、*past, ago* が図において最も再分析の程度性が高く、1つの形態素からなり (monomorphemic)、起源が不明瞭という共通点を持つ。*during, pending* は、基底動詞語幹も現在使用されていないものの⁹、複数の形態素からなり、どのように前置詞へと発達したかが明瞭であることから、比較的高い再分析の程度性を持つ。*according to, allowing (for), owing to* などの分詞がより低く位置づけられているのは、*during, pending* より形態的な複雑性をもつことによる。*facing, lining, preceding, succeeding, failing, barring, following* は、特定の文脈において、*after, before, about* といった典型的前置詞と部分的に機能的・意味的な類似性をもつ。

次に、Fukaya (1997) の記述をみていこう。Fukaya (1997) は、文法化の段階性 (gradualness) を示すため、COBUILD, Lancaster-Oslo / Bergen Corpus (LOB corpus), Brown Corpus を使用し、動詞派生前置詞の規定を試みている。Fukaya (1997) は、Sinclair (1991) が挙げる 11 の *-ing* 形の前置詞に関し、Hopper (1991) の「文法化の 5 原則」を参照し、3 つの観点から規定した: (i) 主語解釈 (subject interpretation), (ii) 前置詞随伴・残留 (pied-piping and stranding)、(iii) 前置詞的副詞への発達 (development into prepositional adverbs)。分析の対象は (20) の前置詞である。

(20) *according to, barring, concerning, considering, depending on, during, excepting, excluding, following, including, notwithstanding, owing to, pending, and regarding*

(Fukaya 1997: 285)

ここで、本研究の分析に関わる (i) 主語解釈、(ii) 前置詞随伴・残留について概観する。

⁹ Kortmann and König (1992: 684) におけるこの記述は、*dure, pend* が現代英語において廃語 (obsolete) であることを指していると考えられる。

Fukaya (1997) における (i) は、3.2 節においても確認した脱範疇化 (Hopper 1991) が関わる。

- (21) a. Should we, *considering* the circumstances, send a representative to the funeral?
b. *Considering* the conditions in which they worked, this is scarcely surprising.

(Fukaya 1997: 291; 斜体部は筆者による)

(21a) の *considering* の解釈上の主語は *we* であり、主節の主語と一致し、主語解釈の規則 (subject interpretation rule) が適用される。一方、(21b) においては、*considering* の主語はおそらく話者と考えられ、主節主語の *this* と一致しない。従って、主語解釈の規則が適用されない。この種の観点から Fukaya (1997) は COUBUILD コーパスにおいて得られる事例の分析を行っている。主語解釈の規則が適用された数は (22) にまとめられる。/ の左側に記された数は規則が適用される数を表し、右側の値は適用されない事例数を表している。

(22) *during*: 0/2024, *according (to)*: 0/700, *depending (on)*: 0/108, *concerning*: 0/67, *notwithstanding*: 0/32,
pending: 0/20, *regarding*: 3/66, *including*: 98/1144, *excluding*: 4/42, *owing (to)*: 4/36, *following*: 92/417,
barring: 1/4, *considering*: 19/53, *excepting*: 2/1 (Fukaya 1997: 291; 斜体部は筆者による)

during, *according (to)*, *depending (on)*, *concerning*, *notwithstanding*, *pending* は主語解釈の cline において前置詞の極に位置する。*regarding*, *including*, *excluding*, *owing (to)*, *following*, *barring*, *considering*, *excepting* はこの cline において中間的な特質をもち、主語解釈の観点においては前置詞・分詞の両方としての振る舞いを示すと位置づけられる (Fukaya 1997: 291)。

(ii) に関し、Fukaya (1997) は前置詞随伴 (23a) (23b) (23c)、前置詞残留 (23d) の例を挙げる。

- (23) a. An essential part of the programme is a period of practical training in France *during which* students apply their accumulated knowledge of the country and its language.
b. Likewise, Kant formulated the nebular hypothesis, *according to which* the solar system was evolved from a rotating mass of incandescent gas, ...

- c. They were witnessed in the ministry at three in the afternoon, *following which* the parties involved got down to some serious drinking.
- d. “Could I speak to Mr James, please?” “May I tell him what it’s *concerning*?”

(Fukaya 1997: 292; 斜体部は筆者による)

Fukaya (1997: 292) が行った調査では、前置詞随伴については *during* (77 例)、*according to* (1 例)、*following* (5 例)、残留については *concerning* (1 例) がみつかったという。生起数から、*during* を除き、前置詞随伴・残留は非常に頻度が低いと結論づけている。

最終的に、Fukaya (1997) は以下のようにまとめている。

- (24) a. identical-subject rule: *during, according to, depending on, concerning, notwithstanding, pending*
- b. pied piping and stranding: *during, according to, following, concerning*
- c. prepositional adverbs: *considering, following, notwithstanding*

(Fukaya 1997: 293; 斜体部は筆者による)

(i)-(iii) のうち複数を満たす *during, according to, concerning, following, notwithstanding* の 5 例は、他の 6 例よりも前置詞へと文法化しており、高い前置詞的特性 (*prepositional properties*) を持つと結論づけられている。

また、Fukaya (1997: 288) は、重層化 (Hopper 1991) の一例として、文法化して新たに時間的な意味を持つようになった *following* が、古い層である前置詞 *after* とともに現代英語において容認されており、両者が入れ替わっていないということを指摘している。その他の古い層／新たな層 (文法化したもの) として、以下が挙げられている。

- (25) *except / barring, about / concerning, except / excepting, in spite of / notwithstanding, because of / owing to, until / pending, about / regarding* (Fukaya 1997: 288)

Fukaya (1997: 288) は、新たな層となった意味が、以前より存在していた層より低い頻度にて用いられるという重層化の原則 (Hopper 1991) の根拠として、COBUILD コーパスにおいて *except* が検出

数 404 であったのに対して *barring* が 10、*in spite of* が 111 であるのに対して *notwithstanding* が 32、*because of* が 2048 であったのに対し *owing to* が 53 であったことを挙げている。文法化して新たな層となった *barring, notwithstanding, owing to* のコーパスにおける検出数は、古くから存在していた層である *except, in spite of, because of* と比較して少ない。

以上、本節では、動詞派生前置詞に共通してみられる特徴を論じた 2 つの先行研究を概観してきた。4 章においては、Fukaya (1997) のアプローチを参照し、動詞派生前置詞を共時的に規定していくこととなる。先行研究の検討と、本研究において解決すべき課題については 3.4 節で論じる。

3.3.2 動詞派生前置詞の通時的研究

本節では、5 章で行う動詞派生前置詞の通時的研究に関し、先行研究における記述を概観する。2 章においても言及したように、先行研究においては、OED、歴史コーパス Corpus of Historical American English (COHA) などのデータを用いた考察がなされており、どのような歴史的発達を経てきたのか、その文法化メカニズムを対象とした研究が行われている。Hopper and Traugott (1993, 2003) 以降、(Kortmann and König 1992, 秋元 2002)、構文化 (Trousdale 2012) などの観点から考察が行われてきた。主な動詞派生前置詞の事例研究として *according to* (Rissanen 2000), *during* (Trousdale 2013), 秋元 (2002) の *concerning, considering, regarding, relating to, touching* (秋元 2002)、*considering* (Kawabata 2003), *following* (Olofsson 1990, 2011), *including* (内田 2003)、*save/saving* (児馬 2001) がある。本節では、これまでに述べた背景を踏まえつつ、通時的観点から動詞派生前置詞分析した先行研究の要点を概観する。

秋元 (2002: 189, 190) は、OED CD-ROM のデータにより *concerning, considering, regarding, relating to, touching* の通時的発達を考察し、以下の点で文法化したと述べている: (i) 動詞性の高い現在分詞から、主語支配を受けない、いわゆる懸垂分詞を経て前置詞へのカテゴリ変化を果たした (脱範疇化)、(ii) それに伴い動詞の本来の意味が失われた (漂白化)。(i) の過程においては、「動詞的機能と前置詞的機能が並存」しており、分詞 (すなわち「動詞的」)、前置詞のいずれにも解釈できる例があるという (秋元 2002: 190)。秋元 (2002) は (26) を引用し、(26d) の *considering* が前置詞であると述べる。

(26) (= (14))

- a. The committee was *considering* some new proposals. [動詞的]
- b. The committee *considering* the matter had met only once. [動詞的]
- c. *Considering* all these disadvantages, Ed decided to abandon the project. [動詞的]
- d. *Considering* all these disadvantages, his performance was quite creditable. [前置詞的]

(Huddleston 1984: 346; 説明の便宜上、例文の順序を入れ替えた。斜体は秋元 2002 の下線部)

秋元 (2002: 190) においては、(26d) を除く例文についての言及はない。ここで (26) に関する Huddleston (1984: 346-347) の議論をみていこう。(26d) の *considering* は動詞と境界的な前置詞と分析され、(26a)(26b)(26c) の *considering* は全て動詞的とされる。(26a) の *considering* は進行形であり、節全体の主要語 (head)¹⁰ である。次に、(26b) の *considering the matter* は *committee* を修飾するが、この位置において *considering* は前置詞句の主要部となることができない。つまり、*considering the matter* は句構造における従属物であり、前置詞的な *considering* の周辺の用法であるため動詞と分析される。(26c) は、分詞節の解釈上の主語が *Ed* であり、主節の主語と一致している。一方、(26d) の *considering* は、そのような主語一致という動詞的特徴を喪失している点で前置詞的だと述べられている¹¹。ただし、これだけで動詞・前置詞のいずれであるか、判定をすることはできない。以下 (27) の例を参照。

(27) *Taking* all these disadvantages into consideration, his performance was quite creditable.

[動詞的: 主語一致がみられないが、前置詞的ではない]

(Huddleston 1984: 347; 斜体部は筆者による)

(27) の *taking* は、主節・従属節という主語一致の観点からは (26d) と同一であるが、直後に補部 (NP + PP) をとるため、動詞と判定される¹²。(26d) のような前置詞的な例は、懸垂分詞的な例とは区別される¹³。

¹⁰ この訳語は寺澤 (編) (2002: 305-306) に従う。

¹¹ Fukaya (1997: 291) の主語解釈の規則 (subject interpretation rule) (3.3.1 節)、Huddleston and Pullum (2002: 610) (3.1 節) も参照。

¹² ここでの補部は [NP (*all these disadvantages*)+PP (*into consideration*)] と考えられる。Huddleston (1984) は、補部をとる (ここでは *into consideration* が後続する) ことを、前置詞とみなさない根拠としている。

¹³ 懸垂分詞とは、主節・従属節の主語が一致しないものをいう (cf. 早瀬 2016a)。(27) はおそらく懸垂分詞の例と思われるが、Huddleston

児馬 (2001) による *save, saving* の文法化研究、川端 (2001) による *provided / providing* の研究は、OED やコーパスを用いて文法化現象との関連を考察している。また、内田 (2003: 118) では、「-ing 型前置詞」としての *including* の分離後置用法のテキスト中における役割に関して、*including* で結ばれた名詞句の表す複数の実態間に存在する包含関係を表現するだけでなく、そこまでに述べてきた内容を受けて、その具体例を導入することによって話題を展開するテキスト構成辞としての接続詞的機能を持っているということが指摘されている。

英語史をみると、動詞派生前置詞は、ラテン語の絶対構文へと遡ることができる。例えば、14 世紀に *considering, during*, 15 世紀に *according to* がラテン語の絶対構文 (absolute constructions) から発達した (Görlach 1991: 109)。 *according to, except, save, during* などはフランス語起源の借用語でもある (中尾 1972: 354)。14 世紀 (特に後半期) には懸垂分詞構造 (*considering, defailing, during, enduring, excepting, hanging, lasting, providing, saving, seeing, touching, withstanding*) が分詞からゼロ派生し始める (中尾 1972: 327)。 *lasting* (*during* が起源; 中尾 1972: 362)、 *save / saving, bar / barring* (児馬 2001) など、類推による発生と考えられる事例もある。中英語期、書き言葉のやり取りにおける前置詞の重要性が増し、前期近代英語期には、当時現存していた前置詞の意味論的範囲に制約がみられるようになり、 *of, by, about* など、より特異な意味を持つ前置詞が新たに形成・借用されていった (Görlach 1991: 108-109)。これ以降、 *concerning, touching* (16 世紀)、 *pending* (17 世紀)、 *respecting, regarding* (18 世紀)、 *including, excluding, owing to* (19 世紀) などが発達した (Görlach 1991: 108-109)。

3.3.3 生起ジャンルとレジスター

本節の目的は、6 章で行う動詞派生前置詞の汎時的研究に関し、先行研究における記述を概観することにある。6 章においては、4 章、5 章において行った共時的・通時的分析を踏まえ、動詞派生前置詞の生起ジャンルに関する考察を行う。ここでは、これまでに概観してきた先行研究においては、個別事例の記述とともに、それぞれの事例に特徴的なジャンル・レジスターについての言及がなされている点に着目する。例えば、内田 (2003: 118) は、プレスと学術論文の情報散文を対象とし

(1984) において明言はされていない。Huddleston (1984: 347) が挙げる懸垂分詞の例は、以下の斜体部である。*は原文に従っている。

- (i) **Arriving late, there were no seats left.*
- (ii) **Being wet, the match was postponed.*
- (iii) *Strictly speaking, it's against the law.*

Huddleston が (i) (ii) を容認しない例としているのは、規範文法的な立場をとっているためであろう。安藤 (2005: 246-247) によると、主節・従属節の主語が不一致であるものは容認されないが、従属節の意味上の主語が「一般の人々」である場合は懸垂分詞も確立した用法として認められる (安藤は、*strictly speaking* を後者の例としている)。Huddleston (1984) による (i) (ii) の判定も、この基準によると考えられる。ここで述べられている分詞・懸垂分詞・前置詞の連続性については、Huddleston and Pullum (2002: 610) (3.1 節) を参照。

た *including* の分析において、「一般的な事実とより具体的な事実を非常に簡潔な形で列挙し、そこに存在する意味関係を明示することのできる *including* の分離後置用法が、学術論文やプレスといった情報散文において高頻度を示すということは、当然の帰結である」と述べている。川端 (2001: 117) は、*provided/ing* の接続詞用法は法律文書でのみ用いられた合接詞的な用法に由来するものである、と述べている。通時的には、書面のやり取りにおける前置詞の重要性が増した結果、初期近代英語期には新たな前置詞が形成・借用されたという (Görlach 1991: 108-110)。*according to* は、ノルマン征服後の時期に誕生し、次第に法律・宗教などのジャンルにおいて用いられるようになった (Rissanen 2000)。

これらの記述をみると、動詞派生前置詞は、書き言葉と親和性を持つ可能性がある。無論、分詞構文が学術的な散文体において用いられること (Biber *et al.* 1999: 691) を念頭に置くと、この傾向は当然ともいえる。6 章においては、共時コーパスから文法化した事例を抽出し、生起ジャンルを検討することとなるが、*considering* については前置詞的な用法が書き言葉、接続詞的な用法が話し言葉において使用されることから、生起ジャンルと結びついて用法の棲み分けがなされていることがわかる。

3.4 先行研究の批判的検討と問題の所在

3.3 節において、4 章以降に行う本研究の分析に関する背景となる先行研究を概観してきた。本節では、以上を踏まえ、本研究で明らかにすべき点と課題を述べる。検討すべき点は、以下の 2 点に集約される。

- [A] 文法化に伴う動詞的特質の喪失 (脱範疇化)、動詞語幹の意味的漂白化の程度は現象によって異なるが、それらの程度差が比較・検討されていない¹⁴。
- [B] 動詞派生前置詞を扱った研究は少なく、さらに現象ごとの語源・発達過程が異なるため、個別の事例研究が必要である (川端 2001)。

[A] に関し、先行研究によって、着目した時代と期間、使用した言語データ (コーパス、データベ

¹⁴ 例えば *considering* v.s. *including* を参照。*considering* は「…を考えれば→…としては」という漂白化が起きている (安藤 2005: 622)。一方、*including, excluding* については、動詞語幹の意味が保たれており、十分に漂白化が進んでいないと考えられる。なお、*excluding* の文法化に伴う機能変化をみると、主語解釈の規則においては文法化に伴い脱範疇化が進んでいる。詳細は 6 章の議論を参照。

ース) が異なるため、得られたデータと分析は、一部の事例または言語変化の一部分を対象とした部分的な記述に留まっている。3.3.1 節では、動詞派生前置詞全般にみられる特徴を包括的に記述・説明した研究として、ヨーロッパ大陸において通言語的にみられる動詞派生前置詞の特徴を述べた Kortmann and König (1992)、動詞派生前置詞の分類と特徴の記述を行い、コーパスにより得られたデータから文法化との関係を定量的に考察した Fukaya (1997) をみた。これらの研究においては、文法化に伴う動詞派生前置詞の脱範疇化、意味の漂白化がみられることは述べられているものの、両者の定量的・定性的相関についての検討は十分に行われていない。これは、3.3.2 節で言及した先行研究が示すように、英語史における動詞派生前置詞の発達時期が異なる点に加え、現象により意味の漂白化・脱範疇化の程度性だけでなく、起源も異なることに起因するのであろう。言語変化は、文法化の一方方向性のように一定の傾向が観察されるものの、多様かつ複雑である。例えば、後に触れる *bar/barring* は動詞由来であるが、通時的にそれぞれ形容詞 *safe*、動詞 *save* に由来する前置詞 *save/saving* からの類推による変化とされる (児馬 2001: 90-91)。言語変化のプロセスにおける多様性も、個別事例に着目した研究が必要であり、また現象ごとに着目すべき時代が異なることを示している。従って、[B] に述べたように、動詞派生前置詞の研究においては、包括的な記述の一方で、個別の事例研究を行う必要がある。川端 (2001: 97) が指摘するように、動詞派生前置詞を扱った研究は少なく、さらに現象ごとの語源・発達過程が異なるため個別の事例研究が必要とされる。例えば、児馬 (2001: 85) は、考察において「*saving* が前置詞化したことを示すためには単一の NP 補部を取っていることを示すだけでは不十分で、その補部の意味に着目して、動詞 *save* の本来の意味が希薄になっていること (bleaching) を示さねばならないということである」と述べている。

[A][B] を踏まえ、本研究では [A'] [B'] を行う。

[A'] 動詞派生前置詞の共時的研究 (統語的・意味論的規定) (4 章)

[B'] 動詞派生前置詞の通時的発達に関する個別事例の研究 (5 章)

[A'] に関し、4 章では、共時的観点から動詞派生前置詞の包括的記述を行うことを目的とする。Fukaya (1997) を発展させるため、以下の問題点に取り組む。第一に、Fukaya (1997) は、分析対象が 11 例に限られるのに加え、20 年ほど前のコーパスを利用している。各種コーパスの拡充がなされた 2017 年現在のツールを用いれば、異なる結果が得られる可能性が高い (cf. Traugott and Trousdale

2013:42-43)。この種のアプローチが、11 例の動詞派生前置詞以外の事例についてはどのように適用できるか検討することにより、さらなる包括的・統一的な言語記述が可能となるだろう。第二に、Fukaya (1997) の挙げる (i) 主語解釈、(ii) 前置詞随伴・残留、(iii) 前置詞的副詞への発達、は全て「事例が観察されるか否か」という二分法による判定であり、文法化の漸進性を細かく規定していくのにそぐわないと考えられる。(i) についても、1.1 節の冒頭において引用した Leech *et al.* (2009) がいうように、分詞・前置詞の境界を定めるのが困難である点が問題となる。これらを踏まえ、本研究では、英語話者の内省に基づき、共時的観点から統一的記述を試みる。なお、4 章の一部は、林 (2013a) において行った調査を発展させたものである。

次に、[B'] に関し、5 章では、従来の文法化研究 (cf. 秋元 2002) にみられる OED, 通時コーパスを用いた記述・分析のアプローチをとり、先行研究で検討されていない個別事例の発達過程を一貫した基準で分析していく。扱うのは、*excluding, preceding, barring, respecting* である。異なる現象を一貫した基準により分析することによって、通時的観点からも、4 章で目指した包括的な規定が可能となる。

続く 6 章では、4 章、5 章において行った共時的・通時的分析を統合し、汎時的観点から動詞派生前置詞の生起ジャンルを検討していく。ここでは、共時コーパス British National Corpus (BNC), COCA にタグづけられた情報に基づき、文法化した動詞派生前置詞の生起傾向をみていく。観察を通し、共時的な生起傾向が、通時的に動機づけられていることを論じる。

3.5 まとめ

3 章では、2 章でみてきた理論的背景を踏まえ、動詞派生前置詞についての先行研究をみてきた。3.1 節では、動詞派生前置詞の文法化を論じた秋元 (2002), Fukaya (1997) などの研究も言及を行っている記述文法を対象とし、本研究に関わる論点を概観した。3.2 節では、3.1 節の記述を文法化の理論的背景から捉え直し、関係性を位置づけた。3.3 節では、動詞派生前置詞を扱った先行研究について、4 章、5 章、6 章で行う分析の基盤となる記述をまとめた。それを踏まえ、3.4 節では本研究において解明すべき課題をまとめ、本研究がとる解決方策を述べた。

以上をまとめると、本研究の目的は動詞派生前置詞を共時的・通時的に記述し、文法化との関係を考察することである。その解明のため、(i) (ii) (iii) のアプローチをとる。

- (i) 共時的研究：動詞派生前置詞の現代英語における分布を重層化の観点から検討する。
- (ii) 通時的研究：通時的な前置詞化（文法化）プロセスを検討する。
- (iii) 汎時的研究：(i) (ii) を踏まえ、改めて共時性に立ち返り、生起ジャンルの検討を行う。

具体的な研究方法として、(i) では、共時コーパスの事例を分析し、英語母語話者の内省に基づき動詞派生前置詞の包括的な規定を目指す。使用するコーパスは、COCA, BNC である。動詞派生前置詞は、前置詞として周辺的である (Kortmann and König 1992) のに加え、類似した意味の前置詞が複数存在している (cf. 重層化; Fukaya 1997)。そこで4章では、共時的観点から、動詞派生前置詞の分布を検討していく。これらの分布を、典型的前置詞である *about, after* などと比較検討していくことも課題の一つである。アプローチには、作例による英語母語話者へのアンケートによるもの、共時コーパスのデータを用いたものがある。4章では、英語母語話者の内省によっても前置詞カテゴリーにおいて周辺的な成員であることを確認し、Fukaya (1997) の研究が支持されることを示す。(ii) に関しては、5章で、通時コーパスから得た事例を観察し、品詞的振る舞いの変化を分析していく。データはCOHA, OED を用いる。具体的な研究内容として、先行研究、文法化研究、英英辞典などにおいて指摘されている動詞派生前置詞（すなわち、前置詞的用法を持つ *-ing* 形）のデータを収集し、脱範疇化のクライン (Hopper and Traugott 2003) に基づく品詞分類を行い、何世紀から文法化した用法（前置詞としての品詞的振る舞いを示すもの）が観察されるようになったか、通時的検討を行う。分析対象として、先行研究において検討が十分に行われていない *excluding, preceding, barring, respecting* を扱う。(iii) に関しては、6章において、4章、5章の結果を踏まえ、動詞派生前置詞の共時的な生起ジャンルを検討していく。コーパスの例文には、出典のほか、生起ジャンルに関する情報も付与されている点に着目する。BNC, COCA において収集した事例を分析し、文法化した英語動詞派生前置詞が書き言葉において生起しやすい傾向を持つこと、この共時的な振る舞いが通時的に動機づけられていること、を論じる。以上を通し、本研究では、共時的・通時的観点から、言語変化の連続的なプロセスを規定していく。

第4章 共時的分析

本章より、具体的な事例研究を進めていく。4章の目的は、現象全般にみられる特徴を共時的に規定していくことにある。本章の内容は林 (2013a) の3章「前置詞性の規定」を引き継ぎ、深化させたものである¹⁵。

本章の構成は以下の通り。まず4.1節では、先行研究の議論に基づき、動詞派生前置詞における文法化を、動詞的な特徴の喪失と、それに伴う前置詞的な特徴の獲得により特徴づけ、「前置詞性」「動詞性」というパラメーターを立てる。続く4.2節、4.3節は、動詞派生前置詞が典型的な前置詞としての振る舞いを示すか否か、という観点から規定していく。具体的には、前置詞性のテストとして、調査1としてインフォーマントの容認性判断(8名)を行い、(i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right/straight* との共起(林 2013a) の検討を行う。(i) 前置詞句は分裂文への書き換えが可能であり、(ii) 空間・時間・方向性の前置詞は *right* との共起が可能である。調査2として、典型的な前置詞であれば随伴が可能であることに注目し、大規模コーパス(COCA) から (iii) 前置詞随伴がみられる動詞派生前置詞を抽出する。4.4節は動詞性のテストである。脱範疇化の観点から、当該事例の語基である動詞と共起する副詞と動詞派生前置詞が共起するかどうか、インフォーマントの容認性判断(1名)により分析する(cf. Huddleston and Pullum 2002, Huddleston 1984)。4.5節では、分析結果をまとめ、検討を行う。

4.1 前置詞性・動詞性

動詞派生前置詞における文法化は、動詞的な特徴の喪失と、それに伴う前置詞的な特徴の獲得により特徴づけられる。本章では、文法化の進行とともに、動詞から前置詞へ段階的に文法化が進むものと想定する。そのため、動詞であるのか、前置詞であるのかというような二分法(dichotomy)で議論することを避け、様々な動詞派生前置詞の動詞らしさ(「動詞性」; *verbality*)、もしくは前置詞らしさ(「前置詞性」; *prepositionality*)の点から分析を行う¹⁶。Kortmann and König(1992)は、動詞派生前置詞は前置詞残留などの中心的な前置詞の特徴をもたず、統語規則から外れていると述べる。本研究では、この点に着目し、動詞派生前置詞の前置詞性は、典型的な前置詞の振る舞いと同様の

¹⁵ 林(2013a)からの発展は、(i) 前置詞性の検討においてより多くの事例を分析対象とし、(ii) より多くの英語母語話者への調査を行ったこと(4.2節)、(iii) Fukaya(1997)を発展させ前置詞随伴の検討を行ったこと(4.3節)、(vi) 動詞性の検討においても統一的な規定を試みたこと(4.4節)、にある。本節において述べるアプローチ・背景は林(2013a)に負うことが多いが、本章における調査は全て林(2013a)以降に行われたものである。

¹⁶ 本研究の「前置詞らしさ(*prepositionality*)」は、Fukaya(1997)の *prepositional properties, preposition-ness* に相当する概念である。

振る舞いをみせるかどうかという観点から推し量ることができる。一方、動詞性に関しては、動詞的特徴の喪失である脱範疇化に着目し、文法化に伴って、時制・相・法・人称・数の一致などの動詞的機能がどのように損失されていくのか、事例ごとに差異がみられるかどうかに着目して分析を行う。すなわち、文法化後、どの程度の動詞的特徴を保持しているか、という観点から動詞性を推し量ることができる。

以上を通して、本研究では、「動詞性」「前置詞性」という文法化の始点・終点、いわば「文法化の両極」から、コーパスを用いた定量的手法と英語母語話者の内省に基づく定性的手法の融合的アプローチによって、品詞的特質の段階的・連続的変化を統語的・意味論的に規定していく。本章では、特定の構文への参与可能性、または関係代名詞や副詞との共起関係、の観点から分析を行う。

4.2 前置詞性の調査 1: 容認性判断¹⁷

本節では、典型的な前置詞の振る舞いとして、(i) 分裂文 (the cleft construction)、(ii) 強意副詞 *right* との共起 (林 2013a)、(iii) 前置詞随伴 (Fukaya 1997) などの前置詞性を特徴づけるパラメーターを立て、先行研究より収集した 37 の動詞派生前置詞に関し、振る舞いの観察記述から妥当性を検証していく。4.2 節では、(i)(ii) を行った林 (2013a) の調査を拡張し、より多くの数の母語話者への調査を行う。4.3 節では、Fukaya (1997) の追試として (iii) の観点から分析を行い、11 事例に対して行われていた記述を、37 例の動詞派生前置詞へと拡張させる。

具体的な手順として、先行研究および辞書より収集した 37 種類の動詞派生前置詞を分析対象として作例を行い、Emonds (1976) による以下のテストを用いて調査を行った:(i) 分裂文、(ii) 強意の副詞 *right* との共起可能性。英語母語話者の内省により容認度を調査し、その結果に基づき前置詞性を算出した。作例の基となった英文は Appendix 1 を参照。母語話者へのアンケートは、以下のスケールにより容認度の調査を行った: 5 (容認可能かつ自然な表現)、4 (容認可能であるが、どこか不自然さが感じられる可能性がある)、3 (疑わしいものの、おそらく容認は可能)、2 (周辺的であるが、全くもって容認不可能というわけではない)、1 (殆ど容認不可である)、0 (容認不可能)。合計で 18 の回答を得、容認度の平均値に基づき前置詞性 (すなわち、前置詞としての典型性を測るテストにより推察された、前置詞としての容認性) を算出した。具体的な手順と結果に関しては、4.2.1 節、4.2.2 節で述べる。以上は林 (2013a) の追加調査と位置づけられる。

¹⁷ 本節の内容は、Hayashi (2015) に基づくものである。

4.2.1 分裂文

林 (2013a) は、動詞派生前置詞を規定するパラメーターとして、丸田・平田 (2001) において述べられている、Emonds (1976)による以下の判別テストを用いて母語話者の内省に基づく調査を行った。丸田・平田 (2001: 122) は、Emonds (1976) を引用し、分裂文を前置詞句 (PP) と副詞を区別するテストとして用いることができると述べている。(1)(2) のように、強調される要素 (斜体部) が現れる部分には、通例、名詞句 (NP) または PP しか現れることができない。

- (1) a. It's *the custard pie* that I disliked. (NP)
b. It was *a tax break* that was counted on. (NP)
c. It was *to John* that she spoke. (PP)
d. It is *with great pleasure* that I presented our speaker. (PP)
- (2) a. *It was *too carefully* that she spoke. (AdvP)
b. *It's *very unhappy* that Bill is. (AP)
c. *It is *blow up some buildings* that you should. (VP)

(Emonds 1976: 133; 丸田・平田: 122)

丸田・平田 (2001: 122) は、従来、副詞的要素と考えられていたものもこの位置に生起することから、(3)(4) も、自動詞句 P を主要部とする PP とみることができる、と述べる。

- (3) a. It was *afterwards* that the news broke.
b. It's *upstairs* that we have to beat. (Emonds 1976: 174)
- (4) It was *before* that I saw John.

(丸田・平田 2001: 122)

本研究では、前置詞性が増す (上昇する) につれ、*-ing* 形前置詞 (動詞派生前置詞) を含む句は分裂文により強調することが可能となっていくと想定して調査を行った。林 (2013a) の調査対象である 28 例に加え、合計 37 の動詞派生前置詞を含む英文を基に分裂文への作例を行った。分析対象は 1.2 節、作例された英文 (B1)-(B37) については Appendix 1 を参照のこと。英文の容認度は、8 名

の英語母語話者（アメリカ英語を母語とする話者 4 名、オーストラリア英語 2 名、イギリス英語 1 名、カナダ英語 1 名）による判定を受けた。

調査に基づき、算出された前置詞性の結果を表 1 に示す。前置詞性が 3 を上回るもの、2 より大きく 3 未満であるもの、1 より大きく 2 未満であるもの、1 未満、ごとにまとめた。括弧内の値は、各事例の前置詞性を示す。

表 1 分裂文に基づく前置詞性

前置詞性	動詞派生前置詞
3-	<i>during</i> (4.6), <i>following</i> , <i>starting</i> (3.5), <i>according to</i> , <i>succeeding</i> (3.1), <i>pertaining to</i> (3.0)
2-3	<i>owing to</i> , <i>past</i> (2.9), <i>regarding</i> (2.6), <i>depending on</i> (2.4), <i>given</i> , <i>respecting</i> (2.3), <i>excluding</i> , <i>related to</i> , <i>including</i> , <i>pending</i> (2.1)
1-2	<i>concerning</i> (2.0), <i>barring</i> , <i>preceding</i> (1.9), <i>except</i> (1.8), <i>confronting</i> (1.6), <i>allowing for</i> , <i>granting</i> , <i>notwithstanding</i> (1.5), <i>failing</i> (1.4), <i>considering</i> , <i>covering</i> , <i>lacking</i> , <i>save</i> , <i>touching</i> (1.3)
-1	<i>wanting</i> (1.0), <i>granted</i> (0.9), <i>saving</i> (0.8), <i>bar</i> , <i>bating</i> , <i>excepting</i> , <i>facing</i> (0.5), <i>bating</i> (Poutsma 1926) (0.4)

表 1 より、前置詞性が 2 を上回る 16 例を除き、過半数以上の動詞派生前置詞が 2 未満の低い前置詞性を示した（最大値は 5 である）。空間的・時間的な前後関係を表す *during*, *following*, *starting*, *succeeding*, *past* が高い前置詞性を示した。この傾向は、前置詞としての典型性が、前置詞としての典型的な意味と関係する可能性を示唆する。また、*bating* (cf. Curme 1979: 330, 563; Jespersen 1954: 410; Visser 1972: 1218; ジーニアス英和大辞典；リーダーズ英和辞典) のように文法書においては前置詞と記載されているものの、現代英語においては廃語 (obsolete) である事例の前置詞性は、同じく「除外」の意味を持つ *barring* からの作例を行った英文、Poutsma (1926: 712) に収録された英文のいずれにおいても容認されていない。そもそも、現代英語において使用されていない事例が、話者により容認されないというのは当然のことと思われるだろう。見方を変えれば、この種の結果は共時的観点から通時的な言語変化を観察することができる、という方法論的な示唆を与えるものとい

える。

以上の結果から、多くの動詞派生前置詞は、前置詞性が低いと推察される。この結果は、動詞派生前置詞が周縁的であるとする Kortmann and König (1992) の記述を支持する。

4.2.2 強意副詞 *right* との共起

丸田・平田 (2001: 121) は、強意副詞 *right* / *straight* との共起が、前置詞を識別するテストとなり得ると述べる。Emonds (1976: 174) は、「空間的・時間的位置、方向性を表す（ただし、頻度を表すものを除く）前置詞は *right* を前置することができる」と記している。

- (5) a. He kept on drinking *right until* midnight.
b. She put it *right into* her pocket.
c. The boy came *right from* the store.
d. They kissed *right after* the ceremony.

(cf. Emonds 1976: 174; 斜体部分は筆者による)

この観察から、*right* との共起は、動詞派生前置詞が *at, by, for, from, in, on, to, about, above, after, before, into* (安藤 2005: 621, 632) などの空間的・時間的意味を持つ前置詞と同様の振る舞いをみせるかを推し量るテストとして使用することができると想定する¹⁸。4.2.1 節において行った分裂文を用いた作例と同様、*right* との共起可能性について作例を行った (Appendix 1, 例文 (C1)-(C37) を参照)。10名の英語母語話者（アメリカ英語を母語とする話者6名、オーストラリア英語3名、カナダ英語1名）により容認度判定を受け、各事例の平均値から前置詞性を算出した。調査結果を表2に記す。表1と同様、前置詞性が3を上回るもの、2より大きく3未満であるもの、1より大きく2未満であるもの、1未満、によりそれぞれ整理した。括弧内の値は、各事例の前置詞性を示す。

¹⁸ ただし、*Yet people continue to walk right by.* (COCA) のように、イディオム性が高い不変化詞的 *down, out* などの用法は本分析の対象外である。この種の例については、本節と異なる基準により、慎重に検討を進めていく必要がある。

表2 強意副詞 *right* との共起関係に基づく前置詞性

前置詞性	動詞派生前置詞
3-	<i>past</i> (4.9), <i>preceding</i> (3.4), <i>regarding</i> (3.2)
2-3	<i>including</i> (3.0), <i>following</i> (2.9), <i>during</i> (2.8), <i>depending on</i> , <i>starting</i> (2.5), <i>according to</i> (2.3), <i>lacking</i> , <i>succeeding</i> (2.1)
1-2	<i>allowing for</i> , <i>pertaining to</i> , <i>touching</i> , <i>save</i> (2.0), <i>except</i> , <i>granting</i> , <i>related to</i> (1.8), <i>concerning</i> , <i>excluding</i> (1.7), <i>confronting</i> , <i>given</i> , <i>notwithstanding</i> , <i>pending</i> , <i>respecting</i> (1.6), <i>considering</i> , <i>owing to</i> (1.5), <i>bar</i> , <i>barring</i> , <i>granted</i> (1.4), <i>failing</i> , <i>saving</i> , <i>wanting</i> (1.3), <i>covering</i> (1.2)
-1	<i>facing</i> (1.0), <i>excepting</i> (0.9), <i>bating</i> , <i>bating</i> (Poutsma 1926) (0.8)

表2より、空間的・時間的意味を表す *past*, *preceding*, *during*, *including*, *following* (特定の文脈においては前置詞 *after* に置換が可能; Olosson 1990) の前置詞性が高い。一方、空間的・時間的意味を持たない *regarding* もまた比較的高い値である。ただし、*regarding* の例文については、(6) のように *right* が強意副詞ではなく「適切な」「正しい」の意味と解釈が優先された可能性も考えられる¹⁹。

- (6) a. She could find nothing *right* about the city, and she was plenty mad at me.
 b. So this is no -- there's nothing *right* about this at all.

(COCA)

また、*past*, *preceding*, *regarding*, *including*, *following*, *during*, *depending on*, *starting*, *according to*, *lacking*, *succeeding* という 11 の動詞派生前置詞を除くものは2以下の値となっている。この結果は、動詞派生前置詞は、強意副詞 *right* との共起という観点からも周辺的な前置詞といえる。*bating* は、分裂文と同様、最も低い値であった。また、「除外」の意味をもつ *save*, *except*, *excluding*, *bar*, *barring*, *saving*, *excepting* などの前置詞 (cf. 児馬 2001) が2以下の前置詞性であった点も興味深い。このことから、前置詞の意味が、強意副詞 *right* との共起から推察される前置詞性と何らかの関係性をもつというこ

¹⁹ (6) の解釈が行われている場合、*right* は強意副詞とならないため、調査を行う例文を再検討するなど、改めて調査を行う必要がある。これについては、今後の課題としたい。

とができる。

4.2.3 調査1のまとめ

4.2節では、Emonds(1976)を援用した作例を行い、(i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right* との共起、から英語母語話者の内省により動詞派生前置詞の前置詞性を検討してきた。以上の結果を図5に示す。

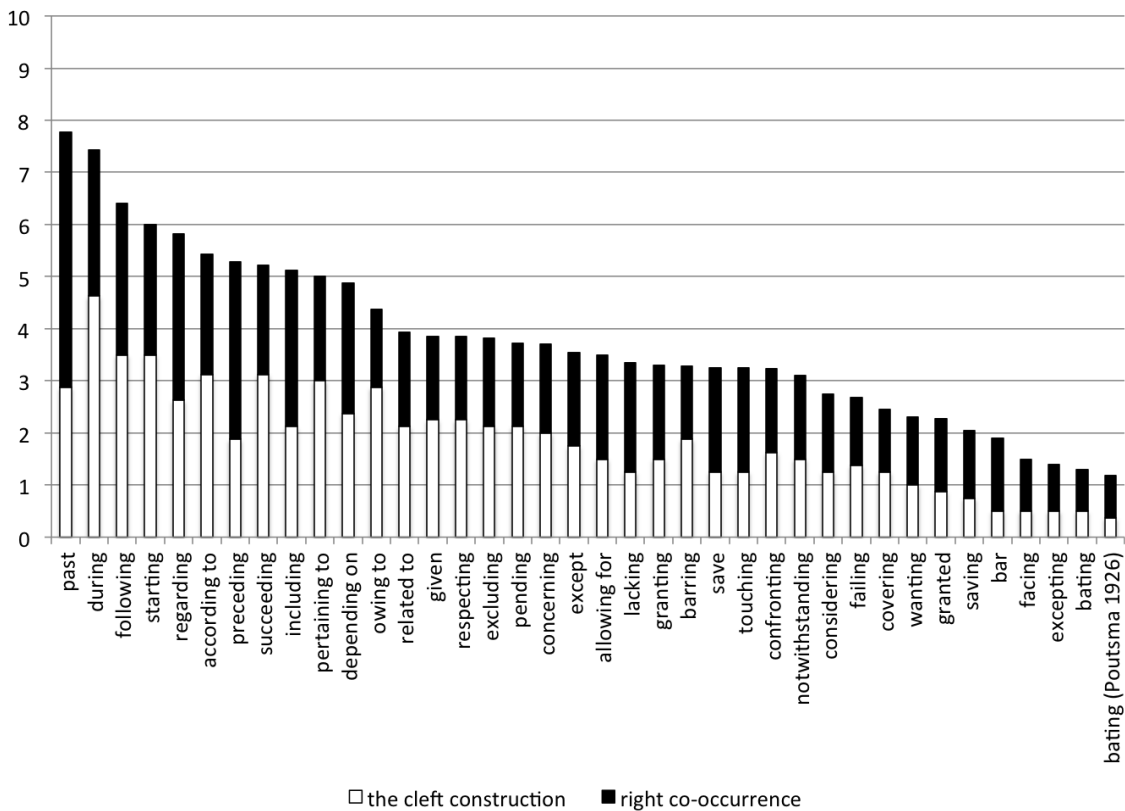


図5 動詞派生前置詞の前置詞性 ((i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right* との共起、に基づく)

(i) (ii) における前置詞性の最大値は、それぞれ5である。従って、図5における前置詞性の最大値は10であり、0に近づくほど低い点に注意されたい。図5より、分析対象とした37例のうち10の動詞派生前置詞 (*past, during, following, starting, regarding, according to, preceding, succeeding, including, and pertaining to*) のみが5以上の前置詞性と評価される。このことから、本調査の結果においては動詞派生前置詞が周縁的であるとわかる (cf. Kortmann and König 1992: 683)。また、37例の前置詞性が異なることから、言語変化の程度性、すなわち文法化の進行度が事例により異なることが示唆される。動詞派生前置詞の文法化の程度性が類似していれば、前置詞性に大きな差異はみられない

だろう。この結果は、文法化の漸進性を示唆するものであるといえる。また、空間的・時間的意味をもつ *past, during, following, starting* (前置詞 *after* と類義; cf. LLA)、*succeeding* (前置詞 *following, after* と同義と推測される) は高い前置詞性をもつ。この結果は、空間的・時間的意味をもつ前置詞は、本研究における前置詞性の観点からも高い値を示すことを示唆している。Emonds (1976: 174) のように、強意副詞 *right* との共起に基づく調査は時間的・空間的意味をもつものが高い前置詞性となる一方(「除外」を表す *save, except, excluding, bar, barring, saving, excepting* が低い点に注意)、*during, following, starting, succeeding, past* は分裂文においても高い前置詞性を示している。特に、*past, during, following, starting* は (i)(ii) のいずれにおいても 2.5 以上の値を示している。従って、前置詞性と前置詞の意味の典型性にも何らかの相関がみられる。このことから、空間的・時間的意味が、前置詞の典型性と関わっている可能性をもつと示唆される。

以上、4.2 節では林 (2013a) の追試を行い、(i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right* との共起 (Emonds 1976) を援用した作例テストにより、英語母語話者の内省に基づき前置詞性の規定を質的に行った。ここでの観察は、動詞派生前置詞の文法化の程度性が事例により異なることを示し、多様な言語変化のプロセスの一端を「前置詞性」という観点から捉える上での方法論的な指針を提供するものである。言語変化の多様性、事例により異なる文法化の進度を規定していく上では、全事例に適用が可能な一貫した手法を模索する必要がある。本節のアプローチは、前置詞としての典型性に着目することにより、この種の多様な動詞派生前置詞の文法化の程度性を質的に規定する道筋を示す。特に、数値化された前置詞性は、最も前置詞として典型的な *past* (7.8) の一方で、分析対象とした 37 事例の前置詞性の平均値が 3.8 (最大 10) であることから動詞派生前置詞が周辺的であることが示唆される。(i) により推察される前置詞性が高い事例は、時間的・空間的意味を持つ動詞派生前置詞の典型性が高いとされる (ii) においても高い前置詞性を示すことから、これらの意味が前置詞としての典型性に関わる、という意味論的側面の重要性を提起する。また、*bating* などの現代英語において使用されていない事例の前置詞性が低いことから、言語変化により廃語となった語を共時的に規定する、という方法論的な示唆を得ることができる。このような記述の蓄積が、将来的に言語変化を観察する上での史料としての貢献も期待できる。以上の観察は、共時・通時の接点とし文法化への汎時的視点を提供する。4.2 節で行った調査の課題として、「除外」を表す動詞派生前置詞を *bar, barring, save, saving, excepting* を典型的前置詞 *but, except, without* (児馬 2001) との比較を、重層化の観点から進める必要があるだろう。頻度のみならず、具体的な生起文脈などを踏まえて、各事例の

分布をみていく必要がある。また、方法論的な課題として、本研究で検討した例文の代表性、生起文脈の検討、妥当性を追試する必要もある。また、本研究ではアメリカ英語、イギリス英語、カナダ英語など、世界各地の話者の回答を得たものの、内省の結果には地域差がみられた。英語の地域差を念頭においた下位分類、分布の差異を検討する必要もあるだろう。

4.3 前置詞性の調査 2: コーパス²⁰

本節では、(iii) として前置詞随伴 (cf. Fukaya 1997) に着目し、COCA による検索を行い随伴の用例数を調査した。結果、*during* を除く大半の前置詞が随伴しない、という Fukaya (1997) の結果を支持する結果となったため、(i) (ii) のように前置詞性の算出は行わない。本節では、コーパスにおける具体的な生起数を通し、動詞派生前置詞が前置詞として周辺的であることを指摘する。本節では、Leech *et al.* (2009) らが指摘した、動詞派生前置詞 *following* の主語解釈にみられる言語変化の漸進性を、共時コーパスのデータにより統一的観点から数量的に規定することを目的とする。具体的には、Fukaya (1997) による 11 例の *-ing* 形前置詞の分析を援用し、その追試と妥当性の検証、補完を目指すこととなる。4.2 節において行った調査は限られた人数の母語話者を対象とした調査のため偏りを持つ恐れがあり、本調査は異なる観点から前置詞性へと迫るものとして、量的観点に基づく視座を提供する。

ここでは、前置詞に特有な現象である前置詞随伴 (cf. Fukaya 1997) に着目する²¹。典型的な前置詞は、(7a) のように、先行詞を修飾するとき関係代名詞に前置することができる。この観点から動詞派生前置詞をみると、*during* は随伴の形を取ることができる (7b)。

- (7) a. That is the office *at which* he works. (安藤 2005: 200; 斜体部は筆者による)
b. There was a very awkward silence *during which* we locked eyes. (COCA; 斜体部は筆者による)

本研究では Fukaya (1997) を援用し、(7b) のように随伴がみられる動詞派生前置詞を調査した。先

²⁰ 本節の内容は、林 (2018) に基づく。

²¹ 前置詞は「代名詞、名詞 (句・節) およびこれに準ずる語を目的語として、それと共に形容詞句、副詞句、時には名詞句を構成する語 (小西 1976:3)」といわれる。ここで、他動詞も「代名詞、名詞 (句・節) を目的語とする」点に注意。この機能は他動詞・前置詞の両者に共通する。従って、動詞・前置詞という文化化の始点・終点、いわば「文化化の両極」から、品詞的特質の連続的变化を規定していく本研究の目的には適用できない。

行研究・辞書から収集した動詞派生前置詞 37 例 (1.2 節参照) の前置詞性を規定していく²²。具体的手順は以下の通り。第一に、COCA において、[-ing which] 形の検索を行った。第二に、それらを手作業にて分類し、随伴を示す用例数を数えた²³。

表 3 前置詞随伴を示す動詞派生前置詞

	動詞派生前置詞	頻度		動詞派生前置詞	頻度
1	<i>during</i>	※3266 (3842)	11	<i>depending on</i>	※0 (376)
2	<i>according to</i>	※310 (373)	12	<i>bar</i>	0 (22)
3	<i>past</i>	26 (112)	13	<i>considering</i>	0 (16)
4	<i>following</i>	15 (40)	14	<i>given</i>	0 (8)
5	<i>concerning</i>	13 (42)	15	<i>related to</i>	0 (4)
6	<i>regarding</i>	7 (78)	16	<i>granted</i>	0 (2)
7	<i>owing to</i>	7 (7)	17	<i>pertaining to</i>	0 (2)
8	<i>failing</i>	6 (8)	18	<i>respecting</i>	0 (2)
9	<i>notwithstanding</i>	2 (4)	19-22	<i>facing, pending, save, touching</i>	0 (1)
10	<i>including</i>	1 (29)			

以下、分類基準、用例、結果の詳細を報告する。表 3 は、検索により得られた事例数 (括弧内) のうち、手作業により抽出した前置詞随伴がみられる事例数を示している。表 3 に記載がない 15 の動詞派生前置詞は、検索で事例がみられなかったものである。頻度が高い *during* (3842 例)、*according to* (373 例)、*depending on* (376 例) については、COCA のランダムサンプリング機能で 100 語を抽出し、随伴を示す用例数の割合に基づき概算した数 (※) を記した。

次に、随伴の形を取ることができる動詞派生前置詞、上位 6 例の例文 (*during* を除く) を (8) に示す (出典は全て COCA)。分類にあたっては、4.2 節の引用文献 (Appendix 1 参照) における記述に加え、『ジーニアス英和大辞典』『リーダーズ英和辞典』の定義を参考にした。*following* については「英米の語法辞典は、単に *after* ですむところに *following* を用いることに批判的で ‘*follow*’ の原義が活かされた ‘*after + as a consequence of*’ の意の場合にのみ用いることにその有用性を認めているよ

²² 本研究における事例収集の方法では、-ing 形の前置詞を網羅できない恐れについても注意が必要である。例えば、以下の方法による手法がある。清水 (2016) は、2006-2010 年に出版された学術誌から論文 100 本を選び、Chamiak Reranking Parser というソフトウェアにより「他動詞+名詞」パターンを自動抽出してコロケーションリストを作成し、多分野で上位 30 語となっている動詞を分析した。結果、理工系の諸分野において *using* が前置詞となりつつあると指摘している。

²³ 第三に、COCA の各用例にタグづけられた情報から、随伴を示す動詞派生前置詞の生起ジャンルについて考察を行った。これについては 6.3 節で検討を行う。

うである」という小西 (1976: 163) の記述を分類の基準とした。(8a) の出典は、この随伴現象に関する記述を示す²⁴。

- (8) a. This phenomenon is the superfluid analog of the AC Josephson effect for superconductors, *according to which* a supercurrent will oscillate across a thin tunnel junction under an applied voltage.
(cf. 山口 2013: 601)
- b. Galaxies also contain millions of small- and medium-sized black holes, each with an event horizon *past which* light is never seen again.
- c. At the end of June 1829 the Commandant of the Academy, Colonel Percy Drummond visited Faraday, *following which* Faraday wrote to him giving his terms.
- d. The matter *concerning which* we were supposed to meet in Georgetown has been canceled indefinitely.
- e. Under the tablecloth the table must possess that furniture memory *regarding which* so many spiritists are certain.

また、(9) の *considering* は、主節、分詞節における解釈上の主語が一致しない (cf. Hopper 1991) ため前置詞化している可能性があるが、アメリカ英語を母語とする 50 代の話者によると、*for* などの前置詞に置換することは不可能であるという。

- (9) It would include *considering which* art forms make the best friendships. (COCA)

従って、3 章で検討した前置詞化した *considering* (cf. 安藤 2005: 622; Hopper 1991) とは異なり、前置詞化していないと考えられる (cf. Olofsson 1990)。

表 3 より、分析対象とした 37 の動詞派生前置詞のうち、随伴を示すのは 10 例のみとわかる。こ

²⁴ 分類においては、前置詞以外の品詞的振る舞いを示す例 (i)、あるいは「決定詞の *which*」(Huddleston and Pullum 2002: 1043-1044; 岩田・田中・藤川・辻 (訳) 2018: 23-25) である (ii)、疑問代名詞との随伴がみられる例 (iii) を除外した。また、(iv) の *bar* は名詞、(v) の *given* は *DATA* を後置修飾する形容詞的な用法であり除外される。(vi) は、一見、随伴の形と考えられるが、(ii) と同じく「決定詞の *which*」であり分析の対象から除外される。

- (i) David Duke, one of the two candidates, has quite a *lurid past which* he now disowns. (COCA)
(ii) The decision *regarding which to use* should be based on the NICE guidance, 10 although the patient... (COCA)
(iii) *To whom* should I address the letter? (安藤 2005: 170)
(iv) But then she remembered: the street which housed the Breadfruit, the *bar which* claimed the duppy each night. (COCA)
(v) Sometimes it reads NO DATA *GIVEN which* is the same as UNAVAILABLE and a signal you don't want to pick up. (COCA)
(vi) After all, commodities have been in a bear market that has lasted, *depending on which* thing you pick, from 14 to 23 years. (COCA)

のうちさらに、*during, according to* を除く大半の動詞派生前置詞は、典型的な前置詞とは異なり前置詞随伴をしない傾向を示すといえる。以上は、前置詞随伴の例として *during* (77 例)、*according to* (1 例)、*following* (5 例) を指摘し、*during* を除き、前置詞随伴・残留は非常に頻度が低いと結論づけた Fukaya (1997) を支持する。

以上、4.3 節では、前置詞の振る舞いである前置詞随伴 (cf. Fukaya 1997) に着目し、大規模コーパスによる量的規定を試みた。4.3 節の観察が示すように、前置詞随伴の関係代名詞の形をとることができる動詞派生前置詞には偏りがある。この分布は、(i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right* との共起 (4.2 節)、副詞共起 (4.4 節) の結果とは異なるものであり、今後も前置詞らしさを測る種々のパラメーターを立て、複合的な観点から現象を分析していく必要性を示唆する。*about, after* など、典型的な前置詞と振る舞いの違いを比較し、深化を図ることが可能となるだろう。さらなる課題の一つとして、先行研究における分類の基準を吟味し、さらなる検討を行う必要がある。例えば、*failing* に関し、本研究では田中 (2017:381) の結果 (5 例) とは異なる結果 (6 例) が得られたが、分類基準などの違いを精査する必要がある。第二に、通時性との関係である。5.6 節で検討を行うが、*respecting* の随伴形 (10) が後期近代英語期に観察される (出典は OED)。現代英語では観察されなくとも、過去に随伴形がみられた可能性を検討する必要がある。

(10) This is an event *respecting which* it is impossible to keep silence. (1841; Lane Arab. Nts. I. 102)

4.4 動詞性の調査²⁵

本節では、動詞派生前置詞が前置詞としての振る舞いを示すか否か、文法化の脱範疇化における動詞性の喪失に着目する。大規模コーパス、作例、母語話者による内省により実証的手法を用いて検証を進める。分析対象は、林 (2013a) が分析対象とした以下 28 例である。

(11) *allowing for, barring, concerning, confronting, considering, covering, during, excluding, excepting, facing, failing, following, given, granted, including, lacking, notwithstanding, owing to, past, pending, preceding, regarding, respecting, rising, saving, starting, touching, wanting* (林 2013a: 3)

²⁵ 本節の内容は、林 (2014) に加筆・修正を加えたものである。

(11) の動詞派生前置詞が前置詞としての振る舞いを示すか否か、大規模コーパス、作例、母語話者による内省により実証的手法を用いて検証を行う。なお、本節の内容は、林 (2013a: 29-36) の指摘を発展させたものである²⁶。

4.4.1 調査の背景

ここでは、3.2 節で示した脱範疇化にみられる性質 (Hopper and Traugott 2003: 107) を前提とする。すなわち、major category から minor category へと文法化していくのに伴い、動詞的特徴が失われる (脱範疇化)。それによって、動詞派生前置詞は、文法化する前に動詞と共起関係をもっていた副詞と共起関係をもたなくなると考えられる (cf. Huddleston 1984: 346-347; 3.3.2 節)。ここでは (A) (B) を想定して調査を行う。

- (A) 文法化によって動詞から前置詞が派生する際 (文法化が進行するのに伴い)、動詞がそのもとの意味や性質を失うと、元々、動詞と共起しやすかった副詞と共起できなくなるのではないか。
- (B) 文法化が起きていても、動詞としての性質が保持されていれば、そのまま副詞との共起関係は変わらないといえるのではなかろうか。

(A) に関し、例えば動詞 *consider* は (12) のように、多くの副詞と共起する²⁷。

- (12) a. When you finish college, I think you should *seriously consider* getting a Ph.D. in theology, ...
- b. It is necessary to *carefully consider* many issues related to implementation in a specific context.
- (COCA)

しかし、動詞派生前置詞へと文法化すると、副詞との共起関係が消えていく。具体的に、以下の

²⁶ 4.4.1 節に述べる調査目的のうち「動詞 *consider* が文法化するのに伴い、副詞との共起関係に変化がみられる」という指摘は林 (2013a) の考察に基づく。本研究において実施した調査は林 (2013a) の提出後に実施したものであり、本節で報告する結果は林 (2013a) に記載されていない本研究独自のものである。ただし、4.4.1 節で述べた調査にかかっては、林 (2013a) の指摘に多くを負うものである。分析対象となる事例が 28 例であるのも、林 (2013a) が分析対象とした事例以外についての文献調査を行う前に本調査が実施されたことによる。

²⁷ COCA にて、*consider* の直後に共起する -ly 語尾となる副詞の件数を抽出した。目視により副詞以外の品詞を除外すると、*seriously* (48 件)、*only* (29 件)、*briefly* (20 件)、*carefully* (14 件) という順序の検出数となった。この検索を行ったのは 2013 年 4 月下旬であり、2019 年 3 月 23 日現在の検出数とは異なることに注意されたい。

例文をみてみよう。(13a) は動詞派生前置詞の例文であるが、*considering* の直前に *seriously, carefully* を挿入すると、(13b)(13c)のように、程度の差こそあれ、文の容認度は低下する。

- (13) a. She looks young, *considering* his age. (ジーニアス英和大辞典)
b. ?She looks young, *seriously considering* his age.
c. ??She looks young, *carefully considering* his age.

よって、ここでの *considering* は、文法化する前に動詞 *consider* と共起関係をもっていた副詞と共起関係をもたなくなる、ということができる。ここで、(13a) から (13b) へと文法化が進行するに伴い、脱範疇化がみられたことに注意されたい。すなわち、文法化の進行に伴う脱範疇化が起きている証拠として、(13a) と比較して (13b) の容認度が低下していること、動詞・動詞派生前置詞に関して、ともに副詞との共起関係を調査していくことによって、容認度の低下により脱範疇化が起きていると捉えることができるのではないかと考える²⁸。

次に、(B) に関して。例えば、動詞 *lack* は多くの副詞と共起する。そのなかで、(14a) のように副詞 *completely* と共起することがよくあるようだ。(14b) は動詞派性前置詞を含む文であり、(14c) は *lacking* の直前に副詞 *completely* による修飾を受けることが可能であることを意味する。

- (14) a. I don't think they *completely lack* capacity. (COCA)
b. He was a wild young man, *lacking* reserve.
c. He was a wild young man, *completely lacking* reserve. (英和活用大辞典)

よって、ここでの *lacking* は、(13b)(13c) の *considering* と比較して、動詞としての性質（動詞性）が保持されているということができる。

²⁸ (14a)-(14c) は分詞構文とみることができる可能性も考えられる。動詞派生前置詞の考察においては、副詞とは共起していないものの分詞構文として容認できる、という可能性を検討していく必要がある。ここでは、各例が「分詞構文であるか否か」は問題とせず、意味的・統語的にみて、副詞との共起関係の喪失が、文法化に伴う、動詞から前置詞への脱範疇化を表す1つの証拠であると考えられる。脱範疇化の要因は、副詞との共起関係の喪失以外にも、解釈上の主語 (cf. Fukaya 1997) などの要因がある。それらの検証に関しては、本節の対象外とする。

4.4.2 調査の目的

ここでは、本論における調査方法を示す。4.4.1 節にて述べた (A)(B) のように、(11) の動詞派生前置詞 28 例について、動詞としての性質が保持されているか否かを、副詞との共起関係という観点からみていきたい。調査は以下の手順で行った。(i) 動詞と共起関係をもつ副詞を BNC にて抽出した (全ての例文について、副詞と動詞の共起関係が保たれているか否か、事前に母語話者の内省に基づく文法性判断またはコーパスで検索を行った)。(ii) 動詞派生前置詞が用いられている例文について、それぞれの分詞動詞の直前に (i) の動詞と共起関係をもつ副詞を挿入し、作例を行った。(iii) 各々について、文法的であるか否か、英国母語話者 1 名の内省に基づく判定を行った²⁹。

4.4.3 調査の結果

4.4.2 節の調査結果は、以下の表の通りである。表 4 においては、28 例の動詞派生前置詞と、BNC の頻度検索において抽出された上位の副詞、そして動詞派生前置詞との共起関係に基づく容認度判定の結果 (OK/?/*) が記されている。容認度の判定方法は、OK (統語的・意味的に容認可能であり、自然なもの) ? (統語的・意味的に不自然と感ぜられるところがあるが、完全に容認不可能であると断言できないもの)、* (容認できない) の 3 段階とした。

²⁹ 英国南部出身の 1 名の英語話者 (調査当時 34 歳、男性、英語教育の修士号を修めている) の内省に基づく。ただし、1 名の内省に基づく調査結果による一般化は、本研究最大の弱点であると言わざるを得ない。コーパスによる調査の、OED の調査によっては、本調査の反例となる事例が多数出現する。従って、本論における記述の妥当性においては慎重を要するものであり、今後の課題として母語話者の調査母数を増やしていくこと、母語話者の内省のみに依拠せず、コーパスに基づく統計的信頼性・妥当性の得られるデータを同時に提示し、両者を行き来して現象そのものを精査していく必要がある。

表 4 動詞派生前置詞と副詞の共起関係

allowing for	barring	concerning	confronting	considering	covering	during
theoretically	immediately	directly	directly	carefully	exactly	exactly
?	*	*	?	*	*	*
excluding	excepting	facing	failing	following	given	granted
explicitly	-	currently	completely	directly / immediately	explicitly	generously
?	-	OK	?/*	OK or *	?	*
including	lacking	notwithstanding	owing to	past	pending	preceding
typically	completely	clearly	largely	quickly	-	immediately
*	OK	?	OK	*	-	OK
regarding	respecting	rising	saving	starting	touching	wanting
usually	usually	usually	actually	typically	briefly	really
*	*	*	?	*	?	*

以上の結果を、容認度判定ごとに表示すると、以下 (15) の通りである³⁰。

(15) OK: *facing, (following), lacking, owing to, preceding*

?: *allowing for, confronting, (failing), given, notwithstanding, saving, touching*

?: *barring, concerning, considering, covering, during, (failing, following), granted, including, past, regarding, respecting, rising, starting, wanting*

以上より、動詞派生前置詞への文法化に伴い、文法化する前に動詞と共起関係をもっていた副詞との共起関係に変化がみられることが判明した。以下、4.4.4 節において、具体的に検討する。

³⁰ 個々の例文及び判定の結果については、Appendix 2 を参照のこと。

4.4.4 考察と課題

ここで、先行研究における記述と、動詞派生前置詞の動詞語幹の意味の漂白化を考慮し、さらなる下位分類を行うと以下 (16) のようになる³¹。

(16) (A) 動詞の意味、副詞との共起関係がともに保持されている

facing, lacking, owing to, preceding

(B) 動詞の意味が保持されているが、共起関係が失われているもの

confronting, covering, excluding, failing, including

(C) 動詞の意味は漂白化するが、副詞との共起関係がみられる

(regarding, preceding), saving

(D) 動詞の意味が漂白化し、副詞との共起関係が失われる

barring, concerning, considering, following, granted, starting

以上の結果を踏まえると、(i) 大半の動詞派生前置詞において、副詞との共起関係が失われていくこと、ただし (ii) 容認度には段階性をもった分布がみられること、(iii) *during, excepting, notwithstanding, past, pending* など、事例によっては現代英語コーパスにおいて動詞語幹（動詞派生前置詞形より *-ing* を消去したもの）と共起する副詞がコーパスにおいて検出されないということ³²、が判明したといえる。動詞性の観点から考察すると、動詞語幹の意味が保持され、副詞との共起関係が保持されている (A) が最も動詞性が高く、(B), (C), (D) の順に動詞性が低くなると考えられる。ここでは、漂白化は文法化の後期に起こるという Hopper and Traugott (2003) の指摘を踏まえ、(B) より (C) の方が、文法化が進んだと考える。以下にみる *following* のように、共起関係の変化は動詞語幹の意味・機能に変化が起きたことを示唆する一方、Olofsson (1990) が述べるように、前置詞化に伴い共起する副詞の数は減るものの全ての副詞との共起関係が失われるとは限らないためである。

なお、必ずしも副詞全般との共起関係が失われるとは限らない。林 (2013a: 34) も指摘するように、「期間」を表す動詞派生前置詞については、文法化に伴い、副詞との新たな共起関係がみられる

³¹ *barring, considering, following* については安藤 (2005:247)、*saving* については児馬 (2001) に、*concerning, regarding* は秋元 (2002) に漂白化の指摘がある。また、*following* と同様、*preceding, starting* も時間的な前後関係を表していることから漂白化がみられると考えられる。*granted* については、譲歩の意味 (cf. 川端 2010) への変化がみられることから、ここでは漂白化を経ていると判断した。

³² おそらく前置詞性が高いためと予想される。

ようになったと考えられる例がある。たとえば、*during* は、*particularly, mainly, significantly, even, before, entirely, especially* と共起する。また、*following* についても *immediately* と共起する例がみられる。

- (17) a. This was, I suppose, the case, *particularly during* the war, the Second World War, er, where it was used to promote a National feeling.
- b. The years *immediately following* 725/6 must have been a crucial period in the establishment of Aethelbald of Mercia's domination of southern England.

(BNC; 林 2013a: 34-35)

(17a) (17b) にみられる共起関係は、「期間」を表す *during, following* 特有にみられるものであると考えられる。文法化が進み、意味の漂白化が起き *following* が「因果関係 (=because of)」の意味を獲得すると、*immediately* との共起関係は失われる (18)。

- (18) a. Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 36)
- b. Dickens died in 1870 *immediately following* a collapse.
- c. *Dickens died in 1870 *immediately because of* a collapse.

(18b) のように *following* の直前に *immediately* を挿入すると、*immediately following* という共起関係のため、*following* は「時間的な前後関係」を表す。一方、(18c) のように *following* を *because of* に置換すると容認されない。すなわち、(18c) において *immediately* と *because of* は共起しない。*following* の文法化が進むに従って、因果関係の意味を持つようになると、時間的前後関係の意味を表す *following* のときには *immediately* との間にみられた共起関係が失われる。このことから、文法化に伴い *minor category* へと品詞カテゴリーが変化していくに従って、動詞語幹の意味だけでなく、副詞との修飾関係にも変化がみられると推察される。

以上、4.4 節においては動詞性から規定を試みた。林 (2013a) の観察に基づき、副詞との共起関係に着目し、作例に基づく判定テストを行った。結果、文法化に伴い、文法化する前に動詞と共起関係をもっていた副詞との共起関係に変化がみられることが確認された。また、動詞の意味が保持されるため共起関係が失われない動詞派生前置詞、動詞の意味が喪失されても共起関係をもつもの、

漂白化によって共起関係が失われていくものなど、動詞派生前置詞ごとに異なる、様々な共起関係の変化を観察した。さらに、*following* の文法化が進むに従って、「因果関係 (=because of)」の意味を持つようになると、時間的な前後関係の意味を表す *following* のときには *immediately* との間にみられた共起関係が失われていくという観察を行った。Olofsson(1990:33) によると、動詞 *follow* から前置詞 *following* へ文法化すると、共起することができる副詞(句)の数が減り、*soon, immediately, shortly* のみ共起し、*a little, some time, a moment, two weeks* など多くの副詞と共起しなくなるという。すなわち、文法化に伴い脱範疇化、意味の漂白化が生じるとともに、動詞語幹とは共起していた副詞との共起関係が失われていく、ということが出来る。本研究では、共起する副詞のうち頻度が高い *-ly* 形の1つに絞って調査を行ったため、調査対象とする副詞によっては異なる結果となる可能性がある。包括的な動詞派生前置詞の規定を目指す本節でのアプローチは、Olofsson(1990)の指摘にみられる動詞派生前置詞の文法化に伴う変化を観察することが難しいと考えられる。この観点での詳細な検討にあたっては、脱範疇化に関する個別事例の研究が必要となる。個別事例の観察は次章で行う。

4.5 4章のまとめ

4章では、コーパスを用いた定量的手法と英語母語話者の内省に基づく定性的手法に基づき、動詞派生前置詞の共時的規定を試みた。各節の内容は、以下のようにまとめられる。まず、4.1節では、文法化の進行とともに、動詞から前置詞へ段階的に文法化が進むものと想定し、動詞派生前置詞における文法化を、動詞的な特徴の喪失と、それに伴う前置詞的な特徴の獲得という観点から規定する上での理論的背景と立場を概観した。続く4.2節、4.3節、4.4節は前置詞性・動詞性に基づく共時的規定を試みた。本章の結果からわかるように、動詞性の減少、前置詞性の増加は符合しない。Hopper(1991)などに言及がみられる *considering* は、脱範疇化・漂白化が文法化に伴う希有な例といえる。一方、*facing, lacking* は文法化しても動詞性が保たれている (*lacking* は前置詞性がやや高く *facing* は、ほぼ動詞に近いといえる)。*owing to, allowing for* は、動詞性・前置詞性のいずれにおいても比較的高い部類と位置づけられ、前置詞随伴の事例も観察されており、動詞性が残存しつつも前置詞化が進みつつあるものと考えられる。文法化に伴い共起する副詞の数が減る *following* (Olofsson 1990) を鑑みると、副詞共起などに着目することにより脱範疇化の一端に迫ることが出来る。文法化は複雑な変化であり、包括的・複合的に変化を迫る必要があると考えられる。

第5章 通時的分析

4章で既にみてきたように、文法化の進行度、漂白化の程度性、重層化における分布は多様である。そこで、本章においては、個別事例に着目して通時的分析を行う。本章の構成は以下の通り。まず5.1節で、本章における分析の目的と概要を確認する。続く5.2節では、分析において統一的に用いる「脱範疇化のクライン」(Hopper and Traugott 2003: 107)を援用した品詞分類による枠組み、分析のアプローチを述べる。5.3節以降は具体的な事例分析であり、*excluding* (5.3節)、*preceding* (5.4節)、*barring* (5.5節)、*respecting* (5.6節)の4例の通時的变化をOEDのデータに基づき記述し、文法化の観点から考察していく。これらの節においては、まず先行研究の記述を整理し、分析対象とする事例の振る舞いを5.2節の分類に基づき分類する。その後、通時的变化の記述を行い、考察していく。5.7節は結語であり、本章の総括を行う。

5.1 目的と概要

本章の目的は、3.4節、3.5節で述べた課題を踏まえ、個別事例の通時的分析を進め、文法化の観点から考察を行うことである。児馬 (2001: 74-75) が述べるように、動詞派生前置詞の通時的な文法化プロセスは事例により異なり、包括的な特徴を記述する一方で個別事例に焦点を当てた分析を進めていくことも必要である。相補的に進めることによって、動詞派生前置詞の発達、文法化との関わりについての知見を得ることができる。このため、個別の文法化プロセスを解明することが本章の主な目的となる。

上述した目的を踏まえ、本章では、先行研究において記述が行われていない *excluding*, *preceding*, *barring*, *respecting* の通時的発達を検討していく。動詞派生前置詞にみられる文法化プロセスを比較検討するため、分析においては一貫した方針をとる。第一に、「脱範疇化のクライン (cline of categoriality)」(Hopper and Traugott 2003; cf. 児馬 2001: 74)に基づき、動詞から前置詞への連続的な変化を捉えていくアプローチをとる。第二に、言語データをOEDに統一し (cf. Mair 2004)、一貫した記述を行う³³。以上により、前置詞化への脱範疇化を分析し、文法化の観点から考察を進めていく。

³³ ただし、OEDにおける検出数が少ない *barring* についてはCOHAのデータも検討を行った。詳細は5.5節を参照。

5.2 分析の枠組み³⁴

5.3 節における議論の先駆けとして、5.2.1 節に示す安藤 (2005) の示す品詞の分類に基づき、その特質と振る舞いに従い、文法化の脱範疇化のクラインにおける-ing 分詞の位置づけを行う (5.2.2 節)。5.2.3 節では、本章における動詞派生前置詞の認定に関し、これまでの議論を確認するとともに、「等位接続テスト」に触れ、「懸垂分詞との連続性」について概観する。以上の検討は、本論における「動詞派生前置詞」の同定に関わる 5.3 節以降の議論の基盤となる。

5.2.1 -ing 形の振る舞い

本節では、本章で用いる「現在分詞」「懸垂分詞」という用語について整理する。

まず、「現在分詞」については、基本的に以下の安藤 (2005: 231) の「-ing 分詞」に準ずる (1)。

- (1) 現在分詞と過去分詞は、一般に用いられている用法ではあるが、両者は時に関係なく用いられるので、適切な名称とは言えない。また、現在分詞を *first participle*、過去分詞を *second participle* と呼ぶのは恣意的であり、前者を *active participle*、後者を *passive participle* と呼ぶのも適切ではない。*fallen leaves* (落葉) のような自動詞の過去分詞には受動性がないからである。最も適切な名称は、形式に基づく *ing 分詞*, *en 分詞* であろう。 (安藤 2005: 231)

また、-ing という形式をもつ「現在分詞」は、以下 (2) の動詞的性質、(3) の形容詞的性質をもつことに注意されたい。こちらも安藤 (2005: 231-232) に準ずる。

(2) 動詞的性質

進行形: John is *working* now.

(3) 形容詞的性質

a. 限定的用法: The *following* day was rainy.

b. 叙述的用法:

b-1. Our math teacher is so *boring*. [主語補語]

b-2. I found the book very *interesting*. [目的語補語] (cf. 安藤 2005: 231-232)

³⁴ 本節の内容は、林 (2013b) に基づく。

次に「懸垂分詞」について、3.1 節の議論を再掲する。

- (4) a. *Barring* accidents, they should be back today.
- b. There are five of them *counting / including* the driver.
- c. *Pertaining to* the contract negotiations, there is nothing to report.
- d. *Given* his age, a shorter prison sentence is appropriate.

(Huddleston and Pullum 2002: 610 ; 斜体部は筆者による)

- (5) a. *Turning* now to sales, there are very optimistic signs.
- b. *Bearing* in mind the competitive environment, this is a creditable result.
- c. *Having* said that, it must be admitted that the new plan also has advantages.

(Huddleston and Pullum 2002: 611; 斜体部は筆者による)

(4) が前置詞であり、(5) が懸垂分詞と解釈される。(5) の例は、解釈上の主語が話し手「解釈上の主語が話し手、あるいは話し手と聞き手の両方であると、文脈からうっすらと理解できる」

(Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 29) 点にある。一方、(4) は「解釈上の主語が存在しない」(Huddleston and Pullum 2002; 縄田・久米・松元・山村 (訳) 2018: 28)。

また、(5a) は、*now, to sales* との共起から前置詞でないと判断される。

5.2.2 脱範疇化のクラインに基づく品詞分類

2.3 節において、「内容語から機能語へ」、「major category (いわゆる語彙項目) から形容詞・副詞を経て minor category (いわゆる文法項目) へ」という文法化の「一方向性」に触れた (6)。

(6) cline of categoriality

major category (> intermediate category) > minor category

(Hopper and Traugott 2003: 107)

本節では、安藤 (2005) の品詞の定義に基づき、品詞ごとにみられる特徴を、(6) における major category, minor category に位置づけていくことを提案する。

英語における品詞とは、50万を超える語を、形式と文中の働き（機能）によって分類したものであり、伝統的に「名詞 (noun)・代名詞 (pronoun)・形容詞 (adjective)・動詞 (verb)・副詞 (adverb)・前置詞 (preposition)・接続詞 (conjunction)・間投詞 (interjection)」という8つの品詞として定義されている(安藤 2005:5)。本節では、以上の品詞を、脱範疇化のクライン (6) に基づき (7) のように分類を行うことを提案する³⁵。

- | | | |
|--------|--------------------|------------------------|
| (7) a. | 名詞・動詞 | [major category / 内容語] |
| b. | 形容詞・副詞 (現在分詞、過去分詞) | |
| c. | 代名詞・前置詞・接続詞・間投詞・冠詞 | [minor category / 機能語] |

本分類の利点は、Hopper and Traugott (2003) における major category, minor category という概念が、「内容語」「機能語」という区分と合致しているところにある。以下、具体的に各カテゴリーの特徴を述べる。

(7a) に属する名詞・動詞は、文法機能をになう (7c) と比較して、多種多様な「意味」を表す「語彙項目」としての性質を持っている（この性質は、文法化理論における major category の特徴に合致する）。major category は、意味的性質が強く、新しい語彙が増えやすいという性質を持つ。これに関しては、名詞・動詞には同義語・類義語が多数存在するのに対し、(7c) には同義の文法項目がごく少数しか存在しないことを考えると妥当であるといえよう。たとえば、「国」を表す英単語・類義語は、「名詞」のみであっても *country, land, territory, domain, realm, domination, state, nation, policy, shores* (cf. 新和英大辞典) と多岐にわたる。一方、「未来」を表す文法標識として助動詞 *will, be going to* が挙げられる。他の「未来」を含意するものとして *be about to, be to* などが挙げられるが、「国」をあらゆる名詞の類義語と比較して、多数の類義語が存在しないといえる。これらの言語事実も、(7a) という分類の妥当性を支持する重要な例である。

また、名詞・動詞の特徴として、(8a) のように、数・時制などによって形が変化するというものがある（例として、名詞の「単数形・複数形」、動詞の「三人称・単数・現在の-s」「過去時制におけ

³⁵ 安藤 (2005) の定義においては「冠詞」は「形容詞」に含まれるものとされているが、ここでは「形容詞」とは異なる「機能語」に属するものとして分類を行った。ただし、5.3 節における *excluding* の考察においては、冠詞 *a/the* が major category / minor category のいずれに分類されるのか、という議論が直接的な影響を与えることはない。定冠詞 *the* が限定詞であるという観点から、*excluding* の形容詞性を判定する上の根拠となっているという点では、「冠詞」は形容詞に属するものとはみなさず、異なる品詞カテゴリーに属するものと規定するのが妥当であろう。

る規則変化・不規則変化)、「現在進行相の-ing」が挙げられる)。一方、(7c) の文法項目は、(8b) に示されているように、これらの特徴を示さない。以下を参照されたい。

- (8) a. *Carefully considering / Having carefully considered* all the evidence, the panel delivered its verdict.
b. *Considering* (*having carefully considered) you are so short, your skill at basketball is unexpected.

(Hopper and Traugott 2003: 108; 斜体部は筆者による)

法助動詞 *may, can, will* のように、過去形とされる形 (*might, could, would*) をもつものも存在しているが、法助動詞の「過去形」という形は分類上の便宜によるものであり、「過去形」とされる *might, could, would* が過去時制において用いられる場合は「仮定法」である可能性が高く、現在形の *may, can, will* と同様の「可能」「義務」用法の意味において用いられていない可能性がある。たとえば、過去時制において「未来」を表すときには *would* ではなく *be going to* が好まれ (Berk 1999: 143)、「可能」の意味を表す場合は *be able to* が用いられ、*could* を用いるのは非文となる (Berk 1999: 144)。従って、これらの事例は、例外的なものとして扱うべきである。*be, do, have* については、江川 (1991: 193) のように「動詞であるが、助動詞としての役割も果たす」例外的存在として扱うべきであろう。助動詞としての *be, do, have* は、「語彙的な意味を持たない」という点では *minor category* に属するものといえる (安藤 2005: 161)。

(7b) の形容詞・副詞は、*major category* と *minor category* の中間的な特質を持っている。文法化という観点からは「分詞」というカテゴリーが該当する。分詞、すなわち「現在分詞 (*ing form*)」と「過去分詞 (*en form*)」は英和辞典 (cf. ジーニアス英和大辞典、リーダーズ英和辞典) においては「形容詞」と分類されているが、動詞が変化したものであり、動詞としての性質とともに、名詞を修飾するという点で形容詞としての性質も持っている (安藤 2005: 231)。「分詞」へと文法化した動詞は、主節に対する従属節をつくる「分詞構文」としての働きをもつ。すなわち、副詞としての性質ももつといえる (安藤 2005: 241)。このように、動詞の「文法化」という観点の導入は、形容詞・副詞という品詞カテゴリーに対して新たな視座を提供するとともに、「分詞」の形容詞的・副詞的性質を、動詞・文法項目の中間的存在として位置づけることを可能とし、これらの品詞は (6) のラインにおいては *major / minor category* の間の中間に位置する存在と位置づけられている³⁶。

³⁶ 現代英語においては、発音上の強勢 (アクセント) の置かれやすさも、(7a) と (7c) の中間的な位置づけにあることを示す1つの証

5.2.3 動詞派生前置詞の認定基準

それでは、動詞派生前置詞を規定するには、何が必要か。本節では、先行研究を基に動詞派生前置詞であることを規定する条件を検討していく。4章においては Fukaya (1997), Emonds (1976) の作例テストに基づき分析を行ってきた。通時的分析にあたり、改めてこれらの論点を確認しつつ、本節では「懸垂分詞との連続性」「等位接続テスト」を概観する。

本論においては、究極的には、動詞派生前置詞と形容詞・副詞の性質は連続的であり、区分は厳密には難しいという立場をとる。ここでは、動詞派生前置詞の規定において、分詞と連続的であるということを念頭に置きつつ、分詞の中でも「懸垂分詞性の高いもの」、すなわち「分詞節における意味上の主語が、主節における主語と異なるもの」を動詞派生前置詞化しつつあるもの、解釈上の主語が存在しないものを動詞派生前置詞と扱う。この規定は Fukaya (1997) の *including* に関する言及に基づく。

これまでに見てきたように、Fukaya (1997: 287) は、文法化の段階性 (*gradualness*) を示すためには、*-ing* にて終わる前置詞の特徴として、(i) 主語解釈、(ii) 前置詞随伴・残留、(iii) 前置詞的副詞、という観点から *during*, *according to*, *concerning*, *following*, *notwithstanding* を、他の動詞派生前置詞より前置詞的特性が強いものと位置づけている。また、Fukaya (1997) は、*including* の前置詞用法と分詞用法の連続性を指摘している。以下の例を参照されたい。

- (9) a. They had some good players, *including* Tommy Smith and Ian Callaghan, who had both played in the 1965 final.
- b. ...Nell responded, and she smiled warmly at Funny and Val, *including* them in this statement.

(Fukaya 1997: 295 斜体部分は筆者による)

(9a) の *including* は2つの言語要素間の、全体と部分の関係を促進する前置詞、(7b) は分詞節上の主語が主節の主語 Nell と一致する分詞構文であるとされる。主節と分詞節上の主語が一致しないものは、懸垂分詞と呼ばれている (早瀬 1992, 2007, 2009)。早瀬 (2007) においては、これらの懸垂分詞は規範文法において破格であるとされるが、実際にはかなりの多くの例が発見され、慣用化されイディオム化されているものであると述べられている。早瀬 (2009) は、懸垂分詞構文には「概念化者

拠となる可能性がある (cf. 林 2017b)。アクセントに関わる議論は本論の対象外である。

が自らの行為の結果、ある状態・事態を知覚・経験する」という独自の意味を見出し、懸垂分詞節の主節が「発話の場」の参与者である、言語上は明示化されない概念化者の知覚内容として捉えられ、話者の「内」の視点から事態把握が行われる、主体性の度合いが高い意味を備えた構文であるとしている。そして、懸垂分詞が容認されるパターンは、懸垂分詞節の非明示である主語が、動作主体性を発揮して行った事態の結果、ある知覚経験を得たことを表している場合であると述べている³⁷。

林 (2013a) および4章では、は、動詞派生前置詞を規定するパラメーターとして、丸田・平田 (2001) において述べられている、Emonds (1976) による以下の判別テストを用いて母語話者の内省に基づく調査を行った。林 (2013a: 19) は、以下の丸田・平田 (2001: 122) の「当該の句が典型的な PP (前置詞句) と等位接続できれば、その句も同じ PP の資格をもつとみなすことができる」という「等位接続テスト」を用いて、(10b) の *during* が前置詞 *before* と等位接続されていることから前置詞としての資格を持つと判定できることを指摘している。(10a) は丸田・平田 (2001) における例であるが、*down* と等位接続していることから、(10a) の *in* は PP であることがわかる、と述べられている。

- (10) a. He rushed *in* and *down* the stairs. (丸田・平田 2001: 123)
- b. Most of the Korean residents here were forcibly brought *before* and *during* World War II.
- (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 19)

この種の、確立した前置詞との等位接続に基づく Olofsson (1990: 26-27, 31) においても言及がある。Olofsson (1990: 31) は、*following*, *preceding* の等位接続を引用している。

- (11) For the best result, feed this level to cattle 3 to 5 days *preceding* shipment and / or 5 days *following* their arrival in your feed lot.. (Olofsson 1990: 31; 斜体部は筆者)

³⁷ 早瀬 (2009: 91) では、この懸垂分詞構文には、Langacker (1990) の指摘する「主体化 (subjectification)」と、Traugott (2003) の「間主観化 (intersubjectification)」が同時に関わる例である現象と述べられている。これらの概念の検討は本論においては扱わないが、動詞派生前置詞の文法化の検討が、両者の関係を検討していく上での手がかりとなるかもしれない。早瀬 (2016a) は、この種の「(間) 主観性」の議論に関し、*considering* の副詞的用法を、懸垂分詞構文と関連づけて論じている。

以上、本節でみた動詞派生前置詞であることを規定する条件は、以下のようにまとめられる。

- (i) 分詞節上の主語が存在しない。
- (ii) 前置詞としての資格を持つものと等位接続される。

本章では、2章、3章において確認した文法化理論、動詞派生前置詞の特徴とともに、(i)(ii)を踏まえ、動詞派生前置詞への文法化を規定していく³⁸。以下、5.3節以降では、先行研究において検討が行われていない事例を対象に、具体的な事例分析を行う。本章で扱うのは、*excluding*, *preceding*, *barring*, *respecting* である。これらの事例は、先行研究において通時的研究、文法化の観点からの考察が十分になされていない。川端 (2001) が述べるように、動詞派生前置詞が発達した時期は異なり、発達のメカニズムも事例により異なることが一貫した研究を難しくしている。そこで本研究では、OEDのデータに基づき、一貫した基準による分析を行うことで、文法化プロセスの比較検討を行うことを目指す。

5.3 事例分析 1: *excluding*³⁹

各節では、分析対象とする現象についての記述を概観し、分析対象の振る舞いを確認した上で、OEDのデータに基づき通時的発達を文法化の観点から考察していく。

5.3.1 辞書における *excluding* の記述

excluding の前置詞用法は、ラテン語の絶対構文に由来し、19世紀に発達したとされている (Görlach 1991: 109)。本節では、先行研究及び辞書における記述に基づき、*excluding* の振る舞いを整理する。*excluding* は、いかなる品詞に属するのか。辞書の用例を引用し、その分類における問題点を指摘する。結論を先に述べると、「前置詞」という分類が辞書において行われているが、なぜ前置詞と呼ぶことができるのか、その証拠となる具体的な根拠が提示されていないことを確認する。

³⁸ 本章における通時的分析では、生起文脈、品詞的な振る舞いに着目して分析を進める。そのため、Emonds (1976) を援用した分裂文、強意副詞 *right* との共起、に基づく作例は行わない。これは、現代英語の母語話者が、数世紀を遡った英語表現を対象に、当時の話者と同様の言語直感をもって判定が可能であるとは考えられない、という点が挙げられる。現代英語における用法であれば可能であろうが、過去の英語用法に関しては、この規定方法が妥当であるか否かは検討の余地がある。4.2節における *bating* の前置詞性についての議論も参照のこと。

³⁹ 本節の内容は、林 (2013b) に基づく。

- (12) a. (prep.) not including: Lunch costs £10 person, *excluding* drinks. (OALD)
- b. (前) ...を除いて (ジーニアス英和大辞典)
- c. (prep.) ...を除いて (opp. including) (リーダーズ英和辞典)

上記定義をみると、前置詞 *including* の対義語の「前置詞」と分類されている。そして、「形容詞」とされている分類は存在しない⁴⁰。ここで、Fukata (1997) の主語解釈上についての基準を参照すると、(12a) は、*excluding drinks* という事態認知を行っている概念主体（おそらく文の発話者）の存在が *excluding* の主語と考えられ、主節の主語である *lunch* と分詞上の主語が一致していないと考えられる。従って、(12a) は懸垂分詞的な例と位置づけることができる。ただし、なぜ *including/excluding* が「前置詞」と呼ばれるに至ったのか、これらは真の意味で「対義語」と呼べるのか、という疑問についての解は示されていない⁴¹。

5.3.2 *excluding* の通時的変化

excluding の分析にあたっては、脱範疇化に注目していく。児馬 (2001: 85) は、考察において「*saving* が前置詞化したことを示すためには単一の NP 補部を取っていることを示すだけでは不十分で、その補部の意味に着目して、動詞 *save* の本来の意味が希薄になっていること (bleaching) を示さねばならないということである」と述べている。ここで、児馬 (2001) の指摘は、本論における *excluding* の分析においても重要な意味を持つことに注意されたい。なぜなら、前置詞化したとされる *excluding* は動詞の意味の漂白化がみられず、動詞 *exclude* の意味が保持されていると考えられるからである。つまり、「動詞語幹の意味は失われていない」と考えられる。動詞派生前置詞 *saving, excluding* の共時的な振る舞いの違いについては6章で検討をすることとなるが、前者は漂白化が基準となるものの *excluding* は漂白化が進んでいないものと推測される。そのため、*excluding* に前置詞としての性質がみられるか否かを明らかにするためには、漂白化ではなく、動詞的特徴の喪失 (脱範疇化) とい

⁴⁰ *including* についても、ジーニアス英和大辞典、リーダーズ英和辞典、OALD などにおいて「前置詞」という分類がなされている。そして、*excluding* が対義語として挙げられている。

⁴¹ 辞書を参照すると、*including/excluding* は対義語とされているが、厳密には両者の用法には大きな違いがあると予想される。それは、両者の頻度の問題である。コーパスを用いた動詞派生前置詞の頻度に関する議論は Fukaya (1997) を参照。なお、この対比に関する議論は、本論の分析における対象外であるが、OED の件数に関しては、*excluding* が 129 例であるのに対し、*including* は 1863 例が検出されている。単純に、頻度の観点からは *including* が *excluding* を凌駕しており、この点からも動詞派生前置詞としての使用頻度も *including* の方が *excluding* と比較して圧倒的に多いものと考えられる (妥当性に関しては、今後の検討が必要)。 *excluding* の頻度が低い理由は、同義の前置詞として *but, except, without, excepting, saving* などが存在し、用法の棲み分けがなされているからであろう (cf. 重層化)。

う機能変化に着目していく必要がある。本論においては、*excluding* の用法を、5.2.2 節の議論を基に、脱範疇化のクラインに位置づけていく。ここでは、以下の (13) のように分類を行う。

- (13) a. **major category**: 名詞、動詞としての性質をもつもの
- b. **adjective / adverb**: 形容詞的・副詞的性質を持つもの
- c. **minor category**: 主語不一致による懸垂分詞的なもの、前置詞としての性質をもつもの

(13) の各用法は連続的であり、特に (13b) と (13c) のうち、懸垂分詞的な用法、動詞派生前置詞の用法は連続的であり、厳密には区別が難しい (cf. 秋元 2002: 190; 重層化)。

分析の手順として、OED CD-ROM において quotations 検索を行い、検出された *excluding* の用例 129 例のうち、重複して検出されたもの、名詞句のみで完結して文となっておらず判定不可能であるもの、文脈から意味の解釈が困難であるものは分類の対象外として除外した。「計 (合計)」が 3 項目の合計に満たないものは、分類の対象外としたものが含まれている。結果を表 5 に示す。

表 5 *excluding* の通時的変化

	major category	adjective / adverb	minor category	計
1550-1600	2	0	1	3
1600-1650	1	1	6	8
1650-1700	5	1	1	8
1700-1750	1	1	2	4
1750-1800	4	0	1	6
1800-1850	7	4	3	13
1850-1900	11	4	7	25
1900-1950	5	16	6	27
1950-2000	7	20	1	31

表 5 における分布から、**minor category** は増加傾向を示していないが、**adjective / adverb** は増加していることがわかる。以下、具体的な例文とともに、それぞれの項目について、その特徴とともに具

体的な記述を行う。

(i) major category

動名詞としての振る舞いをみせるものと、動詞としての振る舞いをみせるものがある。

まず、前者に関しては、冠詞を伴う、または前置詞 *for; of; as; by; after; in; to* などの目的語を伴う。このカテゴリーの初例は (14a) の 1581 年であり、前置詞の目的語となる用法の初例は (14b) の 1591 年に観察される。(14c) のように、副詞と共起する例がある。

(14) a. The life and the health of the body is nothing els, but an *excluding* of death and Sickenesse.

(1581 J. Bell Haddon's Answ. Osor. 505 b)

b. This causeth the Emperours to ·· be very warie for *excluding* of all peregrinitie that might alter their fashions.

(1591 G. Fletcher Russe Commw. (Hakl. Soc.) 151)

c. A system of this kind, a limited group of words forming some kind of range or scale of *mutually excluding* terms is often called a lexical set.

(1967 R. A. Waldron Sense & Sense Devel. v. 102)

歴史的な分布をみると、16 世紀後半から現代に至るまで存在している用法である。

次に、動詞的用法に関して、この用法は、*be* 動詞とともにあらわれ、進行相を表す。(13c) に関しても、関係代名詞の省略 (*which / that + be* 動詞) とみれば厳密には進行相といえるかもしれないが、本例は文の主語・*be* 動詞・現在分詞 (進行相) が明示されているパターンを指す。*be* 動詞が明示されているという点で (13c) とは異なることに注意されたい。以下の 1 例のみが該当する。

(15) When I excluded Wilfred Owen ·· I did not know I was *excluding* a revered sandwich-board Man of the revolution.

(1936 W. B. Yeats Lett. on Poetry (1940) 124)

(ii) adjectives / adverbs

現在分詞のうち、「名詞を修飾する」、「比較級をもつ」という形容詞的用法をもつものがある。この用法の初出は 1641 年。形容詞用法は、前置・後置修飾 (限定・叙述用法) の 2 通りをもつ。限定用法としては、(16a) では限定詞と名詞 *Party* の間に現れているという形容詞の限定用法 (前置修飾)

などがある⁴²。また、(16b) においては、比較級であることに着目されたい⁴³。限定用法（前置修飾）の最終例は1925年である。その後は用例がみられない。

(16) a. If the Head of the including Faction, offers the Head of the *Excluding* Party, to assist him· in the Election of one of the Excludents, let him always be suspicious.

(1670 G. H. Hist. Cardinals iii. iii. 329)

b. E A sect of· Methodists, more dismal and *more excluding*. (1836. Howard R. Reefer vi)

形容詞的用法には、さらに、名詞に後置修飾され、主語が明示されている叙述用法的なものもある (cf. 安藤 2005: 232)。具体例として、以下が挙げられる。

(17) a. He must be prepared with a cautioner· at giving in his defences, unless he instantly verify a defence *excluding* the action. (1838 W. Bell Dict. Law Scot. 1028)

b. How far would the majority go in applying the general rule *excluding* what are sometimes called self-serving statements to conduct? (1958 Listener 18 Sept. 412/2)

後置修飾的なものの中には、*-ing* 分詞の意味上の主語が明示されていないもの (*-ing* 分詞の直前に意味上の主語となる名詞が明示されていないもの) があり、主語を推測する必要がある。(18) はその例である。ここでは、*excluding my selfe the true heyre* の意味上の主語が明示されていない。

(18) After his [Alexander's] death Vrbanus dealt very inurbanely: for hee drewe Mamphred in, *excluding* my selfe the true heyre. (1610 Bp. Carleton Jurisd. 221)

(iii) minor category

主節の主語と意味上の主語が一致しない懸垂分詞的なもの、あるいは動詞派生前置詞用法の *including* との等位接続から、動詞派生前置詞と予測されるものである (cf. 丸田・平田 2001: 122; 5.2.3

⁴² 冠詞 *a, the* は、*a red rose* のように形容詞よりも前の位置に生じる (cf. 安藤 2005: 5; Berk 1999: 58)。

⁴³ 形容詞・副詞は比較変化をもつ (cf. 安藤 2005: 473, 558)。5.2.2 節の議論も参照。

節参照)。(19) など、主節の主語と一致しない懸垂分詞的な例が 10 例みられた。

(19) [A Metal] may comprehend both those that are strictly called Metals (not *excluding* common argente vive to be one) and those that are also called semi-metals, as Antimony and the like.

(1671 J. Webster Metallogr. 89)

その後 20 世紀に至るまで存在しており、現在英語においてもみられる例として存続している。

including との等位接続がみられる例として以下 2 例がみられた。初例は (20a) の 1849 年である。

(20) a. ‘Lay-days’ are either running-days, or working-days, as may be agreed upon; the former *including* Sundays and holidays, the latter *excluding* them. (1849 Freese Comm. Class-bk. 41)

b. The term ‘plastic materials’ is here employed in a restricted sense, *including* only such materials as celluloid and its numerous substitutes, which can easily be shaped by cutting and grinding, as well as by molding, and *excluding* artificial textile fibers and India rubber and its imitations.

(1912 Sci. Amer. Suppl. 20 Apr. 246/1)

歴史的な位置づけとしては、*including* の前置詞用法と等位接続される前置詞的用法として、*excluding* と対称性をもつ形にて 19 世紀中旬から 20 世紀前後にみられている。

5.3.3 考察

ここでは、5.3.2 節における記述に基づき、文法化現象との関係を考察する。事例の観察結果から、*excluding* は、以下の点で文法化を指摘することは難しいといえる。

(21) a. 意味の漂白化が起きていない。

b. 初期から前置詞的用法と連続性をもつ用法が既にみられる。

c. *including* との等位接続関係は 2 例みられるが、証拠としては不十分。

(21a) については、*concerning*, *regarding*, *relating to*, *touching* (cf. 秋元 2002: 190)、*saving* (cf. 児馬

2001: 85) などの例のように、動詞の意味が漂白化していくという特徴がみられない。従って、*excluding* が動詞から前置詞へと文法化していくことを示す上で、動詞の意味の喪失を文法化の証拠として指摘することができない。(21b) については、動詞派生前置詞的用法と連続性をもつ (iii) の用法が既に 16 世紀からみられているという点からも、この用法は、それより以前の時代から存在していた可能性が高く、その起源を辿るためにはさらなる言語史料を検討していく必要があり、本論の調査範囲からは決定的な証拠を提示することができない。(21c) に関して、*including* との等位接続関係を示す (20) の各例は、*including/excluding* が同等の性質を持っているといえる 1 つの根拠となり得るといえるだろう。しかし、*including* との関係から *excluding* を動詞派生前置詞と断定するには次の点に留意せねばならない。第一に、*including* が前置詞であることを証明する必要があること。第二に、*including* を OED または BNC などのコーパスを用いて検索すると、*excluding* とは頻度が大きく異なり（前述の通り、*including* の方が、頻度が圧倒的に高い）、両者の間には非対称性が存在すると予想されること。以上 2 点に関してはさらに精査が必要である。

以上を踏まえ、*excluding* は歴史的変化における顕著な点は以下のようにまとめられる。

- (22) a. 19 世紀後半以降、いわゆる分詞構文の用法としては典型的には破格とされる、主語不一致の懸垂分詞的な用法がみられるようになっていく傾向がある。同時に、名詞に後置修飾され、主語が明示されている叙述用法的なものが、19 世紀以降、特に 20 世紀にかけてみられるようになる。
- b. 数は少ないが、17 世紀から 20 世紀にかけて、比較変化がある、限定詞と名詞の間の位置に出現するという形容詞的性質を示す例がみられる。
- c. 副詞との共起がみられる。動詞としての性質が強くみられる動名詞用法とともに文法化が進み前置詞的性質の強い (iii) の懸垂分詞的な用法においても副詞との共起がみられる。
- d. 後述する (25) のように、20 世紀後半、文頭としての地位を得るようになったという点では、主語支配から自由になり、前置詞としての性質を持つようになったとみることができる。

(22a) に関して、*excluding* は、OED でみると、主節と従属節の主語不一致の懸垂分詞的な用法と考えられる例が、特に 19 世紀後半から 20 世紀にかけて増加していく傾向がみられる。ただし、意味的

には *but, without, for* と同じく「除外」であるため、意味が漂白されておらず、段階的に *minor category* へと範疇が変わっていると考えられる。一方、後置修飾的な用法の増加もみられるため、結果として、19 世紀以降、*adjective / adverb* に属する用例数が増えていると考えられる。(22b) に関しては、(iii) の例に加え、*sun-excluding, dust-excluding* のように、複合語の形をとるものなど合計 5 例がみられた⁴⁴。(22c) に関しては、動名詞の共起例である (23) や、文法化が進み前置詞としての性質に近づいた懸垂分詞的な事例の共起例である (24) が証拠となる。特に、動名詞との共起例である (23) は 19・20 世紀にみられるが、(24) がみられるのは 20 世紀に入ってからであることから、20 世紀に入ってから文法化が進み、前置詞的な性質が強くなっている可能性があるともみることができよう。

- (23) a. The Continental System, based on the project of *totally excluding* British goods and manufactures from all the European monarchies. (1839-57 Alison Hist. Europe VII. xlii. §43. 125)
- b. A system of this kind, a limited group of words forming some kind of range or scale of *mutually excluding* terms is often called a lexical set. (1967 R. A. Waldron Sense & Sense Devel. v. 102)
- (24) a. We must enter into the mind and attitudes of past periods and accept their standards *deliberately excluding* the intrusions of our own preconceptions. (1949 Wellek & Warren Theory of Lit. iv. 32)
- b. There is no principle of evidence *especially excluding* ‘self-serving’ statements by an accused or by any one else. (1904 J. H. Wigmore Treat. Syst. Evidence III. lvii. 2273)

最後に、(22d) に関して、前置詞的な用法が拡大していったかもしれないと考えることができる用例も存在する。それは、*excluding* が文頭の位置にあらわれる (25) である。

- (25) *Excluding* films obtained from persons homozygous or heterozygous for haemoglobin C, a high percentage of target cells in normal blood films has been observed in Ghana, Nigeria, and from East Africa. (1969 Edington & Gilles Path. in Tropics x. 353)

秋元 (2002: 190) は、*considering, concerning* は、前置詞の地位を得ると文頭にくることができ、取り出しなどのテキスト的機能を発達させたということを述べている。内田 (2003) においても、

⁴⁴ OED においては、これらは “That excludes or shuts out; exclusive.” という意味の分詞・形容詞と定義されている。

including がそこまで述べてきた内容を受けて、その具体例を導入することによって話題を展開するテキスト構成辞としての接続詞的機能を持っているということを指摘しているが、*excluding* に関しても、同様の性質がみられる可能性がある。文頭での用法がみられない *relating to* のように、(22a) ですでに述べたように後置修飾的な用法が増えていることから、*including*, *considering*, *concerning* と比較すればテキスト導入の機能としての役割が強いとはいえないが、全くそのような機能を持っていないと断言することはできないだろう。

以上より、*excluding* は、19 世紀後半以降、いわゆる分詞構文の用法としては典型的には破格とされる、主語不一致の懸垂分詞的な用法がみられるようになっていくが、より顕著にみられる傾向として、後置修飾的な用法が 19 世紀後半から増加していくという点では、文法化の「一方向性」の仮説の反例となり得るかもしれない。

5.4 事例分析 2: *preceding*⁴⁵

本節では、基盤となる動詞語幹が対称的意味を有する *following* と *preceding* を取り上げ、両者の文法化にみられる非対称性を提示する。具体的には、先行研究において懸垂分詞的用法を経て前置詞的用法へと発達したといわれている *following* に対して、*preceding* では副詞的用法までの文法化はみられるものの、前置詞的・懸垂分詞的用法への拡張には至っていないことを示す。

5.4.1 *following* vs. *preceding*

これまでみてきたように、前置詞化した *following* は、第一に「脱範疇化」(cf. 主語解釈の原則; Fukaya 1997)、第二に「意味の漂白化」という点において文法化が指摘されている。

第一に、Olofsson (1990, 2011) の指摘をみよう。Olofsson は、同一コーパス内、異なるコーパスにおいて *following* に誤ったタグ付けがなされていることを指摘し、前置詞 *after* へのパラフレーズが可能な *following* を、(26a) (26b) の基準により、一貫した記述を試みている。

- (26) a. my father, who was convalescing *following* a severe leg wound.
- b. On the morning *following* George Lawrence's visit to Inspector Tower a new sensation blazed on the headlines. (Olofsson 2011: 5)

⁴⁵ 本節は、林 (2015a) に基づくものである。

Olofsson は、(26a) のように、前置詞 *after* に置換でき、*my father* が *follow(ing)* の意味上の主語となっていないもの (=Not My father followed a leg wound; Olofsson 2011: 7) を前置詞と認め、(26b) のように *the morning* が *follow(ing)* の意味上の主語となっているもの (=On the morning which followed the visit; Olofsson 2011: 7) を前置詞とみなさない。そして、(26a) (26b) を識別するパラフレーズにより分析を行い、以下を明らかにしている: (i) 既に知られているより早く *following* の前置詞的用法は確立していること、(ii) *following* の頻度は 1931 年から 1961 年の期間には大きな変化がみられないものの、その後 1961 年から 2006 年の間には 3 倍に増加したこと、(iii) コーパスにおいて「正しく」タグ付けされた *following* はごく少数であること (Olofsson 2011: 18-19)。また、前置詞 *after* とは異なり、前置詞的副詞とならないこと (27a) を述べている。

- (27) a. *The others arrived shortly *following*. (Olofsson 2011: 13)
b. The others arrived shortly *after*.

さらに、共起する副詞は *immediately* のみであることを指摘している (Olofsson 1990)。なお、Olofsson 自身は、文法化の研究ではないと述べているものの、Olofsson (1990) のアプローチは、優れたコーパス言語学・文法化研究の融合として Mair (2004) により高く評価されている。

第二に「意味の漂白化」について、Radden and Dirven (2007) は、文法化にみられる意味の漂白化の一例として (28) を挙げている。

- (28) Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 36)

(28) の *following* は、時間的な前後関係の意味よりさらに文法化し、因果関係 (=because of) の意味を持つようになったことが指摘されている。4.3 節において言及を行ったように、この意味で使用される *following* は小西 (1976: 163) においても言及が為されている。小西 (1976: 163) によると、前置詞的に *following* が使用されるのは「比較的新しい用法」であり、初例が 1947 年、OED で認められているのは 1972 年であり、ジャーナリズムにおいて多くみられる用法であるという。小西 (1976) の記述にあるように、Curme (1979: 158-160), Visser (1972: 1217-1222) においても、分詞由来の *-ing* 形前置詞のリストに *concerning*, *considering* は記述されているものの、*following* は見当たらない。

ここで前置詞化しつつある *following* の特徴をみよう。

(29) *Following* Bruce Marshall's original novel with considerable fidelity, the film tells... (Olofsson 1990: 29)

Olofsson (1990: 22) によると、前置詞化しつつある *following* は、前置詞 *after* と比べて以下の制約がある: (i) *following* が時間的意味、因果関係・時間的の中間的な意味のいずれであっても、*seek after* などのように *after* が前置詞を伴う句動詞 (*prepositional verbs*) においてもつような意味を持つことができない (**seek following*)、(ii) 時間的意味を表す *after* は時間に関わるあらゆる種類の名詞を補部にとるが、*following* は「時点 (*point of time*)」を示す名詞のみを補部にとる⁴⁶、(iii) *after* は多くの副詞により修飾されるが、前置詞的 *following* は *immediately* などの限られた副詞句とのみ共起する⁴⁷。

なお、Kortman and König (1992: 679) は、懸垂分詞が動詞派生前置詞の重要な起源となりうると述べているが、一例として下記の *following* が挙げられている。

- (30) a. *Following* the instructions of his boss, John examined each part carefully.
b. *Following* a sharp decline last year, pries rose again this year.

(Kortman and König 1992: 679; 斜体部分は筆者による)

(30b) の *following* は、(30a) の *following* と比べ、前置詞として分類されうる、より妥当な候補とされる。*following* の解釈上の主語は明示されていないものの、(30a) は *John* が主語であり分詞構文的なものと考えられる。

following は、前置詞 *before* と等位接続する例が観察されることから、*before* と同等の前置詞という地位を得て使用されることがあると考えられる (31)。

(31) Project phases benefited from input from Kashaya monitors *before and following* each phase. (COCA)

⁴⁶ 具体的には、出来事を示す動詞派生名詞 (*deverbal noun*) の *collision, reaction, drowning, killing, experiment, treatment, victory* などのみの名詞を補部にとると述べられている (Olofsson 1990: 22)。

⁴⁷ たとえば、*after* は、*a little, some time, a moment, two weeks* などの量 (*measurement*) を表す語など、様々な語句による修飾を受けることができる (Olofsson 1990: 22)。

次に、*preceding* の振る舞いをみよう。*preceding* は、Kortman and König (1992: 684) において、動詞派生前置詞として言及がなされている⁴⁸。ここでは問題の所在を明らかにするため、共時コーパスを用いて *following* と比較しつつ、*preceding* の振る舞いを観察していこう。まず、BNC においては、(32) に示したように、*during* との等位接続が 1 例のみ観察された。等位接続テスト (丸田・平田 2001) を用いるならば、*preceding* は前置詞 *during* と同等の地位を得ていると考えることができる。

(32) More recently, David McPherson has documented the lively debate surrounding one particular facet of Renaissance numerology, the concept of the Ages of Man, a widely recognized and much-discussed notion *during and preceding* the Elizabethan period. (BNC)

Olofsson (1990) においては、*preceding* と *following* の等位接続例が報告されている (33)。

(33) For the best result, feed this level to cattle 3 to 5 days *preceding* shipment and/or 3 to 5 days *following* their arrival in your feed lot. (Olofsson 1990: 33; 斜体部分は筆者による)

(31) で示したように *following* と *before* は等位接続されるが、共時コーパスにおいては、*preceding* と *and after* という等位接続の例は検出されなかった。従って、*preceding* は *following* と比較して文法化が進んでおらず前置詞としての用法が定着していないと予測される⁴⁹。

5.4.2 *preceding* の通時的変化

本節では、先行研究において検討されていない *preceding* の通時的変化を観察する。具体的な手順として、OED より *preceding* の用例 584 例を収集し、そのうち例文が重複して検出されたもの、名詞句のみで完結し文となっていないもの (一語文など)、文脈から意味の解釈が困難であるものなどを除いた 513 例を分析した。分析では 5.3 節の分類を援用し、(34) を適用した。なお、本節では (34e)

⁴⁸ なお、*preceding* の定義において、「前置詞」と記載されている辞書は、管見の限り存在しない。4 章などにおいて本研究が調査対象としているのは、Kortman and König (1992: 684) の言及があるためである。

⁴⁹ Olofsson (1990) は、英語母語話者である著者自身の内省に基づき、「典型的な前置詞に置換することができる」という基準を用いて分析を行っている (*following* を *after* に置き換えることができれば、その *following* は前置詞と判定される)。本研究においては、分析者自身が英語母語話者でないことから、言語直感を持たない立場から観察可能な範囲において記述の基盤をコーパス (OED も広義のコーパスとみなすことができる; cf. Mair 2004) に置き、統語的基準および判定テストを用いて考察を進めていく。

の事例の検討をさらに行うため、5.3 節の分類と比べて項目を細分化している。

- (34) a. major category: 名詞、動詞的振る舞いを示すもののもの
- b. intermediate category (adjective1): 形容詞的性質のうち、比較変化などの特徴をもつもの
- c. intermediate category (adjective2): 直前の名詞（句）が-ing 分詞の主語となる後置修飾のもの
- d. intermediate category (adverb): 分詞構文的（主語非明示）であり主節の主語と一致する可能性があるもの
- e. intermediate > minor category (dangling): 懸垂分詞的であり、主節と主語が一致しないもの
- f. minor category (preposition): 前置詞と判定されるもの

(34) の分類に基づき、OED より収集したデータを分析した結果が表 6 である⁵⁰。表 6 では、(34a)-(34e) のそれぞれに分類される事例の数を年代ごとに示している。(34f) に関しては例が存在しないが、これは本調査において前置詞と判定される事例が存在しなかったことによる。

表 6 preceding の通時的変化

	major category	intermediate > minor category				計
	(34a)	(34b)	(34c)	(34d)	(34e)?	
1401-1600		2				2
1601-1700	1	12	3			16
1701-1800	6	37	6			49
1801-1900	25	185	38	4	3	255
1901-2000	5	133	45	6	2	191
計	37	369	92	10	5	513

以下、(34a)-(34d) について、それぞれの分類に該当する例の特徴を述べる。

⁵⁰ 表 6 においては、「前置詞」を表すカテゴリー (34f) が存在しないが、これは、本調査において前置詞と判定される事例が存在しなかったことを示している。また、全検出例のうち、例文が重複して検出されたもの、名詞句のみなどの形で完結しており文となっておらず判定不可能であるもの（一語文など）、文脈から意味の解釈が困難であるものは分析対象外として除外している。「計（合計数）」のうち (34a)-(34e) の合計に満たないものは、一部の用例が分析の対象外となっており除外されていると考えられる。

(i) major category (noun / verb)

名詞的または動詞的に用いられている用例のうち、名詞的用法は、(35a) の動名詞的なもの⁵¹、(35b) のように照応的に用いられているものなどを指す⁵²。(35a) のように、動詞性が高い動名詞的な事例の存在を鑑みて、両者をまとめて (34a) と分類している。

(35) a. According to the law of Precedence, one idea acquires the power of suggesting others by immediately preceding them. (1828 J. Ballantyne Exam. Hum. Mind iv. 90)

b. The *Spotted Redshank · · in size · · is equal to the preceding [i.e. Green Shank]. (1768 Pennant Brit. Zool. II. 357)

(ii) intermediate category (adjective)

17 世紀から現代に至るまで、他の用法と比較して最も広範にみられる。*the*+NP の *the* と NP の間に *preceding* が含まれる場合 (cf. Berk 1999)、この用法と判定される。

(36) a. The number of these pretenceless instances of dereliction of duty is more than half as great again as in either of the two preceding years. (1818 Ch. Eng. 352)

b. Lenition, in Celtic languages, the phonetic change which consonants undergo when occurring between vowels, as well as the change of the initial consonant of a word under the influence of the final sound of the immediately preceding word. (1954 Pei & Gaynor Dict. Ling. 121)

(36a) など、時間的な前後関係をあらわす例が多い⁵³。また、(35b) にみられる *immediately* との共起⁵⁴、音声学の例文における生起は、その他の用法においても広く観察される。

⁵¹ 冠詞を伴っている、または前置詞 *by, of, for* などの目的語となっているという基準にて判定する。ただし、(35a) は動詞性が高いと考えられる。

⁵² 照応的な場合、OED において *the preceding* が指し示しているものが明示されていることが多い。

⁵³ *the preceding* NP の NP にみられるものには以下がある: *generations, year, weeks, period, century, 3 hours, days, summer, chapter, vowel* など。

⁵⁴ 副詞との共起は *immediately* 以外にもみられるが、他の主に共起する副詞として *just, manifestly* などがある。全用例のうち、副詞の共起例として圧倒的な数を示すものが *immediately* である。

(iii) intermediate category (adjective／主語一致)

(34c) は、*preceding* の前後に名詞（句）がみられ、直前の名詞（句）が *preceding* の意味上の主語と解釈されるものである。この例は 17 世紀より徐々にみられるようになった。用例数は、(ii) より少なく 1/3 程度での数であるものの、現在に至るまで存在し続けている。具体例を (37) に挙げる。

(37) a. There is a kind of Abecedarie ignorance preceding science: another doctorall following science.

(1603 Florio Montaigne i. lv. 170)

b. This first off-coat warmth just preceding the advent of the *swamp warblers (parti-colored, red-start, etc.) brings them out. (1859 Thoreau Jrnl. 30 Apr. in Writings (1906) XVIII. 167)

c. One speculation is that deep permafrost is involved, associated perhaps with the arrival near the surface of juvenile water preceding and accompanying the rise of molten rock near the surface of the planet during the volcanic episode apparent to the west. (1973 Sci. Amer. Jan. 56/2)

(37b) は副詞 *just* との共起例。(37c) では、*and* により *accompanying* と等位接続されている。

(iv) intermediate category (adverb／中間)

preceding が主節に対する従属節を導いているが、主語一致・不一致という点において境界的であるものを含むものが該当する。

(38) a. The Emperor, taking a wand in his hand, officiated as verger, *preceding* the pontiff to the altar.

(1818 Byron Ch. Har. iv. Notes 117)

b. Tom came back, *preceding* four gin rickys. (1925 F. Scott Fitzgerald Great Gatsby vii. 140)

c. Advice note, a supplier's listing of items that is sent to a customer prior to an invoice, either accompanying the merchandise or preceding it, identifying the nature and quantity of the goods but not giving prices. (1983 J. M. Rosenberg Dict. Business & Managem. (ed. 2) 18/1)

(38a) (38b) は主語一致の可能性が高い。(38c) はいわゆる「付帯状況」であり、*or* によって *accompanying* と等位接続されている。この *preceding* は前置詞的でなく動詞的なものと考えられる。

(v) intermediate > minor category (dangling)

ここでは、表 6 の結果から、(34e) に分類される以下の事例に着目し、*preceding* は前置詞化しているということができるか検討を行う。なお、Olofsson (1990) の指摘にもあるように、前置詞的な *following* が *immediately* とともに共起できることから、*preceding* についても *immediately* との共起事例は前置詞化している可能性があるものとして検討を行う。

- (39) a. *Preceding* administrations reckoned this · · in the number of their velleities: what they had been thinking of doing, your Lordship has done. (1808 Bentham Sc. Reform 2)
- b. Immediately preceding death there is an intense congestion of the viscera which frequently results in an outpour of serum. This condition, when involving the peritoneal cavity, is termed *pre-agonal ascites. (1900 Buck's Handbk. Med. Sci. (rev. ed.) I. 563/1)
- c. Immediately preceding the stressed syllable of a primary contour there oftentimes will be one or more syllables which are pronounced in the same burst of speed with that primary contour but which themselves are un-stressed. (1945 K. L. Pike Intonation Amer. Eng. iii. 29)

(39a)-(39c) は、いずれの例も *preceding* が文頭に出現しており、*preceding* より文頭に近い位置に従属節における意味上の主語となりうる語が存在しない、懸垂分詞が生起しうる位置となる可能性もあるだろう。しかし、ここで今一度、(39a)-(39c) の例を順番にみていこう。すると、以下の解釈を行うことができる。(39a) の *preceding* は、*administrations* を形容詞的に修飾する用法、(39b)(39c) の *preceding* に関しては、文全体をみてみると、これはいわゆる「存在文 (existential sentence)」(cf. Berk 1999, 安藤 2005) と呼ばれる文と考えられる。

以上を鑑みて、データに基づき文法化との関連を検討すると、*preceding* の用法は (34b) の形容詞的用法が大多数を占めたまま、現在に至っている。そして、(34c) (34d) のような、*preceding* が NP を後置修飾する事例は 19 世紀以降僅かに増加していったと考えられる。(34e) の用法は 19 世紀から徐々にみられるようになったが、その頻度は低いまま現在に至っている。結論として、*preceding* は懸垂分詞的用法をとらない事例とみることができよう。(30b) の懸垂分詞的用法を経て前置詞化したとされる *following* に対し、*preceding* は前置詞化しているとはいいがたく、ここに文法化の経路における発達の非対称性が観察される。

5.4.3 まとめ

本節では、前置詞化が指摘されている *following* に対し、*preceding* は前置詞化しているとはいいたくないことから、文法化の経路における発達の非対称性が観察されると結論づけた。これは、前置詞的な *including* と同義の動詞派生前置詞が存在しない一方で、「除外」を表す動詞派生前置詞は *barring*, *excluding*, *saving*, *excepting* など複数の重層化がみられるように、文法化後における変化が多様であることを示している。さらに、(40) をみると、*preceding* が懸垂分詞的用法へと変化しつつあることがわかる。

- (40) a. *Preceding* me, Andre stepped out of the plane -- but not fully. (COCA)
- b. *Preceding* the interview, a lush, blue photo of a pouting Burns was captioned with a brief quotation: 'If I hear Morrissey's down or depressed, I'll send him a bunch of flowers. He's anybody's for a lupin...'
- (BNC)

(40b) は、(34) の基準においては動詞派生前置詞と分析される。*preceding the interview* の意味上の主語は存在せず、少なくとも *a lush, blue photo of a pouting Burns* ではなく、その点において懸垂分詞的な例と分析される。この観察結果を鑑みると、現在、前置詞的用法として *preceding* は確立されていないものの、文法化の過渡期段階としての懸垂分詞的用法が、共時的に観察される事例に関しては徐々に増えつつある状況である可能性がある。今後、*preceding* の前置詞的用法が定着する可能性は十分にありえると思われるが、さらなる変化については数十年間にわたる長期的展望をもった調査が必要であろう。

5.5 事例分析 3: *barring*⁵⁵

次に、*barring* の通時的変化を検討する。「除外」の意味を表す *barring* の通時的発達に関しては、先行研究において詳細な検討が行われているとはいいたい。ここでは、*barring* の変化は Mair (2004) が述べる 2 種類の文法化のうち「動的なタイプ」の文法化に該当すると結論づける。そのため、*barring* に関するものとともに関連する先行研究の議論を概観した上で、通時的分析を行う。なお、通時的分析は OED に加え COHA の検討も行う。さらに、*barring* には特定の世紀のみにおいて

⁵⁵ 本節の内容は、林 (2016a) に基づく。

接続詞としての用法が観察されるため、それについても節を設けて議論を行う。

5.5.1 背景

barring に関して、動詞派生前置詞は、主節・分詞節の主語一致がみられない懸垂分詞と連続的なものとされる (cf. 秋元 2002: 190; Kortmann and König 1992: 679)。その一例として安藤 (2005) は、文法化を起こして完全に前置詞に変わっている *barring* (*except for* と同義と安藤は述べる) を挙げている。

(41) *Barring accidents, we should arrive on time.* (OALD; 安藤 2005: 247)

前置詞 (接続詞) 化した *save/saving* の文法化に関して、その歴史的な発達を分析した児馬 (2001: 90-91) によると、これらはそれぞれ形容詞 *safe*, 動詞 *save* という異なる語彙範疇に由来した、発生的 (歴史的) には独立したものであるが、おそらく初期近代英語期の頃、両者の間に「共時的には動詞とその現在分詞という関係づけ (*save/saving* とも動詞由来の前置詞とみる) がおこなわれるようになった」とされる。児馬 (2001) は、*bar/barring* の発生は、両者の関係の類推として出現したものと考えている。

また、*barring* に関しては、先行研究において動詞派生前置詞の一つとして挙げられている (Kortmann and König 1992)。4.4 節で行ったイギリス英語話者の内省による調査を行い、文法化すると「動詞の意味が漂白化し、副詞との共起関係が失われる」事例という結果であった。4.4 節で検証された例文が (42b) であり、文法化した *barring* は副詞 *immediately* との共起関係が消えていくとされる⁵⁶。

- (42) a. *They immediately barred him from the casino.*
b. * *Immediately barring accidents, we should arrive on time.*

barring に関しては、先行研究において言及が行われているものの、管見の限り、その通時的発達

⁵⁶ (42a) は筆者による作例。執筆後の調査により、4.4 節の調査を行ったときに用いた副詞 *immediately* と動詞 *bar* が共起することを示す例文 *They immediately bar him from casino.* が容認されないと指摘を受けたため。イギリス英語話者により適切とされた例文が (42a) である。

に関しては十分に検討されていない。そこで次節では、OED と COHA のデータにより、その通時的発達を考察していくこととする。複数の言語データにおいて同一の事例を分析することにより、その分布の差異を浮き彫りにすることができると思われるためである。

5.5.2 *barring* の通時的変化

5.5.2.1 データと方法論

先行研究において OED のデータにより文法化プロセスの通時的考察が行われている動詞派生前置詞に、*concerning*, *considering*, *regarding*, *relating to*, *touching* (秋元 2002)、*seeing* (Mair 2004)、*notwithstanding* (Risannen 2002) がある。OED を歴史コーパスとみなすことについて、Mair (2004: 124) は、分布の偏りをはじめ様々な問題点があると指摘しつつ、それらを差し引いても、OED は膨大かつ豊かな言語資料として他を圧倒しているとも述べている。本研究では、この立場を採用し、OED を言語データとすることとする。しかし、後述するように、OED により得られた用例数は僅か 52 例であり、この結果のみから *barring* の通時的変化を一般化するのは難しいと考えられる。従って、本研究では、歴史コーパスである COHA のデータも参照することにより、複合的な視座から *barring* の通時的変化を捉えることを目指す。

5.5.2.2 事例分析: OED のデータから

OED において、*barring* (前置詞) の項目をみると、初例は以下とされる⁵⁷。

(43) *yardes, barin one pese, of lynnyn cloth.*

(1481–90 Howard Househ. Bks. 283, vjxx.)

本研究では、まず、OED より *barring* の用例 59 例を収集し、解釈不可能、文構造が不明瞭な事例などを除いた 52 例を分析した。分類においては、5.3 節の分類を援用した (44) に基づき、各例がどのような品詞としての振る舞いを示すかをみた。

⁵⁷ ME などの時代に関しては、*-ende*, *-yng* をはじめ *-ing* 形の異形態を含めて広く調査を行う必要がある。さらに古い時代にも *barring* が観察される可能性があり、これらを考慮に入れれば網羅的な調査とはならない。本節では *barring* という形態のみを抽出して調査を行っており、上記の異形態は対象としていない。この点については今後の課題としたい。

- (44) a. major category: 名詞的・動詞的性質
- b. intermediate category (adjective): 現在分詞の形容詞的用法 (限定用法)・前置修飾
- c. intermediate category (adjective/主語一致): 現在分詞の形容詞的用法 (限定用法)・後置修飾、副詞的用法 (分詞構文)
- d. intermediate > minor category (懸垂分詞): 懸垂分詞的性質、前置詞化しつつある、または前置詞化したもの

(44) の分類により、OED より収集したデータを分析した結果が表7である。

表7 OED における *barring* の通時的変化

分類(横軸) → ↓年代(縦軸)	major category	intermediate category > minor category			不明重複	合計
	noun/verb	adjective	adjective (主語一致)	adjective (懸垂分詞)		
1450-1499				1		1
1500-1549						0
1550-1599			2		1	3
1600-1649	2					2
1650-1659				1	1	2
1700-1749	2				1	2
1750-1799	1			2		3
1800-1849	3			2		5
1850-1899	7		1	6	2	16
1900-1949	3	3	2	4		12
1950-1999	5		2	2	2	11
2000-	1					1
合計	24	3	7	18	7	59

(45a)-(45d) は、前述の分類 (44a)-(44d) の例である。

- (45) a. For beauty of *barring* the Celery fly may compare with most. (1882 Garden 14 Jan. 23/3)
- b. The author started...to produce an autosexing Barnevelder by adding the *barring* factor to the ordinary lace brown Barnevelder.
(1936 tr. A. L. Hagedoorn in Scient. Rep. VIth World's Poultry Congress III. 54)
- c. He will enforce new ordinances *barring* U turns in the public square and regulating parking.
(1937 Sun (Baltimore) 27 July 6/3)

d. That immense army (*barring* accidents) will be completed.

(1793 Gouv. Morris in Sparks Life & Writ. (1832) II. 281)

(44a) は、動詞が名詞化して前置詞 *of, for, with* などの目的語となっていることにより判定される。(44b) は、(45b) のように、[*the barring* NP] など、限定詞に後続し、名詞の直前に現れることにより判定される。(44c) は、いわゆる現在分詞的用法と分詞構文のことであり、*barring* の直前の NP が意味上の主語になると考えられる。直前の NP が省略され、[..., *barring* NP] という形で生起する場合もある(ただし、この場合も *barring* の導く分詞節の主語は、主節の主語と一致している)⁵⁸。(44d) は前置詞的用法と連続的であり、主節と分詞節の意味上の主語が一致しない例であるが、(44c)との最大の違いとして、(44d) は動詞語幹 *bar* の意味が漂白化し、*excluding* と同じく「除外」の意味をもつものとなっている。表7から、19世紀後半に(44a)(44c)(44d)の用例数が増加することがわかる。

以上より、文法化の過程を考えるが、そもそも初例が(44d)の用法であるため、ここで「前置詞の通時的発達」と呼ぶことが果たして統計的に妥当であるのか、という問題が生じる。この結果から、Mair (2004) の挙げる *seeing* の前置詞的・接続詞的用法のように、動詞派生前置詞 *barring* と考えられる事例が観察されるものの、コーパスにおける頻度の変化に反映されない、静的なタイプの文法化であると考えられる。

5.5.2.3 事例分析: COHA のデータから

次に、COHA より得た、19世紀から20世紀にかけて観察される1159例のデータから、解釈不可能、文構造が不明瞭な事例などを除いた1137例を分析し、*barring* の通時的变化をみたものが表8である。なお、分類は前節と同じく(44)による。表9は*barring* の前置詞的用法の生起位置をまとめたものである。表8をみると、19世紀中旬から、(44d)の用例数の増加がみられることがわかる。

⁵⁸ 「分詞節」とは、Hopper (1991) の語 *participial clause* による。厳密には「句」も含むと考えられるが、これは主語一致という脱範疇化の観点からの名称であろう。

表8 COHAにおける *barring* の数の通時的変化

分類(横軸) → ↓年代(縦軸)	major category		intermediate category > minor category			接続詞		不明 重複	合計
	noun	verb	adjective	adjective (主語一致)	adjective (懸垂分詞)	that節	that省略		
1820-1829		2		3	2				7
1830-1839	2	3	1	5	2			1	14
1840-1849	3			9	15	7	3	1	38
1850-1859	1		2	6	8		1		18
1860-1869	3			5	3				11
1870-1879	3	1		7	12			1	24
1880-1889	2	2		14	18				36
1890-1899	2	2		18	19			2	43
1900-1909	4	1		18	36		1	2	62
1910-1919	6	1		15	36	1			59
1920-1929	10			26	44		1	2	83
1930-1939	14	3		29	57	1			104
1940-1949	13	4		36	60			1	114
1950-1959	18	5		45	58			3	129
1960-1969	16	2		42	45			3	108
1970-1979	22	4		33	53			1	113
1980-1989	15	8		42	36			1	102
1990-1999	16	1		27	46			4	94
合計	150	39	3	380	550	9	6	22	1159

表9 前置詞 *barring* の生起位置

分類(横軸) → ↓年代(縦軸)	文頭	文頭以外
1820-1829		2
1830-1839		2
1840-1849		15
1850-1859		8
1860-1869		3
1870-1879	2	10
1880-1889	4	14
1890-1899	2	17
1900-1909	2	34
1910-1919	5	31
1920-1929	16	28
1930-1939	10	47
1940-1949	12	48
1950-1959	5	53
1960-1969	9	36
1970-1979	17	36
1980-1989	17	19
1990-1999	20	26
合計	121	429

ここで生起位置に着目すると、表9より、(44d)の用法は19世紀後半まで文頭に生起しないとわかる。初めて文頭に現れるのは1874年の例(46)である。その後20世紀前半にかけて徐々に増加し、20世紀中旬に減少する。

(46) *Barring this, it only remains to relieve somewhat the monotony of our food, by variety in the modes of dishing it up.* (1874, FIC, *Idolatry A Romance*; COHA)

以後、現在へ至るまで、(44d)の用例数は1980年代を除き(44c)の用例数を上回っている。

また、動詞派生前置詞は接続詞として用いられることも多い(児馬 2001: 75)。一例として、*save/saving* (cf. 児馬 2001)、*considering* が挙げられる (cf. Kawabata 2003)。ここでは、OEDではみられなかったものの、COHAのデータにみられた *barring* の接続詞的用法 (cf. 荒木・宇賀治 1984: 528) に関して述べる。この用法には、*barring* に *that* 節が後続する (47a) のようなものと、*that* が省略されている (47b) のようなものがある。

(47) a. The praast, Father Murhy, ye sae, had a beautiful niece, as was jist my age, *barring that* she was a couple o' year younger. (1849, Fic, *Leni-Leoti Adventures*; COHA)

b. Me father -- pace to his ashes! -- *barring* I niver saan the proof he was me father, and there was dispute about it -- was a gintleman laborer, as had plenty to do all his life and little to ate.

(1849, Fic, *Leni-Leoti Adventures*; COHA)

barring の接続詞的用法は、大部分が Fiction のジャンルで用いられている。特に、1840年代に観察されるものは、その全てが同一の著者 (Emerson Bennett) による作品 (*Leni Leoti Or Adventures In The Far West*) から得られた事例である。接続詞的用法として最後に観察されるのは、下記 (48) の例である。

(48) "I don't know anything against the kid, *barring that* he's been a little wild," Maloney testified.

(1936, FIC, *Crooked Trails Straight*; COHA)

5.5.3 考察

Mair (2004: 123) は、文法化には 2 つのタイプがあると述べている。第一に、動的なタイプ (“dynamic” type) があり、通時的変化が談話の頻度上の大きな推移として現れるものである。(de)spite の前置詞的用法は、18 世紀後半に出現し、それまで支配的であった *notwithstanding* と交替していった (Rissanen 2002) が、これはその一例と考えられる。第二に、静的なタイプ (“static” type) があり、語彙項目が偶発的に文法的用法として用いられたと説明するのが最も妥当とされるものである。具体例として、Mair (2004) は *seeing (that), supposing (that)* を挙げている。これは、動的なタイプに対し、データに観察可能な頻度上の大きな変化がみられないものであるとされる。

ここで、*barring* の前置詞的用法が文頭に生起するのが 1870 年代以降である点に着目したい。秋元 (2002: 183, 184) は、動詞 *concern* から前置詞 *concerning* が発達した脱範疇化の過程に関して、OED を中心に辿り、以下のプロセスがあると考えている。

- (49) a. a matter intimately concerning your friend.
- b. He made to me a communication concerning your friend.
- c. I will communicate with you concerning your friend.

(秋元 2002: 183)

(49a) は動詞の意味を残しており、その主語が *a matter* すなわち *a matter (which is) concerning your friend* であるとされる。(49c) の *concerning* は主語支配ではなく前置詞的であり、(49b) は中間的な例とされる。さらに、「一旦、*concerning* が前置詞の位置を得ると、文頭に置くことが可能になる」(秋元 2002: 183) と述べ、下記を引用している。

(50) *Concerning* this solemn incoronation, we have from the pen of an eye witness, Guido d’Arezzo, details etc..

(1836 F. Mahoney Rel. Father Prout, Songs Italy ii. (1859) 349)

barring も、*concerning* とともに分詞由来の前置詞であり (安藤 2005: 622)、前置詞的用法と連続的な懸垂分詞的用法をもっている。*barring* の変化の過程も *concerning* と同様であると仮定するならば、「一旦、*barring* が前置詞の位置を得ると、文頭に置くことが可能となる」と考えられるのでは

なかろうか。つまり、1874年に初めて *barring* の前置詞的用法が文頭に生じたことから、この時期に *barring* は前置詞の地位を得たと推測するのである。この背景には、脱範疇化の流れが、動詞から前置詞へと一方向性をもって進行していく、とする文法化の特徴がある。確かに、文頭に生起するのが前置詞の典型的な特徴だとするには検討の余地がある⁵⁹。しかし、脱範疇化の観点からは、(44c) の用法においては主節・分詞節の主語一致がみられたものの、の懸垂分詞的用法へと文法化するに伴い、そのような一致がみられなくなっていくという変化は、動詞的特徴の喪失に伴い前置詞的特徴をもつようになっていくことを示す1つの基準となりうる。同様に、文法化という観点を鑑みれば、動詞的な用法においては [NP *barring*...] のように *barring* の直前に主語となる名詞を伴う（語順の支配を受ける）が、やがて直前に NP をとらずとも生起できるようになる（主語の支配を受けなくなる）、と考えられる。

以上を基に、COHA のデータにより検討を行うと、19世紀後半の時期にかけて前置詞への文法化が徐々に進み、その後用法が確立して文頭にも生起可能となった、と考えることができる。生起位置を問わず、*barring* の前置詞的用法は20世紀以降の時期に観察され、そのまま現在へと至っている。この種の変化は、Mair (2004) のいう動的なタイプの文法化であると考えられる。

5.5.4 まとめ

本節では、OED, COHA のデータに基づき、*barring* の通時的発達を検討した。分析の結果は、以下のようにまとめられる。(i) OED のデータをみる限り、静的なタイプの文法化と考えられる。(ii) COHA のデータからは、動的なタイプとしての側面を観察することができる。ともに分詞由来である *considering*, *concerning* と同じ文法化の経路 (cf. 秋元 2002) を辿ったとすれば、19世紀後半から20世紀前半の時期に「徐々に前置詞化が進んでいった」と推測される。以上を踏まえると、前置詞としての *barring* の用法は既に15世紀からみられたが、19世紀後半から20世紀前半の時期にかけてさらに文法化が進み、前置詞としての性質が強くなったといえる。

次に問題点を述べる。本分析は以下を前提とする:(i) 脱範疇化における一方向性、(ii) *barring* は、*concerning*, *considering* と同じ文法化の経路 (49) を辿ること。これらの妥当性には検討の余地があ

⁵⁹ Fukaya (1997) は、動詞派生前置詞の分析にあたって、前置詞随伴・残留、前置詞的副詞とともに、前置詞的特性を特徴付ける1つの基準として主語解釈を用いている。前置詞の典型的な特徴を鑑みると、主語解釈は動詞的特徴であるといえる。Fukaya (1997) のアプローチは、「脱範疇化の観点から、動詞的特徴の喪失を、前置詞化の進行を示す証拠と捉え直す」という分析の方向性を示す。

る⁶⁰。本節では、秋元 (2002: 183, 184) が挙げるように、前置詞 *concerning* と同様、懸垂分詞を経て前置詞へと文法化し、その過程で意味の漂白化が起きたという前提のもと分析を行っているが、この前提についても慎重な検討が必要である。具体的には、児馬 (2001) において述べられている、15世紀頃に生じたとされる *save/saving* と *bar/barring* の間の類推に基づく再分析、意味の漂白化が生じた時期など、より詳細な検討は行っていない。また、文頭に生起する *barring* を文法化が進んだ例という前提にて分析を行ってきたが、この前提についても慎重を期する必要がある。本研究は、この時代に焦点を当てた分析を欠いており、言語記述の面においても、異形態の検討とともに、緻密な通時的記述が必要である。

5.6 事例分析 4: *respecting*⁶¹

本節では、*respecting* の通時的な文法化プロセスを示し、(間) 主観化 (Traugott 1989, 2003, 2011) の観点から検討を行う。Traugott の文法化、(間) 主観化の研究は、歴史語用論における重要な課題として着目されてきた (高田・椎名・小野寺 2011)。文法化は「文法的要素の (史的) 発達」に、主観化は「話し手の態度 (立場)」に、それぞれ主眼を置く (Traugott 2011: 59)。そのため、両者の関係については議論がなされており (cf. Traugott 2003, 2011)、事例研究による検証が必要といわれる。本分析は、この種の理論的問題への示唆的な知見を与える。

5.6.1 *respecting* の前置詞的用法

respecting の前置詞的用法は、現在分詞由来の前置詞であり (小西 1976: 11)、*concerning*, *regarding* と同じく「関連」の意味を持つ類義語である (リーダーズ英和辞典; OALD; Saito 1932: 969; 斎藤 2016: 1345)。英英辞典においても、前置詞 *respecting* に関して以下の例が挙げられている (斜体部は筆者による)。

- (51) a. information *respecting* the child's whereabouts (OALD)
 b. A discussion took place *respecting* the provision of science teaching. (LDCE)

⁶⁰ 一方性に対しては、脱文法化 (cf. Ramat 1992) の反例が挙げられている。また、本節では、(47a)-(47c) のような文法化のプロセスを提示できていない。

⁶¹ 本節の内容は林 (2017a) に基づく。

Görlach (1991: 109) は、*regarding* とともに 18 世紀に発達したラテン語の絶対構文に由来する分詞から前置詞へと発達した例としている。寺澤 (編) (2015: 1178) によると、この用法は「関係する」という意味の現在分詞 *respecting* に由来し、1732 年が初出である。その例 (52) は、OED にも収録されている。

(52) *Respecting* Man, whatever wrong we call, May, must be right, as relative to all.

(1732; Pope *Ess. Man* i. 51)

5.6.2 *respecting* の通時的変化

本節では、秋元 (2002: 183-191) を援用し、*respecting* の通時的変化を検討する。OED から 341 例を収集し、(a) 分詞的、(b) 境界的、(c) 前置詞的、な事例をそれぞれ抽出し、時代ごとの分布をみた。本節の分類は、脱範疇化のクラインにおいて、(a) が major category に、(b) が intermediate category に、(c) が minor category に相当する。以下 (53a) (53b) (53c) は、(a) (b) (c) 各用法の例である。

(53) a. A Lyon...is returned from his pray and taketh his rest, *respecting* his enemies.

(1562; Legh *Armory* (1597) 46)

b. Neither was the Contrivment lesse beneficiall, *respecting* the three walls sheltridge from the four winds.

(1650; T. Bayly *Herba Parietis* i. 3)

c. A most useful review of the present state of knowledge *respecting* *spectral series.

(1900; *Sci. Abstr.* III. 465)

(53a) は、*respecting* の初例である。これは、いわゆる分詞構文と考えられ、主節・分詞節の解釈上の主語が一致している。ここでは、動詞 *respect* の「考慮に入れる」「注意を払う」「尊敬する」(cf. 寺澤 2015: 1178) などの、話者の思考に関わる意味は漂白化していない。(53b) は、主節・分詞節の主語が一致しない、いわゆる懸垂分詞的な例である。(53b) は文法化が進みつつあり、分詞的・前置詞用法の中間的な性質を持ち、漂白化は起きていないと考えられる例であるが、場合によっては漂白化が進みつつあり「関連」の意味とも解釈可能なものである。(53c) の *respecting* は「関連」の意

味と推測されるもの、すなわち漂白化が起きた事例である⁶²。これは、文法化の後期にあり前置詞化が進んだものと考えられる。なお、(53c) の * は、綴りが不明であり、推測されたものであることを示している。

ここで重要であるのは、本節の分類においては漂白化を重要な基準とする点である。つまり、文法化の進行を、(53a) のような話者の思考に関わる *respecting* の意味から、*about* へと置換可能な「関連」の意味への漂白化により規定していくことになる。この点においては、3.3.2 節で検討を行った Huddleston(1984) や、寺澤(編)(2015) の記述とは異なることに注意されたい。(52) の例は、動詞 *respect* の「関係する」という意味が残存している、とみなせば漂白化に当てはまらなないと考えられるためである。本節では、この例を、「考慮に入れる」という意味から、推論に基づく「関連」という意味への拡張が起きたものと捉える。つまり、両者の意味間に連続性を認め、その変化を、文法化の「意味の漂白化」によるものとする⁶³。それによって、漂白化に基づき、前置詞へと文法化が進行した度合いを規定していくことが可能となる。

以下、*respecting* について、(i) 初期近代英語(1551~1700年)、(ii) 後期近代英語(1701~1900年)、(iii) 現代英語(1901年以降)、の3つの期間(堀田 2016:2)に分け、文法化との関係を考察していく。表10は、*respecting* の各用例数の変遷を50年ごとに示したものである。(a)(b)(c)いずれの用法にも該当しないもの、判別が困難であるものは分析の対象外としており、表においては「他」と表記した。また、表10は、前節までの表と異なり、英語史における時代区分を併記しているが、これは文法化のプロセスが時代区分と合致していることによる。詳細は後述する。

⁶² これまでにみてきたように、漂白化の程度性に異なる点に注意する必要がある。例えば、6章において検討を行う *excluding* の例をみてみよう。出典はBNC。

(i) *Excluding this exceptional case, we examined 16 patients showing clinical signs of intestinal pseudo-obstruction.*

(ii) *Excluding Roman towns, the earliest planned towns of England can be identified in late Saxon times.*

本節の分類で考えると、(i) は主節・従属節(または分詞節)の意味上の主語が一致する(a)の用法、(ii) は文法化が進み前置詞化しつつある(b)(c)の用法と考えられる。しかし、(ii)の意味を考えると、動詞 *exclude* の「除外」の意味は漂白化しておらず、*respecting* とは漂白化の程度性が異なる。

⁶³ Huddleston(1984)の基準によると、(51a)は、前置詞としては周辺的な例であり「動詞的」と判定される恐れがある。これらは程度問題であり、文法化の漸進性を規定していくのに相応しい分類を行う必要がある。本節の分類についても、寺澤(編)(2015)などの記述をみると、「関連」の意味を持つ *respecting* の前置詞的用法を漂白化とみなすべきかについては検討の余地がある。

表 10 *respecting* の通時的変化

時代区分	年代	(a) 分詞的 major	(b) 境界的 intermediate	(c) 前置詞的 minor	他	計 (例)
(i) 初期近代英語	1551-1600	7			2	9
	1601-1650	5	2		7	14
	1651-1700	4			2	6
(ii) 後期近代英語	1701-1750	2			1	3
	1751-1800	8	27	5	13	53
	1801-1850	15	87	15	17	134
	1851-1900	6	50	13	15	84
(iii) 現代英語	1901-1950		9		7	16
	1951-2000	2	1		19	22

(i) 初期近代英語 (1551 年～1700 年)

この時代では、(a) の分詞的用法が大半を占め、(b) の境界例は 2 例のみがみられ、(c) の用法は観察されない。以下、それぞれの例を (54) に示す。

(54) a. A Lyon...is returned from his pray and taketh his rest, *respecting* his enemies. (= (53a))

(1562; Legh Armory (1597) 46)

b. Neither was the Contrivement lesse beneficiall, *respecting* the three walls sheltridge from the foure winds. (= (53b))

(1650; T. Bayly Herba Parietis i. 3)

(ii) 後期近代英語 (1701 年～1900 年)

(b) の境界例が増加し、(c) の前置詞的用法が観察されるようになる。従って、この時期に前置詞への文法化が進んだと考えられる。以下、各用法の例を (55) に示す。前述したように、(52) のような例は、本節における漂白化の観点からは境界例と判定されるため、(b) と分類している。

- (55) a. When beasts, birds or fish, are placed in armory to face each other, they are, by some mod. Heralds, termed *respecting* each other. (1780; Edmondson Heraldry II. Gloss. s.v.)
- b. One of the first rules ··*respecting* his conduct and management of light and shadow, would be what Leonardo Da Vinci has actually given. (1778; Sir J. Reynolds Disc. viii. (1779) 19)
- c. This is an event *respecting* which it is impossible to keep silence. (1841; Lane Arab. Nts. I. 102)

(55c) は *during which* という前置詞随伴の形をとっており、統語的にも前置詞的な例と考えられる。

(iii) 現代英語 (1901 年以降)

20 世紀以降、(c) の前置詞的用法は観察されなくなる。20 世紀前半は (b) の境界例のみみられるが、20 世紀後半には (a) の分詞的、(b) の境界例が観察される。この時代の用例を (56) に示す。

- (56) a. I was illing, juggling all of these ladies and not *respecting* any of them—or myself. (1997; Jet 22 Sept. 40/1)
- b. Once a margin account has been properly margined, the regulation imposes no further requirements *respecting* the status of the account in the absence of a subsequent transaction. (1973; N.Y. Law Jml. 30 July 4/2)

5.6.3 考察

以上の観察結果を基に、*respecting* の文法化について論じるとともに、主観化との関係を考察する。

第一に、文法化が進んだ時期は、英語史における時代区分と合致している。すなわち、表 10 より、*respecting* の前置詞化が進み、意味の漂白化がみられるのは、Görlach (1991: 109) のいうように (ii) 後期近代英語の時期であり、その中でも特に 18 世紀後半であるといえる。そして、*respecting* の前置詞的用法は (ii) 近代英語後期のみ観察され、(iii) 現代英語においては消滅すると考えられる。20 世紀後半以降、(a) 分詞的、(b) 境界的用法についても殆ど観察されなくなり、動名詞 (57a)、語の一部 (形態素) (57b) などが大半を占めることとなる。

(57) a. There was an arrogance among certain militant pacifists which prevented them from *respecting* the views of those who thought freedom worth fighting for. (1961; E. S. Turner Phoney War xiii. 179)

b. No self-*respecting* garage-rock collection should be without a Sonics platter.

(1990; Rolling Stone 22 Mar. 116/4)

第二に、これまで観察してきた *respecting* を主観化の観点から論じる。結論から述べると、本節における *respecting* のデータは、分詞節の「解釈上の主語」に着目することによって、文法化に伴い主観化がみられる事例と位置づけることができる。(b) 境界的用法の意味上の主語は「話し手」で、*respecting* が導く分詞節の内容はその判断を示していることから、主観化がみられると考えられる。一方、(c) 前置詞的用法では、文の発話者は話し手であるものの、*respecting* が導く分詞節においては、(b) 境界的用法と比べて話し手の主観的な判断が捨象されている。この点では、やや間主観化の方向へと進んでいる、とみなすことが可能となるかもしれない。ここで重要であるのは、(b) から (c) への変化は歴史的に起きており、このプロセスは文法化の進行に伴うという点である。

しかし、本節で検討した *respecting* のデータにおいては、早瀬 (2016a) が示す *considering* (cf. 2.5 節) のような、懸垂分詞の独立用法であり談話機能化が進んだ例は観察されなかった。早瀬 (2016a) は、この種の副詞的な用法を間主観化の例としている。*respecting* は早瀬 (2016a) の *considering* と同程度に間主観化が進んだ副詞的は観察されず、この点においては主観化の段階に留まるものと考えられる。

5.6.4 まとめ

本節では、*respecting* の通時的発達を検討し、文法化、主観化の観点から考察を行った。第一に、文法化に関して、*respecting* は後期近代英語期 (18 世紀後半) に前置詞化したことを指摘した。また、動詞派生前置詞 *respecting* は 19 世紀を最後に消滅し、20 世紀以降には全く観察されなくなったことを示した。第二に、*respecting* を動詞派生前置詞の事例研究として検討し、OED のデータにより文法化プロセスを解明し、主観化の観点から考察した。ただし、ここでの変化は、(b) の境界的用法にあたる表現が、さらに (c) の前置詞的用法へと文法化すると、話者の主観を示しにくくなるというものである。本節で扱った *respecting* のデータでは、早瀬 (2016a) が示す *considering* のような談話機能化が進んだ副詞的な用法は観察されず、その点において *respecting* には間主観化がみられ

ないと論じた。本節のように、懸垂分詞構文の談話的な用法を主観化の観点から検討することによって、Kawabata (2003) などの文法化の通時的研究においては説明が困難であった *considering* の分詞的・前置詞的用法と、談話機能化が進んだ副詞的用法との関係性を理論的に規定し、包括的に捉え直していく道筋が開ける。通時的な背景を意識しつつも、共時的な分析を主眼としている早瀬 (2016a)、Kawabata (2003) のような通時的アプローチを接合させることによって、より広範な視座から言語変化の揺らぎをとらえることが可能となるだろう。

一方で、本分析には検討すべき課題が残されている。早瀬 (2016a) の懸垂分詞の分析が立脚する *subjectivity* は、Langacker の「主体性 (*subjectivity*)」であり、理論的基盤が Traugott のものとは異なるという点に注意したい。早瀬 (2016a) の議論では、懸垂分詞構文が早瀬 (2016a) が指摘する談話機能的な用法で使用されるとき、初めて Traugott の「(間) 主観性 ((*inter*)*subjectivity*)」との接点が生まれると述べられている。従って、動詞派生前置詞の文法化現象と、Traugott, Langacker 両者による *subjectivity* の理論的な議論を整理し直し、慎重な議論を展開していく必要があるだろう。

5.7 5章のまとめ

本章では、先行研究で検討されていない事例を一貫した基準で分析してきた。以下、各節の内容をまとめる。

5.1 節で本章の目的と概要を述べた後、5.2 節では、分析のため、品詞的振る舞いに基づき、*-ing* 分詞を「脱範疇化のクライン (*cline of categoriality*)」(Hopper and Traugott 2003: 107) へ位置づけた。その後、OED のデータを用いて、頻度上の変化から前置詞化の過程を分析した。

5.3 節では、*excluding* の用例 129 例を分析した。結果、(i) 意味上の主語が *excluding* の直前に明示される後置修飾的な用法が 19 世紀より出現し、20 世紀を通して飛躍的に発達したこと、(ii) 意味上の主語が関係代名詞の主語と一致することにより、動詞から形容詞・副詞を経て前置詞へと変化していくという「文法化の一方向性」に逆行する変化が起きていた可能性があること、を指摘した。

5.4 節では、*preceding* の用例 584 例を分析した。前置詞化している *following* (Olofsson 1990) と異なり、*preceding* には前置詞と連続的な懸垂分詞の事例が存在しない。ここに *preceding/following* の非対称性がみられる。共時コーパスでは僅かに観察されることから *preceding* は文法化の過渡期にある。

5.5 節では、*barring* の事例 52 例を分析した。15 世紀の初例が既に前置詞であった点、事例数が少

なく一般化が難しい点から COHA より得た 19 世紀から 20 世紀の例 1159 例を分析した。19 世紀後半に文法化が進み、その後 *considering*, *concerning* と同様、文頭にも生起可能となったことを指摘した。

5.6 節では、*respecting* の用例 341 例を分析し、(i) 後期近代英語 (18 世紀後半) に前置詞化が進んだものの 20 世紀に消滅したこと、(ii) これは主観化 (Traugott1989) の例であること、を指摘した。

以上の結果は、動詞派生前置詞の研究に対し、一貫した基準による比較対照を可能とする点で、文法化の記述・理論の両側面において貢献をなすものである。ただし、本章のアプローチには注意が必要である。すなわち、これまでは現象の動詞から前置詞への品詞カテゴリー的な変化のみを考察対象としてきたが、秋元 (2002: 190) が述べる問題点と同じく、本研究においても、文法化プロセスが分析の中心となっており、近代英語期における文体の発達など、その誘因となる英語史上の歴史的背景との関連は十分に考慮されていない。今後検討すべき課題として、各時代における特徴を踏まえ、通時的な変化との関係性を模索することが重要である。

第6章 動詞派生前置詞の生起ジャンルと文法化

6.1 目的と概要

4章、5章においては、それぞれ共時的・通時的分析を推進してきた。本章では、それらの結果を踏まえつつ、共時性の観点から動詞派生前置詞の生起ジャンルを再検討していく。既にみてきたように、通時的には異なる発達プロセスを辿った動詞派生前置詞は、4章でみたように、様々な文法化の程度性を示しつつ、現代英語において共存している（重層化; Hopper 1991、秋元 2002）。本章では改めて共時性に立ち返り、通時的变化を経た結果としての文法化を、共時コーパス BNC, COCA にタグづけられた情報に基づき、生起ジャンルの観点から規定していく。検討する事例として、イギリス英語については *considering*、「除外」の意味をもつ *barring, excluding, saving* を、アメリカ英語については前置詞随伴の事例をジャンル別に分類する。

本章の構成は以下の通りである。6.2節では、BNC をデータとし、5章で行った「脱範疇化の cline」(Hopper and Traugott 2003: 107) に基づく分類を援用し、文法化した *considering*、「除外」の意味を持つ動詞派生前置詞 *barring, excluding, saving* を分析していく。6.2.1節では、*considering* の前置詞用法が書き言葉に、接続詞用法が話し言葉に生起する傾向を持つことを指摘する。6.2.2節では、同様の方法に基づき「除外」の意味を持つ動詞派生前置詞 *barring, excluding, saving* を分析し、前節の *considering* と同じく、前置詞へと文法化した用法が書き言葉に生起する傾向を持つことを指摘する。続く 6.3節では、COCA のデータを検討し、4.3節の分析で抽出した随伴する動詞派生前置詞も書き言葉に生起する傾向を持つと指摘する。6.4節を結語とし、本研究で行ってきた分析結果と先行研究の記述を踏まえ、汎時的観点から言語変化のダイナミズムを考察する。

6.2 イギリス英語: BNC のデータより

6.2.1 事例研究 1: *considering* の前置詞・接続詞用法⁶⁴

本節では、*considering* の文法化した用法の分析を行う。*considering* には分詞・前置詞・接続詞の用法があると言われているが (Quirk *et al.* 1985)、本節では、今まで十分に議論されていない生起ジャンルとの関係により各用法を共時的に記述することを目的とする。まず、6.2.1.1節において分析方法と手順を述べ、6.2.1.2節で結果と考察を示す。

⁶⁴ 本節の内容は林 (2015b) に基づく。

6.2.1.1 分析の方法と手順

本節では、*considering* の前置詞・接続詞用法を、ジャンル、レジスターとの関係から考察する。3章において概観したように、*considering* の用法は多様であり、動詞・前置詞の境界は非常に曖昧である (Hopper 1991, Huddleston and Pullum 2002)。また、動詞派生前置詞は周皮的であり頻度が低い。そのため、4.3節において検討したように、大半の事例は大規模コーパスにおいて多く検出されない。このため、例えば数百、数千例を対象に大規模コーパスにおいてサンプリングを行ったとしても多くの事例検出を期待することは難しく、分析においても明瞭な線引きを行うことが難しい。これらを踏まえ、本節では文法化が進んだ例に範囲を限定し、議論を進める。

分析の手順は以下の通り。BNC を用いて、文法化が進み生起位置が自由になったもの (cf. 秋元 2002, Kortmann and König 1992)、つまり生起位置が文頭である *considering* を分析の対象とする⁶⁵。結果、文頭生起の *considering* は 173 例みつけられた。それらに関し、まず、間投詞、挿入句的用法、非文を除く 168 例を分析した。分類にあたり、5章で行った「脱範疇化のクライン」(Hopper and Traugott 2003: 107) を援用しつつ、前置詞用法 (NP が後続するもの) (1) と接続詞用法 (節が後続するもの) (2) に分類した。前者に関しては、文脈などを参照しながら、主語が一致しているか、一致していないか判定する。後者に関しては、後続する節が *that* 節補部をとるもの、*that* が省略されるもの、*how* をとるものに分類を行った。

- (1) a. 前置詞用法 (主語一致) : [*considering* + NP] の形式となるもののうち主節・分詞節の (解釈上の) 主語が一致するもの。
 - b. 前置詞用法 (主語不一致) : (3) のように、[*considering* + NP] の形式となるもののうち、主節・分詞節の (解釈上の) 主語が一致しないもの。
- (2) 接続詞用法: [*considering* + S+V...] の形式をとるもの。*considering that*, *considering* (*that* 省略)、*considering how* + S+V... も含む。

例えば、(3)(4) はコーパスから得られた事例である。

⁶⁵ 検索対象を文頭に生起する *considering* のみに絞ることによって、従属節の主語が明示されていない懸垂分詞的な事例へと分析対象を絞ることを意図している。ただし、主節・従属節の主語が明らか一致している事例を除く作業が必要となり、そのために (1a)(1b) の分類を行っている。なお、この手法によっては「主節の主語が明示されている懸垂的分詞的な事例」が検出されないため、この点に関しては今後の課題となる。今後、本節の結果と比較対照し、分布上の差異を検討していく必要がある。

- (3) a. *Considering* the confines of their budget, I thought it was a good one.
- b. *Considering* techniques of smelting, fuel and raw materials, workers and their families, why were each of these recent decisions made?
- (4) a. *Considering that* this was written at a time when Pound's reputation was eclipsed as Eliot's rose towards the zenith, the generosity of this essay, its lack of rancour, is admirable.
- b. *Considering* there was no one to look after her at Lomond View, I decided that the best place for her was with me.
- c. *Considering how* closely the band had worked with Charman over the past three years, their method of dismissing him seems to have been unduly formal in the circumstances.

(BNC)

(3a) は主節・従属節の主語が一致する用法である⁶⁶。これらは、いわゆる「分詞構文」と呼ばれるものであり、動詞的機能が残存している。一方、(3b) は、(3a) から文法化、脱範疇化がさらに進んだものであり、*considering* が前置詞として使われている。(3b) の例をみると、主節の主語は *each of these recent decisions* であるのに対し、従属節の主語は、発話者（話し手）であると考えられる。この種の用法は主節・従属節の主語が一致せず、規範文法においては避けるべきとされる懸垂分詞と呼ばれるものである (cf. 安藤 2005: 247; 早瀬 2007, 2009、早瀬・渡邊 2015)。次に、接続詞用法として、(4a) は、*considering that* + S + V..., (4b) は、*considering* + S + V..., (4c) は、*considering how* + S + V... の事例である。Quirk *et al.* (1985: 1002) では、これら動詞派生接続詞は、「周縁的従位接続詞 (marginal subordinators)」と位置づけられており、*considering* の直後に *that, how* などの接続詞と後続されることができるとされる。以上の文法的な分類に関して、次節では、BNC でタグづけられているジャンル・レジスターの分類と関連づける⁶⁷。

⁶⁶ (3a) の用法には、主節主語が代名詞である事例が含まれる。ただし、主節主語が代名詞であることだけでは、(3a) タイプか (3b) タイプのいずれであるかを決定できないという点に注意されたい。主節主語が代名詞であっても、(i) (ii) などの例は (3b) と分類される。

- (i) *Considering* the other sensory systems of cetaceans, they appear to have no sense of smell, for they lack any obvious olfactory organ, olfactory nerve or olfactory cerebral centre.
- (ii) *Considering* the additional confusion caused by much industrial nomenclature, with many trivial and trade names, it is not surprising that many formulators prefer to stick with what they know and trust.

(BNC)

⁶⁷ コーパスの例文にタグづけられた情報は、言語学的分類においては不十分である可能性がある。例えば、「書き言葉」であっても「話し言葉」的な表現が多くみられるブログ、「話し言葉」であっても「書き言葉」的な表現が多くみられる大統領の演説などの事例については、Biber *et al.* (1999) のレジスターとの関係から、詳細に検討を行う必要がある。

6.2.1.2 結果と考察

分析結果を Appendix 3 の表 1 から 10 に記す。ここでは、表 1-10 から推察される特徴 [A]-[D] を示す。本節における表番号は、Appendix 3 における番号である。

[A] *considering* の前置詞・接続詞用法は、書き言葉（特にアカデミックの分野）で使用されることが多い。

表 2 の BNC コーパス全体のジャンルとレジスターにおける分布をみる限り（話し言葉が全体の割 1 割を占める）、表 3 の書き言葉の数（168 例）は、話し言葉（5 例）と比較して多いといえる。また、表 5 より、*considering* の前置詞用法が、アカデミックにおいて 34 例あることがわかる。34 例中、主語不一致が 27 例と大半を占めていることから、より文法化が進行して前置詞に近づいた用法の方が学術的に好まれると予測される。

[B] *considering* が文頭に生起するとき、およそ半分以上が前置詞用法であり、その中で主語不一致がかなり多くを占める。

表 1 でみられるように、文頭 *considering* の全体のうちの約 6 割が前置詞用法であり、その中の 7 割強が主語不一致である。つまり、前置詞として使われているものが全体的に多い。

[C] 文頭に生起した *considering* は動詞というより、前置詞や接続詞として使われている。

表 1 より、前置詞用法（主語不一致）、接続詞用法（*that* 省略）が、全用例中の 53.8% という過半数を占めるとわかる。これは、*considering* が文法化している（最中）という明白な事実を示唆する。

[D] *that* 省略の接続詞用法は話し言葉や（文字数を減らしたい）新聞において顕著にみられる。

前置詞用法、接続詞用法全てにおいて、話し言葉でみつかったのは3例であり、それはすべて接続詞用法 (*that* 省略) であった。また、表8で接続詞用法 (*that* 省略) に注目してみると、新聞でよく使われるのがわかる。これは紙面が限られており字数の制限をもつ新聞という媒体の性質、会話などで省略が好まれるという傾向を示唆している。

6.2.1.3 まとめ

本節では、*considering* の文頭生起事例をBNCにて抽出した上で、前置詞・接続詞用法の分類を行い、ジャンル、レジスターとの関係から分析を行った。*considering* の前置詞用法は学术论文の用法が多いという結果は、*provided/providing that* が文学作品や公的文書で用いられることが多いという川端 (2001)、*including* の分離後置用法が学术论文やプレスといった情報散文において高頻度を示すという内田 (2003) の指摘とともに、動詞派生前置詞・接続詞は「書き言葉」を中心に用いられているという傾向を示唆する。

今後の課題として、(i) 文中や文末に生起する *considering* がどのような分布を示すのか、(ii) 他の動詞派生前置詞に関して本節と同様の調査を行ったとき、どのような数値の差異がみられるのか、(iii) 主節がどのような項・法・時制・照応をとるかなど、他にどのようなパラメーターが存在するのか、(iv) *considering* の副詞用法 (cf. Kawabata 2003) との関わり、そして、(v) 他のコーパスを利用して実証性を高める、などさらなる検討が必要であろう。

6.2.2 事例研究2: 「除外」の意味を表す周边的前置詞⁶⁸

「除外」の意味を表す前置詞として *but, except* があるが、より頻度が低い周边的な前置詞 *excepting, save, saving, bar, barring, excluding* などがある (cf. 児馬 2001: 75-76)。これらは動詞に由来し、Hopper and Traugott (2003) の主張する脱範疇化の *cline* に沿った過程を示すとされるが、通時的にみると以下の違いがある: (i) 語源となる動詞の意味 (*save ≠ exclude*) (児馬 2001)、(ii) 出現した時期 (児馬 2001: 91)。一方、共時的には、文法化の「重層化」を鑑みると、これらの用法には棲み分けがあると予想される。それでは、なぜ同義とされる語が複数存在するのだろうか。このような疑問を出発

⁶⁸ 本節の内容は、林 (2016b) に基づく。

点として、本節では、*excluding, saving, barring* の用法の棲み分けに関して、文法化との関係も考慮しつつ、(i) 品詞的振る舞い、(ii) ジャンル・レジスター、の観点から共時的分析を行う。4章における前置性の議論、児馬 (2001: 85) の *saving* の文法化には意味の漂白化を考慮する必要があるという指摘、5.3節の *excluding* の分析を踏まえつつ、本節では具体的な分析を行う。なお、6.2節における例文の出典は全てBNCである。

6.2.2.1 分析方法、分類

分析の方針は、6.2.1節と同様である。第一に、文頭に生起する *excluding* 46例、*saving* 34例、*barring* 18例について、解釈不可能、文構造が不明瞭な事例などを除いたものを品詞的振る舞いにより分類し、動詞派生前置詞へと文法化しつつある事例を抽出した。それによって、従属節の主語が明示されている事例を排除し、いわゆる分詞構文的な事例（であり、主節・従属節の意味上の主語が一致し、意味上の主語が省略されているもの）と、より文法化が進んだ（すなわち、前置詞化が進んだ）事例のみに分析の対象を絞ることが可能となる。以上をまとめると、本節が分析対象とするのは、下記 (5) の用法である。

- (5) a. 分詞的用法: [-ing+NP] の形式のうち主節・従属節の（解釈上の）主語が一致するもの
- b. 前置詞的用法: [-ing+NP] の形式のうち主節・従属節の（解釈上の）主語が一致しないもの

(5a) は、いわゆる分詞構文であり、動詞的機能が残存している。(5b) は、懸垂分詞と呼ばれるものであり、Hopper and Traugott (2003: 107) の脱範疇化のクラインにおいて (5a) よりさらに文法化が進み、前置詞的特質をもつようになった事例である。(5a) (5b) は連続的であり、境界例とみられるものも存在する (cf. 重層化)。以下、*excluding, saving, barring* について、(5a) (5b) の用例を示す。

- (6) a. *Excluding* this exceptional case, we examined 16 patients showing clinical signs of intestinal pseudo-obstruction.
- b. *Excluding* Roman towns, the earliest planned towns of England can be identified in late Saxon times.

- (7) a. *Saving* energy by using a clean energy source, the 'Heatfest solution' has even wider local and global environmental implications.
- b. *Saving* the best fruit until last, our most enthusiastic comments have been reserved for this yacht's performance under sail.
- (8) b. *Barring* accidents, we should win another Grand Slam.

(6a)(7a) は (5a) の分詞的用法の例であり、(6b)(7b)(8b) は (5b) の前置詞的用法の例である。なお、*barring* に関しては、本分析の対象となる BNC の用例中には (5a) の分詞的用法が存在しなかったため、本来 (8a) となるべき事例は割愛した⁶⁹。また、(7a) の *saving* は「節約する」という意味であると考えられるが、(7b) の *saving* は意味の漂白化が起きて「除外」の意味となっていると考えられる⁷⁰。

第二に、BNC の各例文に付与されたジャンル・レジスターに関する情報と照合し、それぞれの差異をみた。なお、分詞的用法・前置詞的用法は連続的であり境界的な事例が存在するため、本節では両者を分析の対象として考察を行う。このようにして 6.2.1 節と同様の手順を取ることで、*considering* の前置詞用法に関する結果との比較・対照が可能となる。

以下、6.2.2.2 節において品詞的振る舞い、6.2.2.3 節においてジャンル・レジスターの観点から行った考察について具体的に述べる。

6.2.2.2 品詞的振る舞い

(5) の基準により、*excluding, saving, barring* の各用例の分類を行った結果が表 11 である。表 11 の分類は (5) と同様、これまでに行った「脱範疇化のクライイン」(Hopper and Traugott 2003: 107) を援用した 5.2 節の枠組みを援用する。「形容詞的用法」とは [the -ing NP] または [more -ing] のように生起するもの。「動名詞的用法」は、前置詞の目的語として生起するなどの基準により判定される。*saving* に関しては、*saving throws* という表現が 6 例あり、その中には「形容詞的用法」とも解釈しう

⁶⁹ ただし、共時的には存在しなくとも、通時的にみると、(i) のように、過去には存在していたとされる。

(i) *Locking and barring the door, the head clerk hurried back to Guly's side, and lifted him gently in his arms.* (1857, FIC; COHA)
この用法に関しては、5.5 節の議論、特に *intermediate category* (adjective/主語一致) という分類を参照のこと。

⁷⁰ *saving* の例 (7b) は前置詞的用法としたが、分詞的用法とも解釈しうる。このことから、*saving* は文法化しつつあるものの、*excluding, barring* と比べて文法化が進行していないと考えられる。文法化の程度に関する議論は 6.2.2.2 節 [G] を参照。

るものがあつたが、動詞的機能を保持しているという点から表 11 では「動名詞的用法」に含めた⁷¹。

表 11 「除外」の意味を表す動詞派生前置詞の分類

(i) <i>excluding</i>			(ii) <i>saving</i>			(iii) <i>barring</i>		
一次分類	二次分類	(%)	一次分類	二次分類	(%)	一次分類	二次分類	(%)
分詞・前置詞 (42)	分詞 (3)	6.5	分詞・前置詞 (7)	分詞 (5)	14.7	分詞・前置詞	前置詞 (16)	88.9
	前置詞 (39)	84.8		前置詞 (2)	5.9		その他 (2)	動名詞 (2)
その他 (3)	動名詞 (3)	6.5	その他 (17)	動名詞 (17)	50.0	計		100
不明 (1)		2.2	不明 (10)		29.4			
計		100	計		100			

以下、表 11 に示した品詞的振る舞いにみられる特徴 [E]-[G] を述べる。

[E] 同じく「除外」の意味を表す前置詞であっても、事例により品詞的振る舞いの分布は異なる。

表 11 (i) より、*excluding* の用法は、検出数 46 のうち 42 例が分詞的・前置詞的用法であり、そのうち前置詞的用法が大多数を占める。また、表 11 (iii) より、*barring* に関しても、前置詞的用法が最も多く観察される。一方、表 11 (ii) をみると、*saving* に関しては、*barring, excluding* と比較して前置詞的用法の割合が少なく、文の主語となる動名詞的用法など、他の品詞的振る舞いが多く観察されるのが特徴である。また、生起数を考慮すると、前置詞的用法に関しては、これらの中では *excluding* が最も広く一般的に用いられると予想される。以上のように、同一の意味をもつ周辺的前置詞であっても、その品詞的振る舞いは全く異なる分布を示す。

[F] 文頭に生起した *excluding, barring* の大部分は、動詞というよりも前置詞として用いられている。

表 11 (ii) (iii) からわかるように、文頭に生起した *excluding, barring* の約 9 割が、分詞的あるいは前置詞として用いられている。また、*excluding* の約 85%、*barring* の約 89%が前置詞的用法の事例である。*saving* と異なり、これらの事例は、ほぼ前置詞として用いられている。

⁷¹ 「形容詞的」「動名詞」という用法の区別は、本節における分詞的・前置詞的用法が生起するジャンル・レジスターに関する議論には直接の影響はなく、ここでは問題としない。

[G] 文頭に生起した *excluding, saving, barring* の前置詞的用法は、文法化の途上にある、もしくは文法化している。ただし、その程度には段階性がある。

表 11 (ii) より、*saving* については、動名詞的用法や、形容詞的用法とも解釈しうる用法が観察されており、様々な品詞的振る舞いを示していることがわかる。なお、*excluding, saving, barring* いずれの事例においても、前置詞的用法が観察されている。*excluding, barring* については分詞的用法が占める割合が非常に少ないことから、少なくとも文頭に生起した事例は、文法化の途上にある、もしくは文法化していると推定される。ここで、文法化の程度には段階性が認められる点に注意せねばならない。その証拠として、表 11 (iii) より、*barring* は (5a) の分詞的用法、すなわち動詞的機能を保持した例が観察されず、従って前置詞として確立していると予想される点が挙げられる。*excluding, saving* については、(6) と (7) の例をみてもわかるように、文法化の異なる層、すなわち、(5a) の分詞的用法と (5b) の前置詞的用法が共存している段階にあると推測される。なお、文法化し終えたのか、今後どのように変化していくのかに関しては、これらのデータからは指摘できない。

6.2.2.3 ジャンル・レジスター

前節で抽出した分詞的用法・前置詞的用法に関して、BNC の各例文に付与されたジャンル・レジスターに関する情報と照合し、それぞれの分布をみた結果が表 12 である（用例数が 0 例であるものは除外した）。

表 12 「除外」の意味を表す動詞派生前置詞のジャンル・レジスターにおける分布

(i) excluding		(ii) saving	
書き言葉 (42)	アカデミック (7)	社会科学 (1)	アカデミック (1) 社会科学 (1)
		自然科学 (1)	雑誌 (1)
		医学 (5)	新聞 (1) 社会 (1)
	非学術 (8)	社会科学 (2)	フィクション(散文) (2)
		自然科学 (1)	伝記物・随筆 (1)
		人文学 (2)	説明文 (1)
		工学 (1)	
		政治学・法学・教育 (2)	
	雑誌 (3)		
	新聞 (10)	ブロードシート (6)	
		他(報道) (2)	
		他(商業) (2)	
	フィクション(散文) (1)		
	生活・雑多・暮らし (6)		
	宗教 (2)		
	商業 (3)		
議事録 (1)			
法令文書 (1)			
話し言葉 (0)	会話 (0)		

(iii) barring	
書き言葉 (16)	ニュース(オートキュー) (1)
	雑誌 (6)
	新聞 (4) ブロードシート (2)
	他 (2)
	フィクション(散文) (1)
	生活・雑多・暮らし (3)
	公式・政府文書 (1)
話し言葉 (0)	

ここで、表 12 の分布にみられる特徴 [H] [I]を示す。

[H] 同じく「除外」の意味を持つ前置詞であっても、ジャンル・レジスターに関しては異なる分布を示す。

表 12 (i) より、*excluding* はどのジャンルにおいても生起するが、表 12 (ii) (iii) をみると、*saving*, *barring* は学術的な文章においては生起しにくいとわかる。学術的な文章 (表 12 (ii) の「アカデミック」) において生起する 1 例は分詞的用法である。つまり、*barring*, *saving* の前置詞的用法に限って言えば、学術的な文章においては生起しないこととなる。児馬 (2001:90-91) は、*bar/barring* は *save/saving* からの類推により前置詞として発達したのではないか、という可能性を述べているが、両者が生起するジャンルにもこのような類似性が共時的に観察される点は興味深い。また、Appendix 3 の表 5 をみると、*considering* の前置詞用法は「新聞」のスポーツ・報道には生起するもののタブロイド・ブロードシートに生起しない。本節の結果と比べると、同じ新聞であっても動詞派生前置詞により好まれるジャンルが異なるとわかる。

[I] 「除外」の意味を持つ周遍前置詞 *excluding, saving, barring* は書き言葉において使用されることが多い。

文頭に生起する *excluding, saving, barring* の分詞的・前置詞的用法は、話し言葉においては用いられない。分析対象とした全ての事例が書き言葉であるという事実は、周遍前置詞 *excluding, saving, barring* が、基本的に書き言葉で用いられるという傾向を強く示唆する。この傾向は 6.2.1 節の *considering* の前置詞用法の観察においてもみられ、動詞派生前置詞に共通する特徴と考えられる。

6.2.2.4 まとめ

本節では、品詞的振る舞い、ジャンル・レジスターに関し、「除外」の意味を表す周遍前置詞 *excluding, saving, barring* の観察を通して共時的にみられる差異を示した。具体的には、文頭に生起する周遍前置詞 *excluding, saving, barring* は、(i) 文法化の程度性が異なること (cf. [G])、(ii) *considering* の前置詞用法と同じく書き言葉において使用されること (cf. [I])、を指摘した。また、(iii) *bar / barring, save / saving* は、発達的にも (児馬 2001: 90-91) 共時的に生起するジャンルにおいても類似性がみられること (cf. [H])、などを述べた。

今後の課題としては、(i) 文頭以外の位置に生起する *excluding, saving, barring* を含めた頻度上の分布、(ii) 「除外」の意味を表す前置詞として、より頻度の高い *but, except, excepting, without* などの用法との棲み分け、(iii) *concerning, regarding* など、他の動詞派生前置詞との差異、に関して詳細な検討を行うこと、である。

6.3 アメリカ英語: COCA のデータより⁷²

本節の目的は、4.3 節の前置詞性の検討において行った随伴を示す事例について、コーパス (COCA) にタグづけられた情報に基づき検討を行うことである。表 13 は、表 3 (cf. 4.3 節) の頻度 1 以上の例に関し、COCA の各例文に付与された生起ジャンルを示す。表 13 の横軸の数を合計した値は、表 3 の頻度に合致する。*during, according to* は、表 3 と同様、概算による数 (※) である。

⁷² 本節の内容は、林 (2018) に基づく。

表 13 前置詞随伴を示す動詞派生前置詞のジャンル別生起数

	動詞派生前置詞	学術論文	雑誌	フィクション	ニュース	話し言葉	合計
1	<i>during</i>	※1144.3	※614.8	※537.9	※845.3	※153.7	※3266
2	<i>according to</i>	※264.6	※34.0	※0	※3.8	※7.6	※310
3	<i>past</i>	1	10	13	2		26
4	<i>following</i>	9	4	2			15
5	<i>concerning</i>	6	1	5		1	13
6	<i>regarding</i>	4	1	1	1		7
7	<i>owing to</i>	7					7
8	<i>failing</i>	4	1		1		6
9	<i>notwithstanding</i>	1	1				2
10	<i>including</i>					1	1

表 13 より、随伴を示す前置詞性が高い動詞派生前置詞のうち *during*, *according to*, *past*, *following*, *concerning*, *regarding*, *owing to*, *failing*, *notwithstanding* は主に「書き言葉」、特に「学術論文」において使用されている。*past* は「フィクション」「雑誌」が学術論文を上回るものの、いずれにせよ「書き言葉」にて使用される傾向が強い。基本的に、動詞派生前置詞は書き言葉において使用され、頻度の高い *during*, *according to* に関しては話し言葉においても広く使用されている、と考えられる。表 13 にみられる分布は、イギリス英語において動詞派生前置詞は書き言葉で用いられる傾向が強いと論じた 6.2 節の結果が、アメリカ英語においても支持されることを示す。

6.4 生起ジャンルと文法化

以上、6 章では、イギリス英語における (i) 文法化が進んだ *considering* の前置詞的・接続詞的用法、(ii) 重層化 (Hopper 1991、秋元 2002) の観点から語用論的相違があると推測される「除外」の意味を表す動詞派生前置詞 *barring*, *excluding*, *saving*, アメリカ英語における (iii) 前置詞随伴した動詞派生前置詞、について、生起ジャンルとの関係から検討を行った。(i)(ii) に関しては、BNC から文頭に生起する事例を得、品詞的振る舞いにより文法化した用法を抽出した。その後、コーパスにタグづけられたジャンルの情報に基づき、文法化が進んだ懸垂分詞的用法・前置詞的な用法は書き言葉で使用される傾向があること、*considering* の接続詞的用法は話し言葉で使用される傾向があること、を指摘した。(iii) に関しては、4.3 節において得られた COCA のデータを検討し、随伴する動詞派生前置詞が書き言葉において用いられる傾向が高いこと、その中でも頻度の高い *during*, *according to* は話し言葉においても使用されていること、を確認した。この結果から、イギリス英語、

アメリカ英語のいずれにおいても、動詞派生前置詞は書き言葉において用いられるという同様の傾向を示すといえる。

以上の結果は、3.3.3 節において概観した、先行研究における記述と整合性をもつ (内田 2003、川端 2001、Rissanen 2000)。また、初期近代英語期、書き言葉における必要性から発達した前置詞の影響も考えられるだろう (Görlach 1991: 108-110)。すなわち、初期近代英語期に前置詞全般が発達し、頻度の高い *of, by, about* などの前置詞は書き言葉、話し言葉の区別を問わず広く使用された一方で、動詞派生前置詞は書き言葉を中心に使用され、両者の棲み分けがなされつつ使用されていった、というシナリオである。*(de)spite* と *notwithstanding* の交替は、音節数の影響が指摘されているが (cf. Rissanen 2002)、頻度の高い前置詞 *of, by, about* などの音節数の少ない前置詞と音節数の比較的多い動詞派生前置詞の関係性についても同種の関係があるものと考えられる。この種の書き言葉、話し言葉における用法の棲み分けは、*in spite of vs. despite* の 20 世紀における発達 (菊地 2014) から支持される。菊地 (2014: 10-11) は、20 世紀初旬において最も広範に使用されていた譲歩の前置詞は *in spite of* であったものの、その後 *despite* が急速に発達し 20 世紀後半には *despite* との交替がみられたことを COHA のデータにより示している。菊地 (2014: 11) はまた、発達初期の段階では「簡潔さ」が重視される「ジャーナリズムの英語」(新聞・雑誌) において *despite* が使用され、その後、話し言葉・書き言葉の両者において一般的に使用される「譲歩」の前置詞へと拡大していったと述べる。この種の指摘から、本研究で観察した動詞派生前置詞についても、同様の言語変化のシナリオが想定される。すなわち、動詞派生前置詞は、通時的には書き言葉を起源とし、形態的な簡素さをもつ *during, past* は話し言葉へも用法を拡大していったというものである。一方、その他の形態的 (音韻的に複数の音節からなる) *-ing* 形の動詞派生前置詞は、頻度は多くないものの書き言葉を中心に使用され、現代に至ったものと推測される。このように、動詞派生前置詞の用法にみられる共時的な分布は、菊地 (2014) が考察した言語変化にみられる傾向を支持するものと予想される。

第7章 結語

本研究では、文法化した英語動詞派生前置詞を、共時性・通時性、そして両者の接点としての汎時性の観点から規定してきた。本研究のアプローチは、動詞であるのか、前置詞であるのか、判別が難しい事例を検討することによって、文法的な言語変化の連続的なプロセスを意味論的・統語的に規定していく道筋を示した。本章は、本研究を総括し、英語学、言語学、文法化理論をはじめとする関連領域への位置づけを行い、貢献と意義、今後の課題を述べる。

7.1 総括

1章では、本研究の背景となる言語学、英語学、コーパス言語学、英語語法研究、といった研究文脈を述べた上で、分析対象とする動詞派生前置詞に関する論点をまとめた。動詞派生前置詞は、言語変化の研究においては文法化との関係から研究がなされており、(i) 文法書においても言及がなされていること、(ii) 動詞であるのか前置詞であるのか、品詞カテゴリー間の境界を定めるのが難しい事例であること、を述べた。本研究は意味論の中でも認知言語学の言語観に立脚し、英語語法研究、コーパス言語学などの関連分野の知見を参照しつつ、言語記述を踏まえた理論的なアプローチをとる。その上で、分析対象を明らかにし、論全体の構成についての概要を述べた。

2章では、本研究の理論的背景を述べた。本研究は、理論言語学、記述言語学、コーパス言語学、意味論、英語語法研究、言語変化、意味変化の研究（特に文法化研究）と関わっている。ここでは、理論的背景を概観し、(i) 話者の視点、捉え方 (construal) に基盤を置く認知言語学の言語観、(ii) 4章の前置詞性（前置詞としての典型性）に関わる議論に関わるプロトタイプ的な言語観、(iii) 再分析、音韻縮約（形態的に、簡素なものへとなくなっていくことを含む）、意味の漂白化、重層化、脱範疇化、といった文法化のメカニズム、(iv) 共時性・通時性のみならず、通時的な言語変化の結果としての「汎時性」をも包括的に規定していくというアプローチの方向性、(v) 文法化研究とコーパス言語学の親和性と言語データ、(vi) 意味変化における「(間)主観性 (Traugott 1982, 1988, 1989, 1995, 2003, 2011)」、について概観した。

3章では、2章を踏まえつつ、本研究の背景のうち分析対象となる動詞派生前置詞を議論の中心に据え、先行研究を概観した。まず、3.1節では、主に英語語法研究・英語学の観点から、20世紀の英語学を代表する2つの文法書 (Quirk *et al.* 1985, Huddleston and Pullum 2002) における動詞派生前置詞の記述を概観してきた。次に、それらの記述を文法化理論の観点から捉え直し、本研究における

主要な概念と論点を検討した。動詞か前置詞か、境界を曖昧とする動詞派生前置詞は、文法化という観点からは動詞から前置詞への連続的な品詞カテゴリー間の変化と位置づけられる。文法化においては、(i) 脱範疇化、(ii) 意味の漂白化、(iii) 重層化が問題となることを、先行研究 (Hopper 1991, Hopper and Traugott 2003) の *considering* の文法化に関する記述を概観しつつ述べた。その上で、4 章、5 章、6 章の各章における分析と関連づけ、本研究で取り組むべき課題と、各研究課に関する主要な先行研究を提示した。動詞派生前置詞は通時的な発達プロセスが異なるのに加え、言語変化の度合い (i.e. 文法化・漂白化の程度性) も異なるため共時的にも多様な分布をなしている (i.e. 重層化)。このことを踏まえ、共時性・通時性の両側面から分析を進めるという方針を示した。

4 章以降は具体的な事例分析である。4 章では共時的見地に立ち、動詞から前置詞へ段階的に文法化が進むものと想定し、「動詞であるのか、前置詞であるのか」というような二分法で議論することを避け、動詞派生前置詞の「前置詞性 (prepositionality)」「動詞性 (verbality)」を、コーパスを用いた定量的手法と英語母語話者の内省に基づく定性的手法に基づき規定した。前置詞性に関しては、先行研究および辞書より収集した 37 種類の動詞派生前置詞を分析対象として作例を行った: (i) 分裂文、(ii) 強意副詞 *right* との共起可能性 (Emonds 1976)。英語母語話者の内省により容認度を調査し、その結果に基づき前置詞性を算出した。分析の結果、*past, during, following, starting, regarding, according to, preceding, succeeding, including, pertaining to* を除く過半数以上の動詞派生前置詞は周辺的な前置詞と位置づけられた。この結果は、文法化の進行度に段階性がみられること、動詞派生前置詞が周辺的な事例であること、を示唆する。次に、定量的観点から、大規模コーパス COCA のデータを使用し、(iii) 前置詞随伴により前置詞性の推察を試みた先行研究 (Fukaya 1997) の追試を行った。結果、*during* を除く事例は殆ど随伴しない、という Fukaya (1997) を支持する結果が得られた。動詞性の観点からは、動詞の脱範疇化に着目し、動詞と副詞の共起関係が文法化に伴ってどのように変化していくか調査した。結果、*facing, lacking, owing to, preceding* は文法化しても副詞との共起関係が失われないうこと、*following* の文法化が進む「因果関係 (=because of)」の意味を持つようになると、時間的前後関係の意味を表す *following* のときに *immediately* との間にみられた共起関係が失われていくこと、が判明した。このことから、文法化に伴い *minor category* へと品詞カテゴリーが変化していくに従って、動詞語幹の意味だけでなく、副詞との修飾関係にも変化がみられると考察した。

5 章では、先行研究において研究がなされていない動詞派生前置詞 *excluding, preceding, barring, respecting* の通時的变化を記述し、文法化のプロセスを検討した。本研究では、(i) Mair (2004) に基

づき OED を言語データとし、(ii) *-ing* 分詞の品詞的振る舞いを、脱範疇化のクライン (Hopper and Traugott 2003) に基づき分類する、という一貫した方針により統一的記述を試みた。*excluding* については、19 世紀頃より動詞派生前置詞 *including* との等位接続がみられ、対称的に用いられる場面があったこと、意味上の主語が明示されない、いわゆる懸垂分詞的な用法が 19 世紀後半よりみられるようになり 20 世紀を通して段階的に *minor category* へと範疇が変わっていったこと、を指摘した。*preceding* は、形容詞的用法が大多数を占めたまま現在に至り、懸垂分詞的用法をとらず 20 世紀後半に前置詞化した *following* と非対称をなすこと、その一方で現代英語においては文法化しつつあること、を指摘した。次に *barring* について、COHA のデータも参照し、分詞由来である *considering*, *concerning* と同じ文法化の経路 (cf. 秋元 2002) を辿ったと仮定した上で、文頭に生起するようになった 19 世紀後半から 20 世紀前半の時期にさらに文法化が進み、前置詞化が進んだことを指摘した。*respecting* の考察では、文法化した用法が後期近代英語期に観察されること、20 世紀になり観察されなくなったことを指摘し、「主観化 (Traugott 1989)」の事例に当てはまると考察した。以上、4 つの動詞派生前置詞の文法化プロセスと程度性を比較し、それぞれの事例に固有のプロセスが観察された。こうした相違は、動詞が本来表す意味内容や、類似した意味を表す前置詞との競合など、様々な要因が影響したものと考えられる。

6 章は、それまでに行った分析を引き継ぎ、現代英語に立ち返り、動詞派生前置詞の生起ジャンルを分析した。まず、イギリス英語について、5 章で行った文法化の「脱範疇化のクライン」(Hopper and Traugott 2003) に基づく品詞分類を援用し、2 つの事例研究を行った。第一に、*considering* の前置詞的用法、接続詞的用法に着目し、前者が書き言葉、後者が話し言葉に生起することを指摘した。第二に、重層化の観点から *but*, *except*, *barring*, *excluding*, *saving* と多くの事例が存在する「除外」の前置詞のうち、頻度が低く周辺的な *barring*, *excluding*, *saving* の文法化した用法が書き言葉において使用される傾向を持つと考察した。次に、アメリカ英語について、4 章で検討した随伴した動詞派生前置詞の生起ジャンルを検討し、書き言葉において使用される傾向を持つと明らかにした。頻度が高い *during*, *according to* は話し言葉においても使用されていることから、発達初期の段階では「簡潔さ」が重視される「ジャーナリズムの英語」(新聞・雑誌)において使用され、その後話し言葉へも発達した「譲歩」の前置詞 *despite* (菊地 2014) の 20 世紀の発達と類似した言語変化のプロセスを経たのではないかと予測を立てた。以上の考察を通し、動詞派生前置詞の生起傾向は、初期近代英語期、書き言葉における必要性から発達した前置詞の影響があると指摘した (Görlach 1991: 108-

110)。すなわち、初期近代英語期に前置詞全般が発達し、頻度の高い *of, by, about* などの前置詞は書き言葉、話し言葉の区別を問わず広く使用された一方、動詞派生前置詞は書き言葉を中心に使用され両者の棲み分けがなされつつ発達したと推定した。

7.2 本研究の意義と貢献

1990年以降、コーパスの発達によりデータの質的・量的分析が可能となり、文法化研究は飛躍的に盛んとなった(秋元 2002, 2011; 秋元 編 2001, 秋元・保坂 編 2005)。コーパス言語学を基盤とする動詞派生前置詞の研究は、Fukaya (1997), 川端 (2001), 児馬 (2001), 秋元 (2002, 2014), 内田 (2003), Mair (2004) などがある。これらの記述的手法に、意味論的アプローチの融合を目指す本研究は、いわば「文法化研究の意味論的見直し」と位置づけることができる。前置詞という文法カテゴリーに対し、五感・体感・運動という経験的基盤を考慮に入れた意味論的アプローチ (cf. 山梨 2000) は、動詞の意味的性質から変化の傾向を浮き彫りにし、文法化の一方方向性仮説への制約、意味変化の微細な揺らぎ、意味の背景的起源へと迫る視座を提供しうる。

本研究は、文法化、言語変化の研究において、以下の点で特徴的である。動詞派生前置詞の先行研究として、(i) Kortmann and König (1992) は、ゲルマン語・ロマンス語からの通言語的データに基づき歴史的発達を考察し、(ii) Fukaya (1997) は、語彙項目から統語的・形態的機能へと文法化した *-ing* という形式が、文法化前の用法と共存しているという事実をコーパス言語学の立場から記述している。しかし、両者において、脱範疇化と意味的漂白化の定量的・定性的相関については十分に検討されていない。本研究は、「動詞性」「前置詞性」という文法化の始点・終点、いわば「文法化の両極」から、コーパスを用いた定量的手法と英語母語話者の内省に基づく定性的手法の融合的アプローチによって、品詞的特質の段階的・連続的变化を統語的・意味論的に規定していくという点で独創性をもつ。

本研究の関連分野への貢献として、英語教育の分野からは、教材作りを見据えた言語記述という点で期待される。英語教育を担当する日本人教員にとって、学習者が理解し損ねた場合や、フィードバックを行う指導者としての立場を考慮すると、母語である日本語を用いた英語の説明・記述が必要である (cf. 松井 2012)。本研究においては、英語教育への応用を念頭に記述を行い、5章における「脱範疇化のクライン」の品詞分類にあたっては、記述文法 (安藤 2005, Quirk *et al.* 1985, Huddleston and Pullum 2002) のみならず、学習英文法における必携の書である江川 (1991) の記述も

踏まえ、言語事例を交えて議論を構築した。脱範疇化のクラインは、言語分析の枠組みだけに留まらず、内容語・機能語の概念とも関連づけ、意味・発音上の特徴を含めた包括的な品詞体系の提示を可能とする枠組みとなることが期待される (cf. 林 2017b)。林 (2017b) は、この枠組みを英文法における品詞分類に留まらず、内容語・機能語の概念と、英語の発音にみられる強勢の傾向を関連づけて提示した結果、英語を苦手とする受講生に明瞭性・簡明性の観点で支持を受けた。この種の試みを通し、英語教育への活用を模索していくことも貢献が待たれる。

7.3 展望

本研究は、言語変化における文法化を、短期間のスパンにおいて発現する認知能力という共時的観点から捉えるだけでなく、世代を超えて、レジスター、語用論的慣習化などの社会現象におけるダイナミックな揺らぎの中における通時的観点からも捉えることによって、個人における言語学的要因のみに留まらず、社会学的・集団心理的要因に基づく文法化の共時的・通時的相互作用におけるメカニズムを明らかにすることができると考える。分析の深化を通し、認知科学の一分野としての言語学の観点から、人間の知の本質に迫る示唆的な見解を与えうると予想される。

今後の共時的・通時的観点からの言語分析における展望として、以下の方向性が考えられる。

まず共時的には、前置詞性・動詞性を評価するコーパス調査、英語母語話者への調査を行うことにより分析の精緻化が可能であろう。

- (1) a. There was a very awkward silence *during which* we locked eyes. (COCA)
b. He made me a communication concerning / which concerned my friend. (石橋他 編 1961: 26)

例えば、前置詞交替 (Hoffman 2011)、の観点から動詞派生前置詞 37 例の分析を行い、(1a) などの前置詞随伴の事例を抽出し、前置詞残留を起すか否か、テストを行う (通例、前置詞は随伴するものの、残留しない傾向がある; Hoffman 2011)。動詞性の観点からは、接続詞 (または関係代名詞) の導く構文で言い換えることが可能か、などの作例による調査を行う。(1b) のように書き換えが可能であれば、動詞性が高いと判定することができる。

通時的には、近代英語期における文体の発達など、言語変化の誘因となる英語史上の歴史的背景との関連を考慮した分析が期待される (秋元 2002: 190)。例えば、(i) 中英語期におけるフランス語

からの借用語、懸垂分詞構文の発達 (cf. 中尾 1972、Rissanen 2000)、(ii) 近代英語期には 15 世紀の活版印刷の発明、Dryden らの反対論、規範文法などの前置詞随伴・懸垂分詞構文などへの影響を考慮し、中英語後期の書き言葉における *of, by, about* などの前置詞との発達と、動詞派生前置詞の通時的変化との関係を検討していく必要がある (川端 2001 寺澤 2008、堀田 2016)。検討すべき要因として、17 世紀初期よりみられたが、Dryden らの反対論により徐々に減少し、その後復活した前置詞残留の変遷による影響 (荒木・宇賀治 1984: 522) などが挙げられる。(iii) 現代英語においては、Sweet, Curme, Poutsma, Jespersen などの記述を踏まえつつ、現代英語の接点を念頭に検討を進める必要があるだろう (菊地 2014)。さらに、言語データとして、Mair (2004) 以降に発達した言語コーパスを検討することによって、より詳細なデータの検討が可能になるだろう。具体的には、共時コーパスとして COCA, BNC, 通時コーパスとして COHA, Corpus of Late Modern English (CLMETEV), Helsinki Corpus (HC), Early English Books Online (EEBO), Dictionary of Old English Corpus (DOEC), さらに辞書として OED, Middle English Dictionary (MED) などを用いた分析も必要である (Traugott and Trousdale 2013: 42-43)。

また、理論言語学一般への貢献も期待される。本研究は英語学の領域に位置づけられるものの、Kortmann and König (1992) が指摘するように、通時的に動詞由来の前置詞は諸言語において観察され、「具体→抽象」の意味変化にも共通性をもつ。例えばラテン語 *iuxta*, 英語 *pertaining to* には「結合・拡大→空間、話題・関連」という意味変化の共通性がある (Kortmann and König 1992: 689)。この種の類似性は、言語類型が異なる日本語・英語にも観察され、英語動詞派生前置詞 *touching*, 日本語後置詞「について」には「接触 (CONTACT)→関連 (ABOUTNESS)」という共通の意味変化がみられる (Matsumoto 1998)。 *touching*, 「について」は、(i) 脱範疇化、(ii) 漂白化、という点で共通性がみられる。共時的・通時的に文法化を検討することにより、日英対照のみならず言語類型論における貢献も期待できる。また、*during* の文法化は、近年、構文化の観点からも検討が行われている (Trousdale 2013)。また、早瀬 (2013, 2016a, 2016b) は、2.5 節で概観した *considering* などの懸垂分詞構文の拡張的な用法を、(i) 構文化という理論的観点、(ii) 日本語における「考えてみると」「考えてみたら」「考えてみたら」といった日本語の接続形式との対照、を通して考究している。本研究においても、この種の理論的・類型的観点からのさらなる発展が期待される。

最後に、英語教育面においては、次の展望が挙げられる。八木 (2007: 170-179) は、現在のわが国 (日本) における英語教材には、20 世紀前半に書かれた記述に基づくものが存在し、21 世紀の現代

英語を反映していないものがあると指摘する。八木 (2007) は、最新の言語研究を踏まえ、現代英語の実態とは異なる記述を精査・刷新する必要性を説く。この指摘に応える言語変化に基づく英語研究として、菊地 (2014, 2015) が挙げられる。菊地 (2014, 2015) は、まず、コーパスに基づく言語研究を通し、現代英語で「譲歩」を表す際には *despite* が高頻度となると示した。次に JEFLL などの学習者コーパスを用いた調査を行い、日本人英語学習者は現代英語で頻度が極めて低い *in spite of* などの前置詞を過剰使用し、前置詞の使用時には 20%以上の頻度で誤りを犯す傾向があると述べ、教材改訂の必要性を述べている。動詞派生前置詞という周辺の前置詞の共時的・通時的記述を通し、将来の英語教材作成の基盤となる英語研究を蓄積していくことが期待される。

Appendix 1 前置詞性の作例テスト

4.2 節において行った、前置詞性を測定する作例テストを収録する。(A1)-(A37) は、先行研究及び辞書から収集した例文である。以下の動詞派生前置詞 (1) を含む例文は、林 (2013a: 64-67) において収集された例文である。以下、林 (2013a) において収集・検討された英文は、その旨を記した。(1) に含まれており林 (2013a) において検討を行った事例についても、一部は例文を新たに追試を行った (この場合は、林 2013a の該当頁数を記していない)。

- (1) *allowing for, barring, concerning, confronting, considering, covering, during, excluding, excepting, facing, failing, following, given, granted, including, lacking, notwithstanding, owing to, past, pending, preceding, regarding, respecting, rising, saving, starting, touching, wanting* (林 2013a: 3)

本研究の位置づけは、(1) の例文について、林 (2013) より多くの英語を母語とする話者に作例テストの結果を調査し、再検証を行ったことにある。調査においては、新たに *according to, bar, bating, depending on, except, granting, pertaining to, related to, save, succeeding* の 10 例を分析対象に加えた。先行研究及び辞書に例文の記述がない *granting, preceding, succeeding, touching, wanting* の例文は作例である。*bating* に関しては、Poutsma (1926) の例文 (A5) に加え、作例 (A5') による調査を行った。*rising* については、本調査に際し、母語話者に容認されなかったため対象から除外した。

- (A1) You've been absent six times *according to* our records. (OALD)
- (A2) It will take about an hour to get there, *allowing for* traffic delays. (OALD; 林 2013a: 64)
- (A3) The students all attended, *bar* two who were ill. (OALD)
- (A4) *Barring* accidents, we should arrive on time. (OALD; 林 2013a: 64)
- (A5) *Bating* a little wilfulness, I don't know a more honest or gentle creature.
(THACK, Pend., II, Ch. XVI, 163.; cited from Poutsma 1926: 712)
- (A5') *Bating* accidents, we should arrive on time. ((A4) より作例)
- (A6) He asked me *concerning* my health. (Zandvoort 1972: 35; 林 2013a: 64)
- (A7) Drug abuse is one of the problems *confronting* modern Western society.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 64)

- (A8) *Considering* his age, he looks very young. (安藤 2005: 622)
- (A9) The remainder will be paid in installments *covering* a period of five years.
(英和活用大辞典; 林 2013a: 64)
- (A10) Prices vary widely *depending on* where you live. (OBED)
- (A11) He was taken to the hospital *during* the night. (OALD)
- (A12) We work every day *except* Sunday. (OALD)
- (A13) Everyone was present, not *excepting* Tom. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- (A14) Lunch costs £10 person, *excluding* drinks. (OALD; 林 2013a: 65)
- (A15) With some dealers *facing* decreasing sales, something's got to give.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- (A16) *Failing* instructions, I did what I thought best. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- (A17) Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 29; 林 2013a: 65)
- (A18) *Given* the present conditions, I think she's done rather well.
(Quirk *et al.* 1985: 660; 林 2013a: 65)
- (A19) *Granted* his obsequious manner, I still think he's ambitious enough to do the job.
(Quirk *et al.* 1985: 667)
- (A20) *Granting* his age, he looks very young. ((A8) より作例; cf. Declerck 1991: 43)
- (A21) I've got three days' holiday *including* New Year's Day. (OALD; 林 2013a: 65)
- (A22) He was a wild young man, completely *lacking* reserve. (英和活用大辞典; 林 2013a: 66)
- (A23) He is very active *notwithstanding* his age. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 66)
- (A24) The game was cancelled *owing to* torrential rain. (OALD)
- (A25) He hurried *past* them without stopping. (OALD)
- (A26) Research was underway *pending* formal approval. (英和活用大辞典; 林 2013a: 66)
- (A27) He offered information *pertaining to* the accident. (英和活用大辞典)
- (A28) He talked of the time *preceding* the tragedy.
(英和活用大辞典の英文から作例; 林 2013a: 66)
- (A29) She has said nothing *regarding* your request. (OALD)
- (A30) The results included \$5 million pre-tax charge *related to* workforce reductions. (OBED)

- (A31) I am writing to make an inquiry *respecting* the necessary procedures for becoming a member of your society. (英和活用大辞典; 林 2013a: 67)
- (A32) We know nothing about her *save* her name. (OALD; 児馬 2001: 77)
- (A33) *Saving* your presence I don't think the suggestion is very sensible. (LDCE; 児馬 2001: 78)
- (A34) *Starting* today Miss Carey will be in charge of the Sales Department. (LLA; 林 2013a: 67)
- (A35) Dickens died in 1870 *succeeding* a collapse. ((A17) より作例)
- (A36) She has said nothing *touching* your request. ((A29)より作例; cf. 安藤 2005: 652)
- (A37) Tom gave me a book *wanting* a cover. (作例; cf. リーダーズ英和辞典; 林 2013a: 67)

4.2.1 節で行った分析において、例文 (A1)-(A37) より例文 (B1)-(B37) の作例を行った。この作例における詳細なプロセスは、4 章を参照のこと。

- (B1) It is *according to* our records that you've been absent six times.
- (B2) It will be *allowing for* traffic delays that it will take about an hour to get there.
- (B3) It was *bar* two who were ill that the students all attended.
- (B4) It is *barring* accidents that we should arrive on time.
- (B5) It is *bating* a little wilfulness that I don't know a more honest or gentle creature.
- (B5') It is *bating* accidents that we should arrive on time.
- (B6) It was *concerning* my health that he asked me.
- (B7) It is *confronting* modern Western society that drug abuse is one of the problems.
- (B8) It is *considering* his age that he looks very young.
- (B9) It will be *covering* a period of five years that the remainder will be paid in installments.
- (B10) It is *depending on* where you live that prices vary widely.
- (B11) It was *during* the night that he was taken to the hospital.
- (B12) It is *except* Sunday that we work every day.
- (B13) It is not *excepting* Tom that everyone is present.
- (B14) It is *excluding* drinks that Lunch costs \$10 person.
- (B15) It was *facing* decreasing sales that with some dealers, something's got to give.

- (B16) It was *failing* instructions that I did what I thought best.
- (B17) It was *following* a collapse that Dickens died in 1870.
- (B18) It is *given* the present conditions that I think she's done rather well.
- (B19) It is *granted* his obsequious manner that I still think he's ambitious enough to do the job.
- (B20) It is *granting* his age that he looks very young.
- (B21) It is *including* New Year's Day that I've got three days' holiday.
- (B22) It was *lacking* reserve that he was a wild young man.
- (B23) It is *notwithstanding* his age that he is very active.
- (B24) It was *owing to* torrential rain that the game was cancelled.
- (B25) It was *past* them that he hurried without stopping.
- (B26) It was *pending* formal approval that research was underway.
- (B27) It was *pertaining to* the accident that he offered information.
- (B28) It was *preceding* the tragedy that he talked of the time.
- (B29) It is *regarding* your request that she has said nothing.
- (B30) It was *related to* workforce reductions that the results included a \$5 million pre-tax charge.
- (B31) It is *respecting* the necessary procedures for becoming a member of your society that I am writing to make an inquiry.
- (B32) It is *save* her name that they know nothing about her.
- (B33) It is *saving* your presence that I don't think the suggestion is very sensible.
- (B34) It will be *starting* today that Miss Carey will be in charge of the Sales Department.
- (B35) It was *succeeding* a collapse that Dickens died in 1870.
- (B36) It was *touching* your request that she has said nothing.
- (B37) It was *wanting* a cover that Tom gave me a book.

4.2.2 節で行った分析において、例文 (A1)-(A37) より例文 (C1)-(C37) の作例を行った。この作例における詳細なプロセスは、4 章を参照のこと。

- (C1) You've been absent six times right *according to* our records.

- (C2) It will take about an hour to get there, right *allowing for* traffic delays.
- (C3) The students all attended, right *bar* two who were ill.
- (C4) Right *barring* accidents, we should arrive on time.
- (C5) Right *bating* a little wilfulness I don't know a more honest or gentle creature.
- (C5') Right *bating* accidents, we should arrive on time.
- (C6) He asked me right *concerning* my health.
- (C7) Drug abuse is one of the problems right *confronting* modern Western society.
- (C8) Right *considering* his age, he looks very young.
- (C9) The remainder will be paid in installments right *covering* a period of five years.
- (C10) Prices vary widely right *depending on* where you live.
- (C11) He was taken to the hospital right *during* the night.
- (C12) We work every day right *except* Sunday.
- (C13) Everyone is present, not right *excepting* Tom.
- (C14) Lunch costs \$10 person, right *excluding* drinks.
- (C15) With some dealers right *facing* decreasing sales, something's got to give.
- (C16) Right *failing* instructions, I did what I thought best.
- (C17) Dickens died in 1870 right *following* a collapse.
- (C18) Right *given* the present conditions, I think she's done rather well.
- (C19) Right *granted* his obsequious manner, I still think he's ambitious enough to do the job.
- (C20) Right *granting* his age, he looks very young.
- (C21) I've got three days' holiday right *including* New Year's Day.
- (C22) He was a wild young man, right *lacking* reserve.
- (C23) He is very active right *notwithstanding* his age.
- (C24) The game was cancelled right *owing to* torrential rain.
- (C25) He hurried right *past* them without stopping.
- (C26) Research was underway right *pending* formal approval.
- (C27) He offered information right *pertaining to* the accident.
- (C28) He talked of the time right *preceding* the tragedy.

- (C29) She has said nothing right *regarding* your request.
- (C30) The results included a \$5 million pre-tax charge right *related to* workforce reductions.
- (C31) I am writing to make an inquiry right *respecting* the necessary procedures for becoming a member of your society.
- (C32) We know nothing about her right *save* her name.
- (C33) Right *saving* your presence I don't think the suggestion is very sensible.
- (C34) Right *starting* today Miss Carey will be in charge of the Sales Department.
- (C35) Dickens died in 1870 right *succeeding* a collapse.
- (C36) She has said nothing right *touching* your request.
- (C37) Tom gave me a book right *wanting* a cover.

Appendix 2 動詞性の作例テスト

4.4 節において行った、動詞性を測定する作例テストを以下に収録する。林 (2013a) 収録の英文はその旨を記した。作例の対象となった文は (a), 副詞と動詞の共起関係を表す文が (b), 作例により共起関係の変化を確認した文が (c) である。出典を記していないものは作例である。また、*during*, *excepting*, *notwithstanding*, *past*, *pending* は動詞語幹と共起する副詞が検出されなかったため、調査を行った文の結果を記す。なお、*lacking* は既に *completely* と、*preceding* は *immediately* の共起例がみられたため、*completely*, *preceding* を除去した英文が容認されるかを確認した。*notwithstanding* は *clearly* と、*past* は *quickly* との共起関係を作例により調査したが、容認度が下がることを確認した。

- (D1) a. It will take about an hour to get there, *allowing for* traffic delays. (OALD; 林 2013a: 64)
b. The shield, the officials said, would theoretically allow for 24-hour coverage of the globe, including the chance of knocking down missiles while they are still boosting -- and therefore highly vulnerable -- without having to station equipment near the launching site. (COCA)
c. ?It will take about an hour to get there, *theoretically allowing for* traffic delays.
- (D2) a. *Barring* accidents, we should arrive on time. (OALD; 林 2013a: 64)
b. They *immediately barred* him from the casino.
c. **Immediately barring* accidents, we should arrive on time.
- (D3) a. He asked me *concerning* my health. (Zandvoort 1972: 35; 林 2013a: 64)
b. Get these people talking about things that don't *directly concern* their part of the plot. (COCA)
c. * He asked me *directly concerning* my health.
- (D4) a. Drug abuse is one of the problems *confronting* modern Western society.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 64)
b. ?Drug abuse is one of the problems *directly confronting* modern Western society.
c. We must *directly confront* our responsibilities.
- (D5) a. She looks young *considering* her age. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 64)
b. It is necessary to *carefully consider* many issues related to implementation in a specific context.
(COCA)
c. *She looks young *carefully considering* her age.

- (D6) a. The remainder will be paid in installments *covering* a period of five years.
(英和活用大辞典; 林 2013a: 64)
- b. Tom doesn't *exactly cover* it. (COCA)
- c. *The remainder will be paid in installments *exactly covering* a period of five years.
- (D7) a. I was in (the) hospital for two weeks *during* the summer.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 64)
- c. *I was in (the) hospital for two weeks *exactly during* the summer.
- (D8) a. Lunch costs £10 person, *excluding* drinks. (OALD; 林 2013a: 65)
- b. ?Lunch costs £10 person, *explicitly excluding* drinks.
- c. *We explicitly exclude* the news but as the technologies develop... (COCA)
- (D9) Everyone was present, not *excepting* Tom. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- (D10) a. With some dealers *facing* decreasing sales, something's got to give.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- b. We've got to pay attention to the circumstances we *currently face*. (COCA)
- c. With some dealers *currently facing* decreasing sales, something's got to give.
- (D11) a. *Failing* instructions, I did what I thought best.
- a.' You can find him in the room or *failing* that, try the garden.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 65)
- b. Now, up to this point talks have *completely fail* and the White House is fed up. (COCA)
- c. **Completely failing* instructions, I did what I thought best.
- c'. ?You can find him in the room or *completely failing* that, try the garden.
- (D12) a. Dickens died in 1870 *following* a collapse. (Radden and Dirven 2007: 29; 林 2013a: 65)
- b. Most of its sales will *directly follow* Karol's college appearances. (COCA)
- c. Dickens died in 1870 *directly following* a collapse.
- (D13) a. *Given* the present conditions, I think she's done rather well.
(Quirk *et al.* 1985: 660; 林 2013a: 65)

- b. While a typical pill might expire after 10 years, deadhand pills have “continuing directors” provisions that *explicitly give* the directors who installed the pill or their handpicked successors the authority to remove the pill. (COCA)
- c. ?*Explicitly given* the present conditions, I think she’s done rather well.
- (D14) a. *Granted* his sincerity, he may be mistaken.
(<http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/ej3/37042/m0u/>; 2013/04/24 アクセス)
- b. Last year, when the congregation *generously granted* me time to spend six weeks “immersed” in a Mexican language school, the experience transformed my life. (COCA)
- c. **Generously granted* his sincerity, he may be mistaken.
- (D15) a. I’ve got three days’ holiday *including* New Year’s Day. (OALD; 林 2013a: 65)
- b. These treatments *typically include* psychotherapy, a drug, or what amounts to a placebo, such as supportive counseling during a waiting period. (COCA)
- c. *I’ve got three days’ holiday *typically including* New Year’s Day.
- (D16) a. He was a wild young man, completely *lacking* reserve. (英和活用大辞典; 林 2013a: 66)
- b. He was a wild young man, completely *lacking* reserve.
- c. They *completely lack* the organ to pick up the essential signals. (COCA)
- (D17) a. He is very active *notwithstanding* his age. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 66)
- c. ?He is very active *clearly notwithstanding* his age.
- (D18) a. In the end I was unable to attend the conference, *owing to* financial difficulties.
(LLA; 林 2013a: 66)
- b. In this situation, feminist NGOs *largely owe* their survival to the work they carry out for governments, including research and project implementation. (COCA)
- c. In the end I was unable to attend the conference, *largely owing to* financial difficulties.
- (D19) a. He is *past* forty. (ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 66)
- c. *He is *quickly past* forty.
- (D20) Research was underway *pending* formal approval. (英和活用大辞典; 林 2013a: 66)
- (D21) a. He talked of the time *immediately preceding* the tragedy.
(英和活用大辞典; 林 2013a: 66)

- c. First, clitics often *immediately precede* the finite verb of the sentence, as in (1) above. (COCA)
- (D22) a. If you have any questions *regarding* this order, please e-mail us at orders@ABC.com.
(ジーニアス英和大辞典; 林 2013a: 66)
- b. Most adolescents and those nearing that stage of life are well aware that adults usually regard them as kids. (COCA)
- c. *If you have any questions *usually regarding* this order, please e-mail us at orders@ABC.com.
- (D23) a. *Respecting* their daughter's (dying) wishes, the family agreed to the donation of her organs.
(新和英大辞典; 林 2013a: 67)
- b. And hard workers *usually respect* each other because they are a select breed. (COCA)
- c. **Usually respecting* their daughter's (dying) wishes, the family agreed to the donation of her organs.
- (D24) a. He is nine, *rising* ten. (安藤 2005: 622; 林 2013a: 67)
- b. The junk problem at most colleges doesn't *usually rise* to that level of drama. (COCA)
- c. *He is nine, *usually rising* ten.
- (D25) a. The stocks could be further processed *saving* purchases of £5,000. (BNC; 林 2013a: 67)
- b. Would we *actually save* 25 percent? (COCA)
- c. ?The stocks could be further processed *actually saving* purchases of £5,000.
- (D26) a. *Starting* today Miss Carey will be in charge of the Sales Department. (LLA; 林 2013a: 67)
- b. Experiments *typically start* with the excitation of an ensemble of molecules by a femtosecond laser pulse. (COCA)
- c. **Typically starting* today Miss Carey will be in charge of the Sales Department.
- (D27) a. He made discoveries *touching* the neglected traditions of the London Boroughs.
(作例; cf. ODE; 林 2013a: 67)
- b. The FAST Biosociety programme I can only *briefly touch* upon the FAST Biosociety findings. (COCA)
- c. ?He made discoveries *briefly touching* the neglected traditions of the London Boroughs.
- (D28) a. Tom gave me a book *wanting* a cover. (作例; cf. リーダーズ英和辞典; 林 2013a: 67)
- b. But it's better to have players who are motivated and *really want* to play for this club. (COCA)

- c. *Tom gave me a book *really wanting* a cover.

Appendix 3 文法化した *considering* の生起ジャンル

表1 文頭に生起する *considering* の分類と事例数

一次分類(事例数)	割合 (%)	二次分類(事例数)	割合 (%)
前置詞 (102)	59.0	主語一致 (28)	16.2
		主語不一致 (73)	42.2
		不明 (1)	0.6
接続詞 (54)	31.2	that節 (29)	16.8
		how節 (5)	2.9
		that省略 (20)	11.6
その他 (12)	6.9	前置詞／接続詞 (1)	0.6
		動名詞 (9)	5.2
		一語文 (2)	1.2
不明 (5)	2.9		2.9
173	100.0		100.0

表2 BNC コーパス全体のジャンルとレジスターにおける分布

	総数	割合 (%)
アカデミック	15331667	15.9
非学術	16495185	17.1
雑誌	7261990	7.5
新聞	10466422	10.9
フィクション	15909312	16.5
雑多	20835159	21.6
話し言葉	9963662	10.4
合計	96263399	100.0

表3 文頭に生起する *considering* のジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数						
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類			
書き言葉	アカデミック	社会科学		168	35	15	15			
		自然科学				8	8			
		人文学				7	7			
		工学				7	7			
		医学				6	6			
		政治学・法学・教育				3	3			
	非学術	社会科学				7	7			
		自然科学				11	11			
		人文学				10	10			
		工学				1	1			
		医学				2	2			
		政治学・法学・教育				4	4			
	雑誌					19	19	19		
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし							2
			スポーツ							1
			芸術							1
			商業				5		1	
		タブロイド					1		1	
		他	スポーツ							5
		報道							3	
		社会							1	
	フィクション	散文							7	7
		なし							18	11
雑多	生活・雑多・暮らし					14	14			
	伝記物・随筆					8	8			
	宗教					8	8			
	商業					4	4			
	説明文					1	1			
話し言葉	話し言葉	インタビュー				2	2			
		会議				1	1			
		会話				1	1			
		未分類				1	1			
合計					173	173				

表4 *considering* の接続詞用法に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数						
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類			
書き言葉	アカデミック	社会科学		51	10					
		自然科学				3	3			
		人文学				3	3			
		工学								
		医学								
		政治学・法学・教育				7	1	1		
	非学術	社会科学				1	1			
		自然科学				3	3			
		人文学				1	1			
		工学				1	1			
		医学				1	1			
		政治学・法学・教育				10	3	3		
	雑誌					9	9	9		
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし							2
			スポーツ							1
			芸術						4	
			商業							
		タブロイド						1		1
		他	スポーツ							2
		報道							1	
		社会					9	4	1	
	フィクション	散文							2	2
		なし					6	4	4	
雑多	生活・雑多・暮らし					5	5			
	伝記物・随筆					3	3			
	宗教									
	商業					1	1			
	説明文					1	1			
話し言葉	話し言葉	インタビュー								
		会議			1	1	1			
		会話			1	1	1			
		未分類			3	1	1	1		
合計				54	54	54	54			

表5 *considering* の前置詞用法に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数						
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類			
書き言葉	アカデミック	社会科学		102	23	14	14			
		自然科学				5	5			
		人文学				4	4			
		工学				6	6			
		医学				5	5			
		政治学・法学・教育				34				
	非学術	社会科学				5	5			
		自然科学				8	8			
		人文学				8	8			
		工学								
		医学				1	1			
		政治学・法学・教育				23	1	1		
	雑誌					10	10	10		
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし							
			スポーツ							
			芸術							
		商業								
	タブロイド									
	他	スポーツ						1		
		報道						2		
		社会				3	3			
	フィクション	散文						5	5	
		なし					9	4	4	
雑多	生活・雑多・暮らし				9	9				
	伝記物・随筆				5	5				
	宗教				7	7				
	商業				2	2				
	説明文									
話し言葉	話し言葉	インタビュー								
会議										
会話										
未分類										
合計				102	102	102	102			

表6 *considering* の接続詞用法 (*that* 節が共起) に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数					
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類		
書き言葉	アカデミック	社会科学							
		自然科学				3	3		
		人文学					3	3	
		工学							
		医学							
		政治学・法学・教育				6			
	非学術	社会科学					1	1	
		自然科学					2	2	
		人文学					1	1	
		工学					1	1	
		医学					1	1	
		政治学・法学・教育				8	2	2	
	雑誌					5	5	5	
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし						
			スポーツ						
			芸術						1
			商業					1	
	タブロイド								
	他		スポーツ						
			報道						
	社会								
	フィクション	なし	散文						
			なし						
雑多		生活・雑多・暮らし							
		伝記物・随筆				5	5		
		宗教				2	2		
		商業				1	1		
		説明文				1	1		
				29	9	1	1		
話し言葉	話し言葉	インタビュー							
		会議							
		会話							
		未分類							
合計				29	29	29	29		

表7 *considering* の接続詞用法 (*how* 節が共起) に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数				
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	
書き言葉	アカデミック	社会科学		5	5	5	5	
		自然科学						
		人文学						
		工学						
		医学						
		政治学・法学・教育						
	非学術	社会科学						
		自然科学						
		人文学						
		工学						
		医学						
		政治学・法学・教育	1					1
	雑誌							
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし					
			スポーツ					
			芸術					
		商業						
	タブロイド		1					1
	他	スポーツ						
		報道						
	社会	2	1					1
	フィクション	散文						
		なし						1
雑多	生活・雑多・暮らし							
	伝記物・随筆		1	1				
	宗教							
	商業							
	説明文		5	1				
話し言葉	話し言葉	インタビュー						
		会議						
		会話						
		未分類						
合計				5	5	5	5	

表8 *considering* の接続詞用法 (*that* 省略) に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数								
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類					
書き言葉	アカデミック	社会科学		17	4	4	4					
		自然科学										
		人文学										
		工学										
		医学										
		政治学・法学・教育						1	1	1		
	非学術	社会科学										
		自然科学						1	1			
		人文学										
		工学										
		医学										
		政治学・法学・教育						1				
	雑誌								4	4	4	
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし									2
			スポーツ									1
			芸術									
			商業							3		
		タブロイド										
		他	スポーツ									2
		報道									1	
		社会							6	3		
	フィクション	散文									2	2
		なし							5	3	3	
雑多	生活・雑多・暮らし											
	伝記物・随筆											
	宗教											
	商業											
	説明文											
話し言葉	話し言葉	インタビュー										
		会議			1	1	1					
		会話			1	1	1					
		未分類			3	1	1	1				
合計				20	20	20	20					

表9 *considering* の前置詞用法（主語一致）に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数					
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類		
書き言葉	アカデミック	社会科学		28	10	2	2		
		自然科学				1	1		
		人文学							
		工学				2	2		
		医学				1	1		
		政治学・法学・教育				6			
	非学術	社会科学							
		自然科学							
		人文学				4	4		
		工学							
		医学				1	1		
		政治学・法学・教育				5			
	雑誌					2	2	2	
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし						
			スポーツ						
			芸術						
			商業						
		タブロイド							
		他	スポーツ						
	フィクション	散文					1	1	
		なし					5	4	4
	雑多	生活・雑多・暮らし					2	2	
		伝記物・随筆					4	4	
		宗教					3	3	
		商業					1	1	
		説明文							
	話し言葉	話し言葉	インタビュー						
			会議						
会話									
未分類									
合計				28	28	28	28		

表10 *considering* の前置詞用法（主語不一致）に関するジャンルとレジスターにおける分布

ジャンル・レジスター名				用例数						
一次分類	二次分類	三次分類	四次分類	一次分類	二次分類	三次分類	四次分類			
書き言葉	アカデミック	社会科学		73	73	12	12			
		自然科学				4	4			
		人文学				4	4			
		工学				3	3			
		医学				4	4			
		政治学・法学・教育				27				
	非学術	社会科学				5	5			
		自然科学				7	7			
		人文学				5	5			
		工学								
		医学								
		政治学・法学・教育				18	1	1		
	雑誌					8	8	8		
	新聞	ブロードシート	生活・雑多・暮らし				3	3		
			スポーツ							
		芸術								
		商業								
	タブロイド									
	他	スポーツ							1	
		報道							2	
			社会							
	フィクション	散文							4	4
		なし					4			
雑多	生活・雑多・暮らし					7	7			
	伝記物・随筆					1	1			
	宗教					4	4			
	商業					1	1			
	説明文			13						
				73						
話し言葉	話し言葉	インタビュー								
		会議								
		会話								
		未分類								
合計				73	73	73	73			

参考文献

- 秋元実治（編）2001. 『文法化: 研究と課題』 東京: 英潮社.
- 秋元実治. 2002. 『文法化とイディオム化』 東京: ひつじ書房.
- 秋元実治. 2011. 「文法化と主観化」, 澤田治美（編）『主体性と主観性』 93-110. 東京: ひつじ書房.
- 秋元実治. 2014. 『増補 文法化とイディオム化』 東京: ひつじ書房.
- 秋元実治・保坂道雄（編）2005. 『文法化: 新たな展開』 東京: 英潮社.
- 安藤貞雄. 2005. 『現代英文法講義』 東京: 開拓社.
- 荒木一雄・宇賀治正朋. 1984. 『英語史ⅢA（英語学大系 10）』 東京: 大修館書店.
- Berk, Lynn M. 1999. *English Syntax: From Word to Discourse*. Oxford: Oxford University Press.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Bybee, Joan. 2015. *Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. 2000. *Explaining Language Change: An Evolutionary Approach*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Curme, George Oliver. 1979. *A Grammar of the English Language. vol. II: Syntax. (3rd printing)*. Essex: Verbatim.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- 江川泰一郎. 1991. 『英文法解説』 東京: 金子書房.
- Emonds, Joseph Embley. 1976. *A Transformational Approach to English Syntax: Root, Structure-Preserving, and Local Transformations*. New York: Academic Press.
- Fukaya, Teruhiko. 1997. The Emergence of *-ing* Prepositions in English: A Corpus-Based Study. In Masatomo Ukaji, Toshio Nakao, Masaru Kajita and Shuji Chiba (eds.), *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of his Eightieth Birthday*, 285-300. Tokyo: Taishukan.
- Görlach, Manfred. 1991. *Introduction to Early Modern English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 早瀬尚子. 1992. 「分詞構文における Figure / Ground 性についての一考察」『大阪大学大学院英文学談話会』 10-22.
- 早瀬尚子. 2007. 「英語懸垂分詞における『主観的』視点」, 河上誓作・谷口一美（編）『ことばと視点』 77-90. 東京: 英宝社.

- 早瀬尚子. 2009. 「懸垂分詞構文を動機づける『内』の視点」, 坪本篤朗・早瀬尚子・和田 尚明(編) 『「内」と「外」の言語学』 55-97. 東京: 開拓社.
- 早瀬尚子. 2013. 「日本語の『懸垂分詞』的接続表現について」『言語文化共同研究プロジェクト 2012 時空と認知の言語学Ⅱ』 39-48.
- 早瀬尚子. 2016a. 「懸垂分詞構文から見た(inter)subjectivity と(inter)subjectification」, 中村芳久・上原聡(編) 『ラネカーの(間) 主観性とその展開』 207-229. 東京: 開拓社.
- 早瀬尚子. 2016b. 「分詞構文が懸垂分詞構文になるとき: コメント機能成立の条件」『言語文化共同研究プロジェクト 2015』 21-30.
- 早瀬尚子・渡邊淳也. 2015. 「英語の懸垂分詞とフランス語の主語不一致ジェロンディフの対照研究」, 和田尚明・渡邊淳也編(編) 『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』 97-179. つくば: TAME 研究会.
- 林智昭. 2013a. 「英語動詞派生前置詞の文法化に関する認知言語学的考察」京都大学人間・環境学研究科 修士論文.
- 林智昭. 2013b. 「*excluding* の用法の歴史的変化: 文法化の観点から」『言語科学論集』 19: 127-150.
- 林智昭. 2014. 「文法化した英語動詞派生前置詞の副詞的共起関係: 作例を中心に」『*KLS (Kansai Linguistic Society)*』 34: 205-216.
- 林智昭. 2015a. 「*preceding / following* の非対称性: 文法化の観点から」『日本英文学会第 87 回大会 Proceedings』 245-246.
- 林智昭. 2015b. 「*considering* の前置詞・接続詞的用法の共時的研究: レジスターの観点から」『日本語用論学会第 17 回大会発表論文集』 10: 105-112.
- Hayashi, Tomoaki. 2015. Propositionalities of Deverbal Prepositions: Differences in Degree of Grammaticalization. *Papers in Linguistic Science* 21: 129-151.
- 林智昭. 2016a. 「動詞派生前置詞 *barring* の通時的発達」『JELS』 33: 10-16.
- 林智昭. 2016b. 「『除外』の意味を表す周縁的前置詞の用法の棲み分けに関して」『日本語用論学会第 18 回大会発表論文集』 11: 73-80.
- 林智昭. 2017a. 「*respecting* の文法化と(間)主観化: 歴史語用論のアプローチ」『日本語用論学会第 19 回大会発表論文集』 12: 155-162.

- 林智昭. 2017b. 「文法指導における内容語・機能語導入の試み: 発音・意味の観点から」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』8(2): 111-125.
- 林智昭. 2018. 「前置詞随伴に基づく前置詞らしさの規定: 文法化の漸進性に関する共時的研究」『JELS』35: 28-34.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünne Meyer. 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hoffmann, Sebastian. 2004. Using the OED Quotations Database as a Corpus: A Linguistic Appraisal. *ICAME Journal* 28(4): 17-30.
- Hoffman, Thomas. 2011. *Preposition Placement in English: A Usage-based Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. 1991. On Some Principles of Grammaticization. In Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization 1*: 17-35. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, Paul J. and Elizabeth Closs Traugott 2003. *Grammaticalization (2nd edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 堀田隆一. 2016. 『英語の「なぜ?」に答えるはじめての英語史』東京: 研究社.
- Huddleston, Rodney. 1984. *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (著) 畠山雄二 (編) 藤田耕司・長谷川信子・竹沢幸一 (監訳) 縄田裕幸・久米祐介・松元洋介・山村崇斗 (訳) 2018. 『「英文法大事典」シリーズ5 前置詞と前置詞句、そして否定』東京: 開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum (著) 畠山雄二 (編) 藤田耕司・長谷川信子・竹沢幸一 (監訳) 岩田彩志・田中秀毅・藤川勝也・辻早代加 (訳) 2018. 『「英文法大事典」シリーズ7 関係詞と比較構文』東京: 開拓社.
- 石橋幸太郎他 (編) 1961. 『クエスチョン・ボックスシリーズ 第9巻 前置詞』東京: 大修館書店.
- 石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』東京: ひつじ書房.

- Jespersen, Otto. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles. Part V: Syntax (4th vol)*. London: George Allen & Unwin.
- 川端朋広. 2001. 「英語における動詞派生接続詞の発達と文法化: *provided / providing* の接続詞用法」, 秋元実治 (編) 『文法化: 研究と課題』 97-119. 東京: 英潮社.
- 川端朋広. 2010. 「*Granted* の談話標識用法」, 吉波弘他 (編) 『英語研究の次世代に向けて: 秋元実治教授定年退職記念論文集』 383-395. 東京: ひつじ書房.
- Kawabata, Tomohiro. 2003. On the Development of *Considering*: The Prepositional, Conjunctive and Adverbial Usages. In *Studies in Modern English (The Twentieth Anniversary Publication of the Modern English Association)*, 139-152. Tokyo: Eichosha.
- 菊地翔太. 2014. 「現代英語における譲歩を表す前置詞: コーパスに基づいた通時的・共時的研究」 『KLA Journal』 1: 1-16.
- 菊地翔太. 2015. 「現代英語における譲歩を表す前置詞: 英語史研究の英語教育への貢献」 『専修人文論集』 97: 375-391.
- 金水敏・高田博行・椎名美智 (編) 2014. 『歴史語用論の世界: 文法化・待遇表現・発話行為』 東京: ひつじ書房.
- 児馬修. 2001. 「周辺的前置詞 (接続詞) *save, saving* の文法化」, 秋元実治 (編) 『文法化: 研究と課題』 73-95. 東京: 英潮社.
- 小西友七. 1976. 『英語の前置詞』 東京: 大修館書店.
- Kortmann, Bernd and Ekkehard König. 1992. Categorical Reanalysis: The Case of Deverbal Prepositions. *Linguistics* 30: 671-697.
- Langacker, Ronald W. 1990. Subjectification. *Cognitive Linguistics* 1: 5-38.
- Leech, Geoffrey, Marianne Hundt, Christian Mair and Nicholas Smith. 2009. *Change in Contemporary English: A Grammatical Study*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Mair, Christian. 2004. Corpus Linguistics and Grammaticalisation Theory: Statistics, Frequencies, and Beyond. In Hans Lindquist and Christian Mair (eds.), *Corpus Approaches to Grammaticalization in English*, 121-150. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- 丸田忠雄・平田一郎. 2001. 『語彙範疇 (II) 名詞・形容詞・前置詞』 東京: 研究社.

- 松井孝志. 2012. 「新しい学習英文法の検討から見えてくる学習英文法の条件」, 大津由紀雄 (編) 『学習英文法を見直したい』 87-103. 東京: 研究社.
- Matsumoto, Yo. 1998. Semantic Change in the Grammaticalization of Verbs into Postpositions in Japanese. In Ohori, Toshio (ed.) *Studies in Japanese Grammaticalization: Cognitive and Discourse Perspectives*, 25-60. Tokyo: Kuroshio Publishers.
- 中村捷 (訳述) 斎藤秀三郎 (著) 2015. 『実用英文典』 東京: 開拓社.
- 中尾俊夫. 1972. 『英語学体系 9 英語史 II』 東京: 大修館書店.
- Olofsson, Arne. 1990. A Particle Caught in the Act. On the Prepositional Use of 'Following'. *Studia Neophilologica* 62: 23-35.
- Olofsson, Arne. 2011. Prepositional *Following* Revisited. *Studia Neophilologica* 83(1): 5-20.
- Otani, Naoki. 2013. *A Cognitive Analysis of the Grammaticalized Functions of English Prepositions: From Spatial Senses to Grammatical and Discourse Functions*. Tokyo: Kaitakusha.
- Poutsma, Hendrik. 1926. *A Grammar of Late Modern English. Part II: The Parts of Speech. Section 2: The Verb and the Particles*. Groningen: Noordhoff.
- Quirk, Randolph, Sydney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvick. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Radden, Günter and René Dirven. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Ramat, Paolo. 1992. Thoughts on Degrammaticalization. *Linguistics* 30(3): 549-560.
- Rissanen, Matti. 2000. Paths of Loan-word Grammaticalisation: The Case of *According to*. In Christiane Dalton-Puffer and Nikolas Ritt (eds.), *Words: Structure, Meaning, Function: A Festschrift for Dieter Kastovsky*, 249-262. Berlin / New York: Mouton de Gruyter.
- Rissanen, Matti. 2002. Despite or Notwithstanding? On the Development of Concessive Prepositions in English. In Andreas Fischer, Gunnel Tottie and Hans Martin Lehmann (eds.), *Text Types and Corpora: Studies in Honour of Udo Fries*, 191-203. Tübingen: Gunter Narr.
- Saito, Hidesaburo. 1932. *Monograph on Prepositions*. Tokyo: The S.E.G. Press.
- 清水眞. 2016. 「英語科学論文における能動態および受動態」, 『東京理科大学紀要 (教養編)』 48: 195-211.

- Sinclair, John. 1991. *Prepositions, Collins COBUILD English Guides 1*. London: HarperCollins.
- 住吉誠. 2016. 『談話のことば2 規範からの解放』 東京: 研究社.
- 住吉誠 (企画) 西村義樹・内田聖二 (講師) 八木克正 (コメンテーター) 2017. 「慣用表現・変則的表現から見える英語の姿」日本英語学会第35回大会シンポジウム (『Conference Handbook』 35: 279-298, 日本英語学会)
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 2011. 『歴史語用論入門: 過去のコミュニケーションを復元する』 東京: 大修館書店.
- 高田博行・椎名美智・小野寺典子. 2011. 「歴史語用論の基礎知識」, 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 『歴史語用論入門: 過去のコミュニケーションを復元する』 5-44. 東京: 大修館書店.
- 田中史哉. 2017. 「動詞派生前置詞 *failing* と慣用句 *failing that* の文法的構文化の研究」『日本認知言語学会大会発表論文集』 17: 378-389.
- Taylor, John R. 2012. *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford Academic Press. (西村義樹・平沢慎也・長谷川明香・大堀壽夫 (編訳) 『メンタル・コーパス: 母語話者の頭の中には何があるのか』 ひつじ書房, 2017)
- 寺澤盾. 2008. 『英語の歴史』 東京: 中公新書.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1982. From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-pragmatic Aspects of Grammaticalization. In Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel, (eds.), *Perspectives on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change. *Language* 65: 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in Grammaticalization, Subjectivity and Subjectification. In Dieter Stein and Susan Wright (eds.), *Subjectivity and Subjectivisation*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs. 2003. From Subjectification to Intersubjectification. In Raymond Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, 124-139. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth. Closs. 2011. 「文法化と (間) 主観化」, 高田博行・椎名美智・小野寺典子 (編) 『歴史語用論入門: 過去のコミュニケーションを復元する』 59-70. 東京: 大修館書店.

Traugott, Elizabeth Closs and Graeme Trousdale. 2013. *Constructionalization and Constructional Changes*.
Oxford: Oxford University Press.

Trousdale, Graeme. 2012. Grammaticalization, Constructions and the Grammaticalization of Constructions. In
Kristin Davidse, Tine Breban, Lieselotte Brems and Tanja Mortelmans (eds.), *Grammaticalization and
Language Change: New Reflections*, 167-198. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Trousdale, Graeme. 2013. *Gradualness in Language Change: A Constructional Perspective*. In Ramat, Anna
Giacalone, Caterina Mauri and Piera Molinelli (eds.), *Synchrony and Diachrony: A Dynamic Interface*, 27-
42. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

辻幸夫 (編) 2013. 『新編 認知言語学キーワード事典』 東京: 研究社.

内田充美. 2003. 「Brown, LOB, FROWN, FLOB コーパスの-ing 型前置詞: *including* の用法を中心に」
『女子大文学 英語学英米文学篇』 4: 101-122, 大阪女子大学 人文学科.

八木克正. 2007. 『世界に通用しない英語 あなたの教室英語、大丈夫?』 東京: 開拓社.

八木克正. 2011. 『英語の疑問 新解決法: 伝統文法と言語理論を統合して』 東京: 三省堂.

山口俊治. 2013. 『英語構文全解説』 東京: 研究社.

山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』 東京: くろしお出版.

Visconti, Jacqueline. 2004. Conditionals and subjectification: Implications for a Theory of Semantic Change. In
Olga, Fischer, Muriel Norde and Henry Perridon (eds.), *Up and Down the Cline: The Nature of
Grammaticalization*, 169-192. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Visser, Frederik Theodor. 1972. *An Historical Syntax of the English Language (2nd Impression). Part II.
Syntactical Units with One Verb*. Leiden: E. J. Brill.

Zandvoort, R. W. 1972. *A Handbook of English Grammar*. Tokyo: Maruzen.

辞書・コーパスなど

British National Corpus. Available online at <https://www.english-corpora.org/bnc/> [BNC]

Davies, Mark. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/> [COCA]

Davies, Mark. 2010-. *The Corpus of Historical American English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coha/> [COHA]

- 市川繁治郎（編）1995. 『新編英和活用大辞典』 東京: 研究社.
- 小西友七・南出康世（編）2001. 『ジーニアス英和大辞典』 東京: 大修館書店.
- Longman's Dictionary of Contemporary English (3rd edition)*. 1995. London: Longman. [LDCE]
- Longman Language Activator (2nd edition)*. 2002. Edinburgh: Pearson Education Limited. [LLA]
- 松田徳一郎（監修）1994. 『リーダーズ・プラス』 東京: 研究社.
- Oxford Advanced Learner's Dictionary (7th edition)*. 2005. Oxford: Oxford University Press. [OALD]
- Oxford Business English Dictionary for Learners of English*. 2005. Oxford: Oxford University Press. [OBED]
- Oxford Dictionary of English (2nd edition)*. 2003. Oxford: Oxford University Press. [ODE]
- Oxford English Dictionary (2nd edition, CD-ROM Ver. 4.0)*. 2009. Oxford University Press. [OED]
- 斎藤秀三郎（著）豊田実（増補）八木克正（校注）2016. 『熟語本位英和中辞典 新版』 東京: 岩波書店.
- 高橋作太郎（編）2012. 『リーダーズ英和辞典』（第3版） 東京: 研究社.
- 寺澤芳雄（編）2002. 『英語学要語辞典』 東京: 研究社.
- 寺澤芳雄（編）2015. 『英語語源辞典（縮約版）』 東京: 研究社.
- 渡邊敏郎, Edmund R. Skrzypczak and Paul Snowden. 2003. 『研究社新和英大辞典』（第5版） 東京: 研究社.